

のことである。

當時大阪市に於ける製鮎業者としては天満に菓子商の傍ら鮎の卸賣を業とする者が僅に一軒あるを知つた氏は之れならばと自信を固め愈々其の業を開始したのであるが其の結果は案外に調子がよく進み、數名の職工を雇入れて次第に手広く營業する様になつた、斯くて調子に乗り過ぎた結果は忽ちにして貸金の回收不能に陥り閉店一年後には極度の資金難を訴へ身の廻りさへ困難を感じる程に迄行詰つたが刻苦經營克く難局に堪へ、積極方針を引續めて家業の挽回に努めた結果五年の後は店舗の狭陋を感じるに至つた。

爾來家業は順調に發展し得意先も次第に増加するに至つて明治四十五年現所に家屋を買收して移轉すること、なつた現在大阪市内に於ける製鮎業者は約十名あり一日の原豆消費費約二百石に達してゐるが其の七分の一即ち三十石は氏の一軒に依つて消費して市内の主なる製業業者に製鮎を供給してゐる。

【家庭】には夫人くら(五七)氏を初め先妻の子(二)人を合して十四人の子寶を持つ卯(二六)君、輝雄(二三)君、正直君(二二)七郎君(一六)、八郎君(一一)等の男子の外に千代(一九)、惠美

(一四)の諸女がある。氏は元龜石と稱したが兵役除けの爲めに内原姓を名乗るに至つた、氏は投機的行爲が道樂、常に先物の思惑をやつて失敗をくり返してゐる。「これがなければ今日で莫大の富を積んでゐるのだが」とは氏の述懐である。

### 松本久長氏

【現住所】大阪府北河内郡牧方町岡

【出身地】西牟婁郡鮎川村

【出生】明治二十八年一月一日生

氏は西牟婁郡鮎川村の出身、縣立田邊中學校を卒業して第六高等學校に進み更に京都帝大工學部電氣工學科に入り大正九年卒業の工學士、大正十五年和歌山水力電氣株式會社に入社し大正十二年には電氣事業視察の爲め歐米各國を巡遊して十三年六月歸朝したが和歌山水力が京阪電鐵との合併成立となりて氏は本社に勤務することとなり爾來同社の電力課の主任技師として蘊蓄を傾けて居る。

【家庭】夫人延子(二四)さんは和歌山高女の出身、長女操子(一六)さんの三人家内

趣味——は野外運動が好き。

### 西康夫氏

【現住所】京都市上京區大將軍町四二

【出身地】那賀郡安樂川村字市場

【出生】明治二十二年四月生

氏は那賀郡安樂川村の出身、幼にして父に伴はれて大阪に出て、明治三十九年府立北野中學校を卒業して第三高等學校に進み後ち東京帝國大學醫科大學藥學科に入り大正四年卒業す。大學卒業後直ちに警視廳衛生部技手となり、大正六年三月京都府技師に榮轉し爾來引續き京都府警察部衛生課に勤務し正六位に叙せられ現に衛生試験場長の職にあり。  
【家庭】には夫人楚江子(四〇)さん長女絢子(九)さん長男照夫(三)君の四人暮し、父安三郎氏は大阪市に隱居してゐる。

### 中家那良吉氏

【現住所】大阪府東區内久寶寺町三丁目

全紀州人傳外活蹟史

### 中家那良吉

氏は紀州熊野川奥敷屋村の出身、性剛膽にして仁俠に富み熱と力を合せ持つて而も涙詭い人である。

小學卒業後漢學者玉置嘉三郎氏の私塾に學ぶこと四年青春にして郷土を跡に身を教導職に奉じ神教の布教に始終したが日露戰役の際徴されて第二軍に従軍し金州南山の戰を初の各所に奮戦苦闘して武功赫赫々勳七等功六級に叙せらる。  
機を視るに敏なる氏は、大正三年鋼鐵の伸立を始め忽ちにして巨萬の利益を得て同郷者間に羨まれたが大正九年にパーニツクに遭つて、相當の打撃を受けるに至り、更らに勇猛、努力を盡して、爾後神戸の乾新兵衛氏京都の田中善八氏などの後援に金融業を營み現に盛大に營業して居る。

【家庭】は社交に長けたる、夫人陸子さん(四七)によりて一切を切り廻され長女繁子(三三)さんは大阪高商出身の秀才、圓藏君(三三)を婿に迎え大阪製版會社に勤務の傍ら寶塚にて榮屋と稱

する雜貨商を営むで居る。二女奈良子さん(二五)は岸和田市に高舗を構え不動銀行に勤務せる清氏(三二)を夫君に迎へ何れも圓滿な家庭として羨望の的となつて居る。

### 石橋辰次郎氏

【現住所】 大阪市天王寺區大道二丁目  
【出身地】 那賀郡上岩出村西國分  
【出生】 明治十四年十月九日生

氏は那賀郡上岩出村西國分の出身、明治十四年十月岩橋嘉右衛門氏の四男に生る小學校卒業後暫し家に在つて業に従事したが十七歳の時職に期する所あり京都に上つて同志社に學び明治三十五年第三高等學校に入り後更らに京都帝大獨法科に入學して四十一年優等の成績を以て卒業し直ちに司法官試補となつて名古屋、長崎等に勤務の後四十三年大阪地方裁判所檢事に任せられて職に在ること六年、大正四年官を辭して辯護士を開業し又大阪土地會社、千日前土地會社、木津川土地會社等に取締役となつて經營の樞機に參與した外、大阪市内に於ける著名なる會社、銀行等に其の顧問を囑せられた。大正十一年には大阪市

會議員に擧げられ又大阪都市計劃地方委員を命ぜられて市政に盡瘁するところあつた。

【家庭】には夫人セイ子(四三)氏長男實君、長女てるさん外に三女あり實君は今年天王寺中學校を卒業して専ら上級學校の受験準備中、又てるさんは清水谷高等女學校に通つて居る氏は又昨年濱寺公園に廣莊な別宅を造つて以來多く此所に閑居してゐる

### 山本忠太郎氏

【現住所】 大阪市浪速區惠美須町四丁目  
【出身地】 有田郡岩倉村大字栗生  
【出生】 明治二十九年三月生

氏は有田郡岩倉村の出身明治四十五年十六歳の時大阪に出て松屋町の某菓子製造所に奉公したが二十歳の時主家の没落の爲め暇を取つて暫く同郷人の許に身を寄せてゐた。當時氏は滿期に近ずいた積立貯金(二百圓)中漸く百二十圓だけの拂戻しを受けて之れを資本に惠美須町三丁目に家を借り、實弟を相手に菓子の製造を初めること、なつたが其の翌年徴兵檢査に合格し家を弟と郷里から呼び寄せた家族にまかせて入營二年歸宅してゐ

ると其の不在中に六百圓の貯蓄が出来てゐた、氏は更らに之れを資本に加へて家族一致協力して漸次家業の隆昌に努め次第に手廣く營業する様になつたが其の時思ひ掛けない六百圓の貯金の出来てゐたのを見た嬉しさは口に盡されなかつたさうだ。斯くて大正九年現住地に移轉し新しい試みとして始めて電

山本忠太郎

熱を使用して大量製産を企て工場全部を電熱式

に改め現今では一日百キロの電力を消費し、其の生産高五百貫に達し、大阪市内は勿論殆んど全国的に卸賣をしてゐるといふ盛況である。

氏は兩三年前和歌山公園に於て展覽會開催の節電熱裝置の製菓實況を出品して和歌山市の同業者に電熱使用を奨励したことがあるが大阪市内に於ても氏の電熱製菓に教へられ電熱式に改良した者が既に多數を數へて居る。

【家庭】には夫人よしの(二七)さんとの間に一男一女あり、舎弟安次郎氏は同町三丁目菓子小賣商店を営み傍ら氏の帳場をしてゐる、父母は今舎弟の店に住んでゐる。

### 佐田譚洋氏

【現住所】 京都市下京區東洞院後小路下ル  
【出身地】 伊都郡大谷村宇新在郷  
【出生】 明治十五年九月生

氏は伊都郡大谷村新在郷の産、大阪府立第一中學校卒業後大阪府立高等醫學校に入りて、明治四十年卒業して後ち大阪市京町堀四丁目に於て開業し又郷里にも暫く歸省して診療に従事したが大正七年京都に出て黒門町に診療を開始し其後更らに京都帝國大學に入つて専門の研究を重ね昭和二年醫學博士の學位を得た、其の主論

佐田譚洋

文は「前庭性眼球震盪の力學的觀察」といふのである氏は昨年現所に居を構へて耳鼻咽喉科を専門として花々敷く開業し爾來専心診療に精進して居る。

【家庭】には夫人素子(三八)氏長男春洋(一七)君——府立一中に——外一人あり。趣味は多方面に亘るが深入りしない方であると。

### 田中楠之丞氏

【現住所】大阪府下豊能郡豊中町小松通  
 【店 舗】大阪市東區北久太郎町三  
 【出身地】和歌山市新中通三丁目  
 【出生】明年二十五年四月生

商都の中央三品ビルディングの階上に泰然として陣取り、綿糸布取引に神出鬼没の快腕を揮ふて前の三品取引所理事長秋岡氏の御曹子を背景に虎視眈々財界の風雲を凝視する人に我田中楠之丞氏がある。

氏は和歌山市の出身者、質商を営む素封家の長男として成育した、明治四十五年和歌山中學校を卒へると、笈を負ふて東京に出で、慶應大學理財に學び大正五年卒業した、氏が今秋岡氏と相知るに至つたのは即ち慶大時代の級友として肝膽明照の親交に始まつたのである。

慶大在學中素封家と誤はれた氏の家は不幸にして傾き初めた家運の挽回に希望の胸を躍らした氏は、慶大を卒業すると大阪に來つて輸出綿布商和田爲次郎商店に勤務して其の支配人とな

り歐洲大戰の餘惠を受けて我國綿糸布界が騰き返つた好潮時に際しては自ら北滿ハルビンに出馬して活躍又活躍敏腕を揮ふ事屢々和田爲商店の第一線に身を躍らした氏の奮闘時代は實に此時であつたものと思はれる。

大正十一年和田爲商店を辭して後は依然として綿糸布業界に身を留めて現今

では三品ビルの階上に本城を置



き綿糸布取引に奇手を延して慧星の如くに輝いて居るが「天は自ら助くるものを助くる」氏の今日の活動場裡、背後に巨頭秋岡氏の控へて居るものと雖ども、亦以て氏が過去に於ける奮闘と努力とが氏をして今日の地盤を得せしめたものに外ならない。

氏は性温厚にして八面玲瓏決して人を外らさず又種々の氣骨を備へ「自己を知る者の爲めに死す」の麗しき心情あり、趣味は至つて汎く就中魚釣は其の最も好む所休日等には欠かさず釣竿を持つて楽しんでゐる。

### 土岐陽三氏

【現住所】大阪市住吉區南田邊町二七四  
 【出身地】有田郡湯淺町字湯淺  
 【出生】明治二十二年五月生

氏は有田郡湯淺町の産、曾て第五回内國勲業博覽會が今の天王寺公園一帯の地に開催された頃、一家を上げて大阪に移住した。夫れは氏が未だ十一歳の少年であつた、後市岡中學校に學を卒へ、二十一歳にして初めて大阪市役所に勤めることになつた、明治四十四年植村俊平氏の市長時代、學區廢止問題が實際的の運動となつた初めから此の方面の事務に携はり爾來今日まで前後二十年の永い間教育部に勤務して學區廢止事務に専念して來たのである、氏は其の間明治四十五年裁判所書記登用試験に及第し大正五年には關西大學專問部法律科を卒業し同十二年辯護士試験に合格するなど繁激極まる役所の事務に精勵する傍としては尠からぬ努力を重ねたものである斯くて同十三年には大阪市主事に昇進するに至つたが現に教育部建設計劃保主任として恪勤精勵を盡して居る。

### 那須勉次郎氏

【現住所】大阪市天王寺區堂ヶ芝町七八  
 【出身地】西牟婁郡田邊町下屋敷町  
 【出生】明治十五年六月生

氏は明治三十四年縣立田邊中學校を卒業して後東京に遊學し第一高等學校を経て四十四年東京帝國大學法科大學政治科を卒業し、大阪に來つて以來各種の業務に従事すること幾年、大正十年日高紡績會社に入社し専ら大阪方面に於ける同社の事務を管掌してゐる。



【家庭】には夫人ふさ(三八)さん、長女眞佐子(一四)さん長男慎平(一〇)君あり眞佐子さんは、府立夕陽ヶ丘高女に通つて居る趣味——氏の趣味は各方面は亘つて極めて廣汎であるが就中俳

句を好み義太夫を聴くことを樂みとし又和中野球團の隠れたる而て熱心なる聲援者を以て任じて居る。

近 咏 二 句

○朝寒や酒の荷揚ぐる八軒家

○山に住めば山の幸あり舛紅葉

【家庭】夫人頼子(三六)さんは北河内郡津田村春日の産、長男鶴生君(九)長女富美子さん(七)あり又郷里箕島町には父母(木伴)共に健在する。

### 木村順一氏

【現住所】 大阪市浪速区戎町三丁目六三

【出身地】 有田郡箕島町字箕島

【出生】 明治二十年八月生

氏は曾て小學校に教鞭を執り、後方向を轉換して法曹界に志した人、明治四十一年和歌山師範學校を卒業の後郷里箕島小學校に奉職し、大正七年博多市の小學校に轉じて九州に足を止めること二年有餘後更らに大阪に來つて市立小學校及び生野中學校に教鞭を執り其の傍ら關西大學に入つて大學部商業學科を修め勤勉力行大正十三年辯護士試験に合格す茲に前後十有七年に亘る教員生活を切り上げて大阪地方裁判所所屬辯護士として法律事務所を開き爾來業務に専念して居る

### 鬼城繁太郎氏

【現住所】 大阪市東成區新喜多町三〇七

【出身地】 東牟婁郡新宮町谷王地

【出生】 明治廿三年九月十八日生

氏は幼時、熊野川奥十津川に於て小學教育を受け後、明治四十四年志を立て、大阪に出で種々の業に従事して辛苦を重ねること幾年其の間硝子類の製造に興味を覺へ大正六年獨立硝子照明器の製造を開始するに至つたが爾來刻苦經營事業の發展に努力し日に盛大に向ひ現に氏の工場に於ては百餘名の従業員を役して盛んに其の製造に従事し大阪市内著名の問屋に供給し最近一ヶ年の製産額十數萬圓に達して居る。  
【家庭】には夫人リウ(三三)さん長男啓一(九)君、二男輝(八)君長女克子(五)さん等あり。

### 久徳幸一氏

【現住所】 大阪市北區大工町四六

【出身地】 有田郡廣村字廣

【出生】 明治二十七年二月生

氏は有田郡廣村の産、久徳重藏氏の長男に生る父重藏氏は郷里に於て醬油の醸造を業として居つたが氏の幼時家業に失敗して廢業するに至つたので氏は十四歳の時(明治四十三年)初めて大阪に出で北區天滿橋北詰小森鐵工所に奉公すること十有餘年其の間鐵工業の習藝を積み二十五歳の時主家を辭して空心中に店舗を構へて機械商を開業すること、なつたのは大正七年の春である、爾來刻苦經營業務の發展に努力して居るが、其の傍ら氏は夙に自動車用品の有望なるに着眼して其の販賣を開始したが、漸次順潮に發展して案外の好成绩を收め現今にては殆んど全国的に手を延し現に大阪、東京兩都市に於ける同業者間に名を識られるに至つた、氏は曩きに業務の發展に

### 久徳幸一

氏は西牟婁郡生馬村木村民藏氏の三男に生る。小學校卒業後田邊教員養成所修業の上志を立て大阪に出で川島タオル店に奉公して商道の見習をなし越えて明治四十二年和歌山歩兵第六十一聯隊に入隊し成績優良の故を以て大隊本部附看護長勤務に昇進し退官後明治四十五年二月現業帽子卸問屋を開業するに至る性温厚篤實にして主家在勤當時より得意先の信用厚く、開業當年既に年賣上高二十萬圓を算し爾來健實に發展を示し現在店員二十名を使用し年賣上登百萬圓に達す氏は既に巨萬の産を積ん

### 松下善七郎氏

【現住所】 大阪市東區博愛町二丁目六〇

【出身地】 西牟婁郡生馬村

【出生】 明治二十二年二月生

伴ひ大正十四年の末には現所に移轉して店舗の擴張を行ふ等今や新陣容を整へて更らに大活躍を期して居る。  
【家庭】には父重藏氏(六七)夫人静子さん(二六)長女道枝さん(六)あり。  
趣味——として氏は最近謠曲に熱中して居る。

で同業者中有数の商店と呼ばれ大阪帽子商組合代議員に推されて居る氏も亦立志傳中の人である。

### 鈴江鶴之助氏

【現住所】 大阪市西成區千本通五丁目  
【出身地】 伊都郡應其村伏原  
【出生】 明治二十三年一月生

氏は伊都郡應其村の出身中學校を卒業後十八歳にして大阪に出で富島町の海運業和合社に入り、間もなく大阪商船會社所屬船に乗組むこととなり其の後大阪高等海員養成所に學んで船長の免狀を受得し海上生活に日を送ること前後八年、大正六年に

は船を捨て、海運業株式會社田淵商店に入社し

爾來業務に専念して今日に至つたが氏は現に田淵商店支配人として業務の樞機に關與して敏腕を揮つて居る。

【家庭】には夫人みづ(二九)子、長男亨(一〇)君長女千代子(八)さんあり極めて圓滿である。

趣味——氏は灘の芳淳に舌を打つ事頗る妙であひが傍ら玉突位に興じて居る。

### 佐野正規氏

【現住所】 大阪市西區阿波座中通二丁目  
【出身地】 郡賀郡田中村字打田  
【出生】 明治二十九年一月生

氏は郡賀郡田中村佐野澤之助氏の次男、嚴父は皮膚、瘡毒科の専門を以て有名な居村打田の佐野病院長である。氏は大正二年卒業の縣立粉河中學の出身同校卒業後府立大阪醫科大學に學び十一年卒業と共に附屬病院に助手となつて専ら皮膚科の研究をなし大正十三年私立島海疫研究所に於て血清學を研究すること三ヶ年大正十五年九月京都帝大醫學部附屬病院に入つて皮膚科に勤務して臨床上の習熟を積むこと少時にして更らに外科學研究室に於て研究中たま／＼大阪市に開業中の令兄秀夫氏の病没に遭遇し令兄の跡を繼承する意味の下に昭和二年五月大阪に來つて現所に開業し皮膚科を専門として自宅診療に従事すること、なつた、が氏は昭和三年一月補体結合反能の研究」を題

する主論文外二三の副論文を京都帝大に提出して醫學博士の學位を授けられるに至つた。

【家庭】には夫人すみ枝(二八)さんとの間に長男榮春(八)君を頭らに三子ある、因に氏將來父の業を繼いで郷里佐野病院を主宰するに至る筈である。

### 木村信秋氏

【現住所】 大阪市西區江月堀南通二丁目  
【出身地】 和歌山市八番丁  
【出生】 明治十八年十一月生

氏は海草郡和佐村井ノ口の生れ十二歳の時和歌山市に出で、本町二丁目大野屋呉服店に奉公したが氏が十五歳の時主家の失敗の爲め店を出で、同時に獨立呉服商を開業した主家の番頭土田氏の下に、身を寄せること、なつた、明治四十四年同市八番丁に居を構へてメリヤス生地製造を開始して熱心に奮闘を續け大正五年紀伊メリヤス株式會社の創立に参加して自己の工場を提供して會社の設立後常務取締役選ばれて専ら經營に當る

こと、なつた。大正十一年紀伊メリヤス紡績株式會社の設立と共に氏等の會社も亦之れに併合するに至り社長故垣内太郎氏と共に引退して大正十一年大阪に出でメリヤス生地問屋を開業し爾來刻苦經營業務に努力しつゝ、あるが開業以來順調に發展し現在にては同業者中に名を知られるに至つた。

氏の店舗は氏を始め家族全体の合名會社組織とし一家を舉げて無限の責任を負ふて業務の經營に當つて居るが現代商人の多くが合資會社を組織して殊更らに其の無限責任社員には無資力者を選定して社員全体に責任の波及せざることに劃策をめぐらすもの、渺からざる際氏の如きは商業道德上模範とするに足るものであるまいか。

【家庭】には夫人八重子(三三)さんを始め二男二女あり長女豐子(一八)さんは和歌山高女を卒業して今家庭に長男又雄(一五)君は現に和歌山中學校に在學中趣味——として野球を好み著名なる試合には業を捨て、でも觀覽に出掛ける程の熱心家である。

### 岸 義 質 氏

【現住所】 大阪市東淀川区中津本町一丁目  
【出身所】 和歌山市港通町  
【出生】 明治十八年十二月生

氏は和歌山市の出身明治三十六年和歌山中學校を卒業後大阪高等工業學校に學び四十二年七月機械科を卒業して直ちに特許局に職を奉ずることとなり勤続五年にして大正三年全局を辭して大野式特許品合資會社に招かれて其の技術員として入社したるも大正五年全社の解散と同時に鐵道院に就職したが其の翌年職を辭して大阪

### 岸 義 質

職を辭して大阪に來り以來辯理士を業として今日に至つたのである。氏は學校卒業以來多年特許局にあつて常に机上の事務にのみ没頭したる爲め將來「エンジニア」として實際生活に親しまんとして鐵道院大井工場に染業職を志し又轉じて再び筆墨の境涯に身を委ねて以來既に十有五年専ら工業所有權に關する職務に従事することとなつた氏は、あくまでも此

の道の人として將來重きを爲すに至るであらう。  
【家庭】夫人晴氏は和歌山實科女學校の出身繪畫を克くして才媛の譽れたがい。

### 小西 松 太 郎 氏

【現住所】 大阪市西區新町通三丁目  
【出身地】 那賀郡東貴志村井ノ口  
【出生】 明治十年六月生

氏は明治十年六月那賀郡東貴志村井ノ口小西儀助氏の長男に生れた氏の家は木綿主として紋羽などの織布を業として居つたので氏が成長すると家に在つて其の業に従事することとなつたが明治二十九年の末大阪に志して紡績用器具類(木管)の製造販賣を事業とする會社に入りて之れを見習ひ三年の後三十二年難波に工場を設け又清堀に店舗を構へて自ら木管の製造販賣を開業するに至つたが豫期の成績を挙げ得ざるまゝに經營を續けつゝあつた時たま／＼日清戰後に至つて紡績業が不況に沈み氏の事業も從つて經營困難となつたので一先事業を廢することとなり、氏は蒙て知遇を得て居る菊地恭三氏(現紡績聯合會長)に

教へられ紡績機械類——主として古きもの——賣買の有利なるに着眼したが機械に對する智識を有せない氏は自ら西の宮の日本紡績會社に日給金二十五錢也の男工となつて實地に研究を積む事約半歳、工場長(中田龜一氏)の諒解を得て會社の一偶に修理工場を設けて會社の機械の修理を引受けたが氏は之れに依つて相當の利益を收める事が出來た。

其の後氏は會社から落綿や油綿を買ひ受けては之れを市内の製綿業者に賣捌き可なりの收入を擧げる事となつたので愈々西區の江戸堀に店舗を構へて新陣容を整へた其後明治三十五年頃丁度大阪附近の紡績會社では機械の入れ替を行ふものが相次いで現はれた時氏は愈々紡績機械の賣買を専業とすることとなり之れ等の古機械を全部一手に買ひ占めてしまつた。翌三十七年には日露の國交が斷絶して兩國の戰端が開始されると戰勝氣分も手傳つて我國の財界は昨日に變る好況となり中にも紡績事業は特に殷盛を極めたので紡績機械類は天井知らずの暴騰を演出し氏は之れに依つて一躍巨萬の利益を收めるに至つた。氏は西道頓堀に移轉して業務の擴張を圖つたのは此時の事である。之れに味を占めて氏は勇氣百倍騎虎の勢を以て各方面に手を出

したが其の結果は諂も失敗に終つた。

明治四十三年頃から又々機械の賣買に従事することとなり其の傍ら手持の紡績を据付けて、オポロ糸の製造を開始し、好成績を收めて相當の利益を上げることを得た。世は明治から大正に移るに及んで紡績事業界に再び不況の兆候が現はれ氏の事業も亦閑散を告げる事となつた。此時氏はたま／＼港區の大地主辰巳屋の女主人和田あい氏から市岡方面一圓に亘る其の所有土地三十萬坪の處分方を託せられて、之れを引受け菊地恭三、南楠太郎等紡績關係の知己十數名に分割賣却して渺からぬブローカーレージを得るに至つた其の際處分残りとなつた土地を南楠太郎氏等と共に資本金五十萬圓の株式會社を創立して土地經營を行ふ事になつたのであるが、現に土地企業界に稀れに見る好業績を擧げて居る市岡土地株式會社は即ち是れである。其後ち又和田氏から更らに土地を提供せしめて木津川土地株式會社を創立して代表取締役選任せられ専ら其の經營に當ることとなつたが我國に於て土地會社の創立に従事した者は實に氏を以て嚆矢とする大正七年には斯の有名?な大東土地株式會社の創立に参加して取締役に就任し其他、信貴山土地會社の社長を始め

二三の土地會社にも關係した、氏は又大正十四年大阪市會議員に擧げられ市民會の領袖として現に副議長の椅子を占めて居る其の前半世を通じて波瀾曲折に富むもの蓋し氏の如きは其の最たるものであらう。

【家庭】には夫人美佐子(三二)さん長女節美さん(二三)長男行明君(九)外一男一女あり、美佐子夫人は和歌山實科女學校の出身又長女節美さんは現に羽衣高女に通つて居る。

### 石浪日出夫氏

【現住所】堺市瓦町八七三  
【出身地】西牟婁郡田邊町  
【出生】明治十七年四月生

氏は西牟婁郡田邊町の出身明治四十年東京に遊學して東京物理學校に學び四十三年師範部數學科を卒業した人、大正二年佐賀縣立小城中學校教諭に任せられたのを振り出しに、大正六年には大分縣立宇佐中學校に大正九年には兵庫縣

### 石浪日出夫

立工業學校に同十二年には兼任待遇となつて福岡縣立商業學校に歴任し十三年堺市立高等女學校に轉じて正七位に叙せられ高等官六等に昇進するに至つた。其の間教職に身を投じて既に十有五年今や圓熟せる教育者として父兄に信望せられて居る。  
【家庭】夫人くにゑ(三九)さん(は同郷の出身)息女ふみ子(一五)さんは天王寺高女に通學中。趣味——寫眞は氏の得意とするところ此の道には相當苦心を重ねたといふ事である。

### 田中増吉氏

【現住所】大阪市港區泉尾濱通四丁目  
【出身地】東牟婁郡新宮町  
【出生】明治十三年十一月生

氏は東牟婁郡新宮町に生れ、小學校卒業後家にあつて農業に従事したが明治三十九年兵役義務終了の後大阪に出で紀陽木材株式會社に勤務し在勤三年にして社を辭して泉尾濱通四丁目に於て初めて製材業を開始し以來工場を移すこと前後二回、大正九年三度び泉尾濱通四丁目に移轉して益々業務に精勵して居る現在に於ては北洋材の製板を主とし、一ヶ年の挽材七萬石内外

を示して居る、氏は明治三十三年大阪歩兵第三十七聯隊に入營し日露の役には豫備として出征し第三軍に屬して南山の戦を踏み出した、沙河の大會戦に至るまで各所に轉戦し凱戦後勳八等に叙せられるに至つた。

【家庭】妻女安(四〇)氏との間に長女増幸(一一)さんの外二男あり、趣味としては圍碁、球突等

### 廣尾楠之助氏

【現住所】大阪府泉北郡濱寺町羽衣  
【出身地】那賀郡東野上町小畑  
【出生】明治十九年八月生

氏は明治三十九年卒業の和歌山中學の出身者、和中卒業後大阪高等商業學校に學び四十二年卒業後直ちに大日本麥酒株式會社に入社して大阪支店に勤務し爾來今日に至るまで在勤既に二十年其の間工場

法施行の後は主として工場内の

人事關係事務を管掌して法令に基きて工場組織の整備に力を盡

し又大正八年には販賣課に轉職し以來専ら製品の販賣に努力を續け現に大阪支店主事として販賣課の實務を切り廻して居るが今や同社の中堅社員として活動の第一線に躍出して其の前途を期待せられて居る。  
【家庭】夫人初榮(三五)さんとの間に長女幾子(一一)さん二女壽子(一〇)さん三女繁子(五)さんあり又嚴父伊助(七六)は令兄と共に郷里に在住する。趣味——としては球突に將棋

### 大橋兵次郎氏

【現住所】大阪市此花區西島町(北濱住宅)  
【出身地】日高郡西内原村小中  
【出生】明治二十七年生

氏は日高郡西内原村の産、耐久中學校を経て大正九年大阪醫科大學を卒業し一年志願兵として軍費を全ふしたる後大正十二年當時大阪醫科大學外科教室では鳥濱博士が京都大學に轉任の後を嗣つて獨逸伯林大學からフリッツ・ヘルテル教授が來任したので氏は早速其門下に參し爾來今日に至るまで大學外科教室

に在つてヘルテル教授の指導を受けて専心臨床上の研究を積むと共に一面氏は獨りに血液の研究に従事して論文を發表して醫學博士の學位を授與せられた。

氏は本年三十五歳引續きヘルテル博士の研究室に俗塵を避けて人類社會の爲めに何物かを貢獻せんと努力して居る。氏今日までの研究は全く獨創的のものであつて研究室に於ても誰人の指導も受けず自ら精進し若し研究上何事か失敗等をすれば人は

# 大橋 孝三

目を避けて沈思  
黙考すること二  
三日、其の都度

ヘルテル教授から「夫れが君を偉くするものだ」と温情を以て慰撫せられる氏の爲めには實に此の言葉が恩師から與へられる唯一のテーマである。氏は濃厚堅實の青年外科醫として明晰なる頭腦と不拔の研究心とを持つて郷土のため將來の活躍を期待する。氏には兄弟なく數年前嚴父を亡ひ今、郷里に在住する老母マエ氏の一人息子であるが氏は又孝心極めて厚く常に一人の老母を大切に孝養を怠らない。

【家庭】愛子夫人は東京の産れ大正十年東京跡見女學校卒業の才

媛で宗教に心厚く長女保子(四)次女和子(二)の二女を養育して圓滿なる家庭を營み温順よく夫君を援けて和氣みなぎつて居る

# 岡田 千恵松氏

【現住所】 大阪市東成區中宮町五〇七  
【出身地】 有田郡藤並村字岡田  
【出生】 明治十二年十月生

氏は有田郡藤並村の産、小學校を卒へると十三歳にして和歌山市に出て菓子製造商に奉公し勤続十二年菓子の製造を習得して二十五歳の時主家を退き日高郡御坊町にて菓子商を開業したが僅に三年にして店を畳み志を立て、大阪に出て血縁に當る人を手寄つて足を止めメリヤス工場に勤めることとなつた。

後四年特種メリヤス製造の有利なるに着眼して更らに京都に赴き、メリヤス肩掛の製造を以て當業者に知られて居る林肩掛製造所に勤め、以來斯業に精進すること十有三年終始一貫して習熟に努め大正十三年主家を辭して、大阪に來り東成區内代町に居を構へて自らメリヤス製肩掛けの製造を開始するに至つた、此の時の資本としては僅に主家を辭するに當つて主人から

贈與せられた一千五百圓に過ぎなかつた之れを唯一の資本として古機械二臺を据付けて愈々其の業に着手したのが抑も今日の盛況を見るに到つた第一歩である。氏は多年の經驗と不斷の努力とを以て刻苦經營業務に盡瘁した結果は開業以來豫想外の成績を收めて創業後僅に三年にして現所に家宅及工場を新築して此所に引移り工場を擴張して製産の増大を圖り現今にては十臺のメリヤス機械を据付けて盛んに製造を行つて居る。

氏は一面郷里の爲めには常に盡瘁して金錢を惜まず社寺、村役場等に關する事務には家業を捨て、之れに奔走するなど其の關しき行爲は稱讚に値する。

【家庭】夫人きく(四一)氏との間に長女はる枝(一五)さんあり府立寢屋川女學校に在學中又郷里には老母きよ(八六)氏の外兄妹等在住して居る。

# 山 野 巖 氏

【現住所】 大阪市北區梅ヶ枝町一九九  
【出身地】 那賀郡四寶志村字岸宮  
【出生】 明治三十二年三月生

氏は曾て縣立粉河中學校に學んだが半途にて大阪に出て同郷

# 山 野 巖

出身の法曹界の先輩津田勅氏の事務所に着食して事務員となり夜間僅に少暇を得て二三の學校に勉學を積む事一年餘大正六年には關西大學に入學して愈々法律を専攻する事となつたが同九年卒業すると直ちに上京して更らに法政大學に

研究を積み大正十年辯護士試験に合格して大阪に歸つて津田法律事務所にて實務の習熟すること滿三年、大正十四年には獨立して現所に辯護士を開業し爾來法律事務に専念して居る。氏は頭腦明晰青年辯護士として將來に多大の期待を囑されて居る【家庭】夫人美佐子(二四)さんは大阪辯護士界の先輩乾吉次郎氏の息女才媛の聞え高い。

# 西 村 歡 一 氏

【現住所】 大阪市東淀川區本庄川崎町二ノ七  
【出身地】 海草郡板付字板濱  
【出生】 明治二十年二月生

氏は十九歳にして海軍志願兵として吳海兵團に入團し一等機



關兵曹に昇進して大正七年三月除隊された人、の間同氏は選抜されて横須賀海軍機關學校に學ぶこと二回、電氣術科の普通科及び高等科を卒業して電氣機關に關する素養を積み又其の海上勤務中明治四十二年には軍艦筑波に乗組員として歐米各國を巡航し後再び生駒に乗組んでアルゼンチン獨立百年祭に參列し歐洲諸國を巡航する等歐米諸國の實況を見學して新智識を漸養し後日獨開戦さる、や丹後乗組員となりて青島の攻撃に參加し青島の陥落に至る

### 西村 秋一

まで軍務に服して勤七等に叙せ

らる、に至つた。大正七年大阪に出で、大阪染工合資會社に入社し主として機關部、電氣部等を擔任し其の傍ら工場の人事に關する事務を兼務すること、なつたが工場の擴張に伴ひて大正十一年人事部に専任となり爾來引續き職務に精勵を續けて居る【家庭】夫人長幸(二八)さん、長男常弘(九)君外二男あり、又老母かつ(六四)氏は現に郷里に健在する。

### 西村 信三氏

【現住所】 大阪市東淀川区十三南之町六〇七  
【出身地】 海草郡飯村大字飯濱  
【出生】 明治十三年二月生

氏は明治三十一年和歌山縣師範學校を卒業して箕島高等小學校に教鞭を執る事二年、三十三年飯草常高等小學校に轉じて校長に昇進し以來教職に従事する事十有五年、其の間郷里の青年兒童の訓育に不斷の努力を盡して其の徳望を稱揚せられたが大正三年職を退いて居村に閑居する事となり後、大正九年大阪に志して市居染工所に入社し爾來引續き同所の人事係長として人事に關する事務を管掌せられてゐる。氏は温厚にして誠直、多年教育界に培はれたる人格を以て社内の信望を集め居る。

### 西村 信三

【家庭】には夫人てる(三九)氏長女加壽代(二二)さん二女かをる(一七)さん長男死亡次男信彦(二三)君三男俊信(一一)君あり、

加壽代さんは梅花高等女學校の出身、かをるさんは現に正和高等女學校に通つて居る。趣味——として氏は特に旅行を好み家にありては盆栽、園藝を樂みとする。

### 西 輝海氏

【現住所】 神戸市兵庫中庄一丁目  
【出身地】 西牟婁郡本町  
【出生】 明治十六年六月生

氏の父は西惠迪氏と稱し西牟婁郡本町に於て醫を業とせる人、氏は其て二男として生れ小學校を卒へると將來軍人たらんと志して東京に遊學し、成城中學校に學んだが修學中健康を害するに及んで其の體質軍人に適せない事を悟り心機一轉自ら父の業に従ふべく決心し中學卒業するや京都に來つて府立醫學專門學校に入り明治四十年卒業するに至つた。

氏は其の後直ちに内務省防疫官を拜命して兵庫縣警察部衛生課に勤務すること、なり就職後間もなく腸チブスに感染して自ら傳染病の危険なるを體驗し、以來防疫事務の緊切なるを痛感して一層職務に奮闘するに至つたが大正二年職を辭して神戸市

### 隅田 豊吉氏

【現住所】 奈良縣宇智郡牧野村  
【出身地】 那賀郡池田村豐田  
【出生】 明治八年六月十五日生

氏は那賀郡池田村の出身曾ては和歌山中學校に學び卒業するや自由派に屬して侃諤の論を吐いて政治に嘴を染め、時には村

### 西 穂海

下山手通三丁目に居を構へて自宅診療を開始した後ち間もなく兵庫今在家に移り前後十有餘年専心診療に従事して患者の信頼を受くること日に厚く昨年又現所に移つて以來更らに業務に精勵して居る氏の専門は内科及皮膚科であるが細菌の研究は其の得意とするところ、斯界に於ても稀に見る手腕家である。

【家庭】夫人蕨(三五)氏との間に一男二女あり長男龍太(二三)君は縣立第一中學校に在學中  
趣味——氏は性極めて快活低酌微黨を帯ぶれば大に話し又大に唄ふ。

會議員となり或は村長に推されて村政に盡瘁し或は又郡會議員となりて郡政に參與する所あつたが後縣會議員に推されて當選すること二回恒に正義公論に立脚して縣政に盡瘁し七十萬縣民の福利を圖り縣會議員中に毅然として光彩を放つたのは今尙ほ縣民の記憶に新なる所である。大正六年寺内内閣の議會を解散するや總選舉に際して衆望を負ふて代議士に當選し、日比谷政權に聽屬すること幾年大正十三年清浦内閣に依つて議會の解散を見るに至つて再び代議士の榮冠を得、其の任期中關稅改正案に就て奮闘して生糸業界の爲めに盡瘁され政治家としては稀れに見る廉潔の士である。

氏は又製糸業者として地方産業の爲めに活動すること多年大正八年には組織を變更して五條製糸株式會社を創立し、自ら社長となつて其の經營に當つて居るが曩に政府保護の下に帝國製糸株式會社の創立委員となり會社設立後は取締役選任せられて其の經營の樞機に參劃して居る外最近に至るまで製糸同業組合中央會製糸格附調査委員を囑されて、製糸業界の爲め盡瘁されたこと亦尠くはない、現に氏の主宰する五條製糸株式會社は資本金五十萬圓(内拂込高三十萬圓)を以て、生糸年産約七萬斤其

の價格實に一百萬圓を示すの盛況を呈し紀北、紀の川筋に於ける多數の製糸工場中屈指の工場と稱されて居る。

【家庭】氏の令閨ヒデ氏は曩に病没し長女シズ氏(三一)は現和歌山市立第一高等女學校長須藤丑彦氏の次男武彦君(三三)を迎へ婚養子として既に三人の愛孫がある、武彦氏は東京帝大工學部出身の秀才である。

### 井原國雄氏

【現住所】 大阪市西淀川區大和田町一六五〇  
【事務所】 同市西區靱南通一(信濃橋ビル)  
【出身地】 有田郡八幡村  
【出生】 明治三十二年四月生

氏は有田郡八幡村の生れ、小學校卒業後縣立和歌山工業學校に入り建築科を卒業して青雲の志を懷いて大阪に出で原田建築事務所勤務して技を磨くこと前後六年、大正十二年の秋原田氏が東京に移住すると共に獨立して現所に事務所を構へて建築設計業を開始するに至つた。爾來熱心業務に努め其の傍ら近代建築術の研究を怠らず時代の推移に常に一步を進めつ、あつたが、昨年十二月歐米を巡遊して米英佛獨等を初めとして三十餘

國を歴訪し歐米先進國に於ける建築術の粹を見學して新智識を養ひ本年三月歸朝以來之れを實地に應用して得意の技倆を發揮して居る。氏の如きは新進の技術家として其の前途を期待される。

【家庭】夫人美智子(二八)さんとの間に長女千恵子(四)さん長男史郎(二)君あり、又、父母姉妹弟等何れも氏と共に居住して一家極めて賑かである。

### 石田庄吉氏

【現住所】 大阪市東區廣小路町一六  
【店舖】 同市南區末吉橋通二丁目  
【出身地】 西牟婁郡田邊町榮町  
【出生】 明治二十九年二月生

氏は大正二年の縣立田邊中學の出身者中學卒業後神戸高等商業學校に學び高商を卒業したのは大正六年の事である、氏は家は代々砂糖商を以て營業とし氏が神戸高商卒業當時は嚴父庄七氏は大阪に於て盛大に營業して居つたので少壯氣銳の氏は父の膝下を離れて新天地を開拓すべく遠大の希望を懷いて居つた時たま／＼父君は商略の手違が因をなして遂に營業に蹉跌を來た

### 堂西司馬次氏

【現住所】 大阪市天王寺區寺田町一四  
【出身地】 那賀郡上岩出村英木  
【出生】 明治二十八年八月生

氏は大正三年縣立粉河中學校の出身、卒業後支那に渡り上海東亞同文書院に學び大正六年卒業の後大阪伊藤忠商事株式會社

に入り綿糸綿布部に勤務して主として輸出入に關する事務を擔當することゝなつた。其の後同店の支那漢口支店詰として派遣せられ其の在支中、中部支那各地を巡廻して支那麻の買付に當り大正九年伊藤忠の經營に係る、濟南中華蛋廠に轉じて後、更らに伊藤忠經營の朝鮮共榮社に轉勤するに至つたが大正二年辭して内地に引上げ大阪日本糖業調査所に參加し翌年九月東京に本部を移されて後氏は専ら大阪事務所を主宰することゝなつた【家庭】夫人此枝(二三)さんとの間に長女美生子(四)さん二女眞喜子(二)の二人あり。

### 中曾榮次氏

【現住所】 大阪市港區千島町四十七番地  
【出身地】 東牟婁郡色川村字田垣内  
【出生】 明治九年八月生

氏は東牟婁郡色川村字田垣内の生れ、家は農を業としてゐたが幼少より木材業に従事し、明治四十年東牟婁郡新宮町に出でて木材商を營み、次第に發展して大正五年大阪西區幸町に支店を開設したが大正十三年一月店舗を東京に移すに至つた、其の

後大正十四年再び大阪に引き返し、爾來現所に於て木材業を營むで居る。  
【家業】は夫人との間に二男二女あり長男宏藏君は慶應大學理財科卒業の秀才である。

### 宮井啓三氏

【現住所】 神戸市千島町二丁目十五  
【出身地】 有田郡湯淺町湯淺  
【出生】 明治二十三年二月生

氏は有田郡湯淺町の出身明治四十四年神戸に赴き當時我國に於ける有数の貿易商合名會社湯淺竹之助商店に入り勤続すること十五年大正十五年榮町三丁目に獨立し目下主として外米の輸入を取扱つてゐる。

氏は湯淺商店在勤中、大正九年の財界動亂に際し同店も亦其の打撃を受けて遂に破綻を暴露し同商店に在つた中堅店員は何れも店を去るに至つた後も氏は二三の人と共に



最後迄踏み止まつて、店務の整理と回復に努力し、兎も角も再生の途を打開するに至つたことは特記すべきことであらう。

【家庭】は夫人菊枝(二三)さん長女君子(一〇)さん二女兼子(七)さん長男哲(五)君二男敏(三)君の外に老母ぬい(七六)氏がある趣味は乗馬

### 山中惣次郎氏

【現住所】 大阪市此花區上福島北一丁目  
【出身地】 有田郡五村大字中原  
【出生】 明治十八年四月生

氏は有田郡五村大字中原の出身、郷里の小學校を出て和歌山中學校を明治三十七年に卒業し後岡山醫學専門學校に入り、四十二年卒業す。卒業後一年志願兵として歩兵第八聯隊に入營し退營後、高安病院に在勤すること一ヶ年臨床上の習熟を積み大正元年、現所に福島醫院を開業して爾來専ら診療に努めて居る氏は多忙なる醫業の傍ら地方公共事業並びに醫事衛生の發達に努力せられ現に大阪市醫師會副議長並びに大阪府方面委員に囑せられ、曩に區會議員に當選する事二回現在大阪府公同委員

### 乾菊太郎氏

【現住所】 京都市大宮通リ綾小路南へ入ル  
【出身地】 海草郡宮前村字小雜賀  
【出生】 明治十一年十一月生

氏は海草郡宮前村大字小雜賀の出身、小學校卒業後中村染工所に染色を習得し、十八歳の時(明治三十二年)和歌山市歌仙橋筋で同志三名と共に捺染工業を創始した。當時綿糸捺染の元祖とも云ふべきであつたが、凹型捺染が創始されて以來、それに壓倒されて工場を閉鎖し、明治三十九年米國桑港に渡航し、在米すること五年有半其の間同地にて雜貨商を營み、傍ら商況を視察して四十五年歸國後京都市に出で、店を構へ京染業を開

始し傍ら生地の賣買を始め以來今日に至るまで業務は次第に隆昌し、其の得意先は全國に及んでゐる。氏の營業は京染ではあるが染めるといふこと即ち藝術なりとの信念の下に、商人根性を離れて、藝術の向上に努め多數の京染業者中にありて信用の厚きを致したのも氏は米國に於ける信用第一の商法を實地に見て來た結果であらうと思はれる。

【家庭】には夫人熊野(三八)さん、長女豐子(一六)さん長男光世(六)君あり豐子さんは現に明德女學校に通つてゐる。

### 成戸政信氏

【現住所】 大阪市北區堂島濱通一丁目

【出身地】 有田郡箕島町字北港

【出生】 明治二十六年十月生

氏は有田郡箕島町字北港の生れ、箕島實業學校を卒へて後明治四十二年十七歳にして大阪に出て、江戸堀の米問屋藤本合資會社に奉公し、終始一貫主家のために精勤する事十有五年一昨年三月獨立して現住地に玄米商を創業した、氏は現に正米取引

所の開設以來堂島米界の巨頭問米商店經營する正米部の業務を代行し前途春秋に富む手腕家である。  
【家庭】は夫人とみ(三〇)さん長男正俊(一四)さんの外三人の男兒あり正俊君は箕島商業學校に通つてゐる。  
趣味は洋書と酒、酒は斗酒尙ほ辭せざる豪の者か？

成戸政信

### 山本宇太郎氏

【現住所】 大阪市住吉區天王寺町一九〇

【出身地】 那賀郡調月村

【出生】 明治六年十二月生

氏は明治六年十二月八日那賀郡調月村宮ノ尾山本専右衛門氏の長男に生る。氏の家は農を以て業としたが、商才に富んだ氏は成長するに及んで、米穀及び關等の仲立賣買を營むこと十餘年、明治三十四年二十八歳の時始めて大阪に上つて日本橋筋四丁目に生魚商を創業するに至つた大正三年、今宮町に移つて紀の國屋と稱して簡易旅館を營む事となつたが逐次繁昌して次第

に産を殖し昨年(昭和二年)現所に旅館を新築して此所に移り關西屋と號して盛大に開業するに至つた。

氏の旅館は極めて簡易なる文化的旅館であつて各室毎に戸締りの裝置を施して盜難の用心に備へ、食料と室料を區別して又食堂を設備して客室内にて食事を供せないこととした外茶代心付等は絶対廢止を實行して居る。氏は從來旅館の客室は多くは襪一枚で極めて不要心であるのを見て、之れ等の缺點を除去する事に着眼して自ら率先して實行を試みたのであると言つて居る。

氏は又大阪府方面委員を始め住吉區會議員等に擧げられて常に公共に盡瘁して來られたが現に方面委員、公同委員等の職に就いて居る。

【家庭】には夫人節子氏(三八)長男雅彦君(一一)あり。

### 吉本公男氏

【現住所】 大阪市東區川區十三木川町三二九

【出身地】 和歌山市新通五丁目

【出生】 明治三十年五月生

氏は和歌山市新中通五丁目に生る、大正四年和歌山中學校を

卒へて千葉醫學專門學校に擧び大正十年卒業、學校卒業後現役軍醫を志願して近衛二聯隊、大阪衛戍病院、サガレン洲派遣軍病院等に勤務し二等軍醫に昇進し十四年には津五十一聯隊、豊橋工兵第三大隊等に轉任し大正十五年四月依願豫備役に編入されて退營した。同年六月現在の所に自宅開業し晝間は赤十字社大阪病院の耳鼻科に勤務してゐたが昭和二年十二月同病院を辭し以來自家の診療に従事し耳鼻咽喉科及内外部を専門としてゐる。

【家庭】夫人すみ枝(二二)子は那賀郡名手町金岡氏の息女、既に長男俊(三)君長女穩子(一)さんを儲けてある。

吉本公男

### 太田茂夫氏

【營業所】 大阪市東區内安堂寺町二丁目

【現住所】 和歌山市吹上中橋筋

【出生】 明治十七年六月生

氏は和歌山市吹上中橋筋に生れ明治三十五年和歌山中學校を

卒業し、次で大阪高等工業學校に入りて、同三十八年卒業した卒業と同時に、古川鑛業株式會社尾尾山に技師として入社し勤続六年にして明治四十五年合資會社高田商會に勤務することになり爾來鑛山用機械の販賣係りを擔任した、高田商會は世人の識る如く本邦輸入機械商の巨頭として斯界に權威を有せし店舗であつただけ

同社に多年勤務した氏は機械

高田商會

の販賣については一見識を備へ高田商會の没落後氏は躍然として獨立自營の途を立て、昭和二年十一月現在の所に店舗（瑞光社）を開き瑞光式（特許）製機械の發賣を始めるに至つたが近時農業の機械化が漸く盛んとなつた折柄前途頗る有望視されてゐる。

氏は高田商會在勤中大正九年歐米各國に特種機械類の觀察研究をなし將來を期待して歸朝したが同商會の破綻のため、折角の洋行土産も持ち腐りとなつたのは氏の爲めに遺憾である。

【家庭】は夫人久枝（三九）さんとの仲に二女あり、何れも和歌山市に在つて高等女學校に在學中

趣味としては園藝、養魚等

岡本宗明氏

【現住所】 尼ヶ崎市外小田村金樂寺  
【店舗】 大阪市東區本町二丁目  
【出身地】 有田郡八幡村字久野原（共済生命館内）  
【出生】 明治二十三年三月生

氏は有田郡八幡村大字久野原の出身、明治四十二年耐久中學校を卒業して後海草郡日方町の南海水力電氣株式會社に入社し技術方面に従事したが二十四歳の時（大正三年）初めて大阪に出て阪神電氣鐵道會社に勤務すること四年、其の後第一電機製作所に後又松風工業株式會社大阪支店等に勤務して販賣方面に従事し大正十三年獨立して電氣工事請負を開始爾來現在に至るまで奮闘を續けて居る。

長宗明

【家庭】は夫人ふみ子（三八）さん長男宗夫（一九）君——尼ヶ崎中學卒業、二男宗清（一五）君——尼ヶ崎中學在學、長女千枝子

（一一）さん二女多賀子（六）さん三女田鶴子（二）さんの子福者である。

森島龜二氏

【現住所】 大阪府下濱寺町諏訪の森  
【出身地】 西牟婁郡串本町  
【出生】 明治三十年十月生

氏は西牟婁郡串本町の生れ、大正四年縣立田邊中學校を卒業し京都同志社大學に入り、大正九年同大學經濟部を卒業した。卒業後大阪に居住し、株式會社野村商店に勤務してゐるが、大正十五年十一月同店事務橋本喜作氏が加島信託株式會社の創立に携はるに及び、氏も亦橋本氏に隨つて加島信託に入社し専ら証券部を擔任してゐる。昭和二年四月に惹起せる金融界の大動亂に際しては加島銀行も遂に内部の整理を斷行した程、廣闊系事業に對する信用が失墜し信託會社の如きも其の餘波を受けて、信託預金の如きは更に増加せず營業成績の如

森島龜二

何に付ては當時一般から憂慮された程であつたが証券部の活動に全力を傾注して見事豫期以上の好成績を擧ぐるまでには多年野村商店に在つて証券部に經驗深き氏等の努力も亦決して缺くはない。

【家庭】は夫人龍尾（三三）さんとの間に一女一男あり。

道正胎藏氏

【現住所】 大阪市北區天神橋筋二丁目  
【出身地】 有田郡藤並村大字岡田  
【出生】 明治十八年十二月生

氏は有田郡藤並村大字岡田西福寺の住職或淨師の二男に生る不幸にして十二歳の時兩親に死別したため十五歳の時大阪に出で、南海鐵道天下茶屋驛の譯員となつて、つづさに生活苦の實相を味ふた、其後關西鐵道港町驛に車掌として勤務したが間もなく兵役に服することとなり、伏見工兵隊に入營し其の退營後大阪南區役所に書記となり或は府下豐崎町役場に勤務し其の傍ら文房具店を開業して内職とし、次第に隆昌に赴いたので役場員を辭して専心文房具店の經營に従事し、大正十五年七月現住

地に移轉し盛大に營業をして居る。氏は僧侶の子に生れたが其の職を好まず幼時父母に別れ、以來確固たる方針も立てずして都會に飛び出し

### 道正胎藏

て、以來今日の地位を造るまで

と約二年、其の後夫人の郷里西牟婁郡田並町に移住し自宅開業するに至つたが深く期する所あり、大正十四年大阪に志し現住地に居を構へて開業し爾來診療に専念して居る。

【家庭】は夫人くに(三三)さん長男雄三(七)君次男修爾(五)君の四人家族、兩親は郷里新宮町に在り。

趣味はかなり多方面に亘るも耽溺することなしといふ。

【家庭】夫人豊子(三四)さんは和歌山市の産其の仲に長男保(一五)君——大阪商業在學——長女房子(一〇)さん二女女子(一二)さんがある。家業に補助することを趣味とす。

### 兒玉正義氏

【現住所】 大阪市北區小松原通六九

【出身地】 那賀郡粉河町中山

【出生】 明治三十三年九月十日生

氏は東牟婁郡明神村大字川口の生れ、新宮中學を明治四十四年に卒業し、京都府立醫學專門學校に入り大正六年卒業。學校を出ると直ちに別府島瀨病院に勤務して外科及び耳鼻科を擔任し後京都に來つて鹽小路病院に入り内外科を擔任する。

那賀郡粉河町字中山の出身、大正八年四月廣島高等師範學校文科第三部に入學して、十二年卒業するや大阪府立天王寺中學校教諭を拜命したが、心氣一轉二ヶ年の服務年限を終ると十四年四月東北帝國大學、法文學部法律科に入學し其の在學中昭和二年十二月高等文官試驗司法官試驗に合格し翌三年三月同科を卒業法學士の稱號を受く。

卒業の翌月、那賀郡粉河町大林増次郎氏の三女廣子(二二)と

### 山田信雄氏

【現住所】 大阪市港區泉尾中通二丁目三

【出身地】 東牟婁郡明神村字川口

【出生】 明治二十六年一月生

んと結婚し、同時に大阪地方裁判所屬として辯護士の登録を受け同郷の先輩田村(堅三)法律事務所に於て辯護士事務に専念して居る、氏は年齒未だ三十に満たず前途洋々たる青年辯護士である。

### 玉置佐一郎氏

【現住所】 西ノ宮市西濱新家二二〇三

【出身地】 日高郡比井崎村字比井

【出生】 明治二十三年八月生

日高郡比井崎村字比井の出身明治四十三年西ノ宮市、内外綿株式会社西ノ宮紡績工場に入社し以來今日に至る迄終始一貫同工場に勤務し現に人事係主任として千餘の従業員の指導訓育に努力して居る。

【家庭】夫人たね(三六)氏は日高郡御坊町の出身其の間に長男健一(一二)君あり又郷里には兩親健在する。趣味は南滿と、戸外運動である。

### 小關三平氏

【現住所】 兵庫縣武庫郡本庄村深江

【出身地】 西牟婁郡田邊町

【出生】 明治十一年七月廿一日生

氏は西牟婁郡田邊町の出身山本圃氏の三男に生れ、後田邊藩士小關維隆氏の養子となる、現大阪税關港務部長山本一氏は氏の令兄に當る。田邊町小學校卒業後笈を負つて東京に上り芝の攻玉社に學び明治二十八年東京商船學校に入り三十三年航海科を卒業し東洋汽船會社所屬船に乗組み、香港桑港線に屬して海上生活に入つたが僅に二年の後、明治三十五年母校に教鞭を執る事となりて練習船大成丸に乗組み四十一年教授に昇進し翌四十二年甲種船長の免狀を授けられ大正元年大成丸船長として長距離航海一世界一週に就航し又大正三年には通信技師兼高等海員審判所審判官に任せられて警船局に勤務し前後九年其の間大正九年には伊國ゼノアに於て開催せられたる海員に關する國際勞動總會には政府代表委員顧問として隨行を命ぜられ歸途、英

佛、獨、米の諸國を巡遊し、又九年十一月日獨戰役の勳功に依つて雙光旭日章を授けられた。

大正十一年再び商船學校教授に任せられて航海科に教頭として教鞭を執り翌十二年校長不在中同校幹事として校長事務を継掌し同年七月勅任官待遇となり同十月神戸高等商船學校長に昇任せられて爾來高等海員の養成に専念されて居る氏は現に高等官二等正五位勳三等に叙せられ、又海軍豫備少佐に任せられてゐる。

氏は人格崇高の教育家として現在教育界に光彩を放つて居るが海員に對する精神教育は一に宗教の力に依るを以て唯一の方法であるとして屢々文部當局に建議を提すところあつた現に氏の主宰する神戸商船に於ては其の就任以來中川日史師を姫路から聘して法華經維摩經等佛典の講義を求めて學生の教養に努力されて居る。

【家庭】には夫人まさ氏(四八)を始め長男勝雄君(二四)次男周一君(一七)三男英一君(一五)五男真一君(八)の諸子あり——趣味——として氏は弓道を好む。

### 中岡孫一郎氏

【現住所】 神戸市上筒井通六丁目  
【出身地】 伊都郡隅田村  
【出生】 明治十八年六月生

氏は伊都郡隅田村の生れ、幼時奈良縣五條町小學校に學び後又奈良縣立五條中學校に進み卒業後東京に負ひ東京高等商業學校に入學したが一ツ橋卒業後住友銀行本店に就職し、明治四十四年辭して再び東京高商專攻部に學を積み、大正二年日本興業銀行本店に入り後總裁志立藏次郎氏に恩顧を受け、總裁秘書に拔擢はられて重役の帷幕に參じて敏腕を揮ひ、大正七年日本橋支店長に昇進し大正十二年には同行に於ける各支店中最も重要な神戸支店に店長として榮轉し爾來熱心行務に奮闘して居る氏が大正七年土方久徵氏に總裁秘書在職中、寺内々閣の所謂西原借款の取扱ひに、關聯して繁激極まる其の事務を掌理し明晰なる頭腦を顯はる、に至つたとさへ聞いて居る。今や其の銀行の關西探題として神戸支店長の要職を占めて縱横に快腕を發揮しつ、ある氏亦、其の將來金融業界に一大飛躍を試みらる

べきを期待して疑はぬ。

### 坂田正藏氏

【現店舗】 大阪市東區南久太郎町三丁目  
【本宅】 和歌山市新内一九九  
【出生】 明治十八年三月二日生

氏は和歌山市駿河町先代坂田彌兵衛氏の二男に生れ會て和歌山中學校に學んだが十八歳の時和中を中退して家業に従事することとなつた。氏の家は元煙草商を營み傍ら綿糸商を兼業とした爲め令兄現代彌兵衛氏は煙草商に従事し氏は同市板屋町に於て主として綿糸業を擔當することとなつた後煙草專賣法の實施に依つて政府に買収さるゝに及んで大正四年綿糸問屋を開業し大正八年店舗を株式組織に改めるに及んで氏も亦其の取締役の一員となり令兄と相共力して業務の發展に

### 坂田正藏

努力したが嚴父彌兵衛氏の没後、同十四年大阪に店舗を構へて三品取引所取引員の免狀を受けて、單獨に定期綿糸の仲買店を

### 塩崎與吉氏

【現住所】 大阪市浪速區櫻川反物町  
【出身地】 日高郡鹽屋村  
【出生】 明治十四年十一月生

氏は幼にして父を失ひ母の手一つに育てられた、十八歳の時北海道通ひの汽船に火夫として乗組み辛醜五年にして二等機關士となり日露戰役に際會して御用船に乗り組み其の功に依つて勳六等に叙せられ瑞寶章を授けられた、後一等機關士となり明治四十二年には大阪阿波屋貝三氏の船舶監督として招かれたが

後獨立して大正二年汽船駒形丸を購入して船主として自ら之れに乗船し北米シャトルに航行した時には國際問題までも引起した物語りがある。大正五年關西鐵道株式會社を創立して其の專務取締役となり又大正七八年歐州戰亂の餘惠を受けて海運界に好況を呈した時には東洋商船株式會社を創立し、數隻の新造船を所有して活躍を試み船成金と謳はれたが所謂戰後の反動時期に際會して脆くも失敗するに至つた。越へて大正十二年我海運界未曾有の不況に沈み船價亦暴落の極に達するや我國の大小船船業者は何れも絶息の思ひに慄む時、氏は敢然として全資産を舉げて汽船を買ひ入れ現に二萬數千噸の船船を所有して盛んに海運業に従事しつゝ、あるが其の卓見常人と軌を異にする所がある。

【家庭】には夫人美子氏(四一)を始めとして、長男古雄君(二二)——市岡中學卒業して目下家業に従事——二男實君(一八)——北野中學校在學——長女靜子さん(二五)神陰女學校在學——二女幸子さん(二二)三男幸雄君(三三)等あり。

氏は金光教を信すること厚く老母に孝養を盡して自ら樂しみとして居る。大正七年氏が船成金當時數萬圓を投じて購入した

る米國製モーターボートは其の快速力を以て知られて居るが阪神間僅に二十分間を以て達する現代稀れに見る優秀なものと稱して居る。

### 三尾邦三氏

【大阪住所】 大阪市東區伏見町三丁目  
 【東京住所】 東京市赤坂區青山高樹町六  
 【出身地】 和歌山市小松原通三丁目  
 【出生】 明治二十四年九月廿九日生

我が國美術骨董界の代表的商店として株式會社春海商店がある、苟くも美術を語り骨董を愛玩する程の者春海の名を知らざるなく、同時に三尾邦三氏の名を聞かぬ者はあるまい。氏は其の專務取締役として春海商店を双肩に荷つて立てる人物である氏は明治二十四年九月和歌山市新堀北ノ丁三尾彦右衛門氏の三男として生れた。氏の家は酒造を業とし代々其の家長を大野屋彦右衛門と稱して來た、氏の幼少の頃家業振はずして其の業を廢したと聞く。氏は九歳の時臺灣に渡り令兄の許に身を寄せて臺南に留まること一年、兄の病死に遭ひて勵志空しく内地に

引上げ大阪春海商店に入り先代春海藤次郎氏に仕へること、なつた、時に氏は年齒僅に十歳、氏は今我國美術界に活躍するに至つた第一歩はこゝに初めて踏み出したのである。

聰明にして敏捷なる氏は早くも其の商才を認められ先代藤次郎氏より殊の外愛せられた。而して明治四十五年先代の歿後は二十歳にして同店を双肩に荷ふて經營に當ること、なつた。先代藤次郎氏は新界に於ては古今を通じて稀に見る鑑識の大家、春海商店の名聲を新界に博したのは素より同氏の力に外ならぬが之れを受け續いで、同店をして克く今日の盛大を爲さしめ春海の三尾か、三尾の春海かと語はるゝに至つたのは一に三尾氏の手腕と稱すべきである。

大正八年組織を變更して株式會社として以來專務取締役として今日に至つてゐる。現に久原、三井、岩崎、根津、藤田等を始め我國屈指の富豪を得意先として其の取り扱ふ品の如きも一点十數萬圓を唱ふる珍寶名器の類のみである。氏が特に知遇を受けてゐる現通相久原氏の如き、先代春海氏に従つて出入せし時

### 三尾邦三

代よりの緣故である。昭和二年夏、久原氏が政府の經濟特使として露、獨、兩國に派遣さるゝや氏も亦其の隨員として渡歐し露西亞、獨逸、佛蘭西、英國等を経て北米を廻り同年十二月歸朝した、以て如何に其の信任の厚きかを知るに足らう。

氏は以前大正九年にも歐米諸國の美術界觀察の爲め單獨漫遊したこともある。氏は又恒に公共事業に力を盡し昨年災害救助基金として金壹萬圓を和歌山縣へ、更らに又縣立海草中學校の運動場整備費に金三千五百圓、最近には歩兵第六十一聯隊の演武場建設の爲めに壹萬圓を寄附したるなどは其の主なるもの、本年十月其の功勞に依つて紺授章を授けられた。氏は曩に大正十一年に神戸の川崎氏と共に大阪毎日新聞社へ各々一臺の飛行機を寄贈したこともある、現に大阪毎日が大朝に對抗して飛行機を有するに至つたのは之れが素因をなしたものと聞いて居る。

【家庭】には夫人千世子さん(三三)長男隆造君(一五)——東商業學校に在學、二男勝之助君(六)あり。外に氏の兩親は和歌山の本宅に在住する。

趣味——は自動車と飛行機プロ階級には一寸手の届きにくい道



樂であるが氏は東京に數臺の自家用自動車を所有し、箱根等に遊ぶ時必ず自動車を疾驅する又大阪には飛行機を所有して春海號と名づけて居る。折にふれ郷里和歌山の上空に飛來することがある。氏は壯年にして既に今日の地位にあり、更らに政界に躍出せんとする日も亦近きにあると窺はれる。

### 竹中源助氏

【本店】和歌山市三木町中之町二三  
【支店】大阪市東區北久太郎町二丁目  
【出生】明治十年六月二十七日生

氏は明治十年和歌山市北新桶屋町に生る、幼名を川口兵四郎と稱し明治三十五年先代源助氏に迎えられて二女美喜枝氏の女婚として竹中家に入り明治四十五年岳父の歿後襲名して源助と名乗るに至つた。

竹中氏は和歌山に於ける舊家として綿糸商を營み土地第一位の綿糸問屋として現に盛大に營業して居る、先年大阪に陣を進め北久太郎町二丁目支店を開設して業務を擴張し、専ら發展

に努力するところあつたが大正七年株式組織に變更し、株式會社竹中商店の高號を以て自ら社長に就き其の經營に専念しつゝ、ある外幾多の事業に關係して重役に選任せられ今や華城綿業界に雄飛して錚々として名を知られて居る、氏は温厚篤實にして恒に公共の爲めに財を惜まず其の德行を稱せられ人格の崇高なるは現代稀れに見るところ郷土多數の紳士中毅然として異彩を放つて居る。

【家庭】には美喜枝夫人を初め長女美代子さん(二二)、二女延子さん(一九)三女美佐代さん(一八)二男源太郎君(一七)四男泰二君(一一)あり長女美代子さんは分家して養子を迎へて居る。

### 南楠太郎氏

【本宅】和歌山市七番丁一番地  
【出身地】海草郡安原村吉原  
【出生】文久元年九月七日生

氏は海草郡安原村に農家の次男として生れた、幼少の頃寺小屋に通ふ暇には村童と交つて牛を追ひ草を刈て成長した、十四歳の時和歌山市に出で、先々代竹中源助氏方に奉公して欣々と

して働き通すこと七ヶ年氏が今、事業界に雄飛する素地は斯くの如くして造られたものである。

年期を了へて後徴兵検査に合格して大阪錦臺に入營し三年間の軍務に服し除隊するや荷主竹中氏から出資を得て龜川村小野田に水車場を設置し令兄と協力して棉實、菜種等を絞つて油の製造を開始したが幾何もなく之れを閉鎖して和歌山に出で明治二十二年竹中氏の共同を得て吹屋町に機械製油を開始した、和

### 南楠太郎

歌山に煉瓦積の煙突が屹立したのは之れを以て

嚆矢とする。後之れを精米工場に變更して令兄甚之助氏に經營を委するに至つたと聞く。

明治二十六年、日清戦争の機運が醸成し財界は極度の脅威を覺へし時小松原通り一帯の土地を坪當り壹圓といふ當時としては法外な高値で引受けて一躍四萬坪の大地主となり後年和歌山中學校の敷地などに犠牲的価格で縣市等に提供したが今尙二萬餘坪を所有して居るのは此所に説くまでもない事實である。

明治二十九年徳島に渡つて同地の米穀取引所を引受けて努力

經營其の内容を充實し更らに株式取引所を兼設して株價の奔騰するに至つた時其の持株を賣り退いて數萬の利益を懐にして意氣揚々として和歌山に引上げた、後日清戦後和歌山織布會社の經營を引受けるに至つたが之れが氏は現に和歌山に於ける紡績界に覇を握るに至つた第一歩である、之れ明治三十三年氏齡三十九歳の時である。

日露戦後氏は和歌山紡績會社の重役に就任して其の經營を引受け四十四年には両社の合併を断行して、現和歌山紡績株式會社を設立し取締役社長として全生命を打込んで其の經營にあたる事になつたのである。

氏が大阪に乗り出したのは大正五年、市岡土地株式會社を創立して財界の喧嘩臺に活躍を試みたのを初めとして爾來各種の事業に關係して今や華城事業界に錚々として名聲を轟はれて居る現に氏の關係しつゝ、ある主なる事業としては

- 一、和歌山紡績株式會社 資本金五百二十萬圓 社長
- 一、市岡土地株式會社 全 上四百三十萬圓 社長
- 一、日華製紙株式會社 全 上 一百萬圓 社長
- 一、木津川船渠株式會社 全 上 一百萬圓 社長

- 一、和歌浦土地株式會社 全 上一百萬圓 社長
  - 一、大阪三品取引所 全 上五百萬圓 理事
  - 一、合同油脂グリセリン會社全 上五百萬圓 監査役
  - 一、日本共立火災保險株式會社全 五百萬圓 取締役
- 等である。氏は又一面山林の經營に力を致し、舊主竹中氏と共同して現に日高川奥から、大和十津川に亘る紀和國境一帶の山林面積約二千町歩を所有して明治四十二年來年々壹萬數千圓の經費を投じて杉櫨の植林を行ひ其數既に六百萬本に達して居る外有田川奥にも約一千町歩の山林を單獨にて經營して居る。氏は性剛放にして而かも仁俠滿身智と膽とを以て固めたる五尺の優軀を提けて今や財界の愉快舞臺に雄闊しつゝ、あるが舊主竹中氏に對しては恒に謝恩の念忘れることなく有益なる事業は先ず竹中氏に相談つて共同とするなど竹中家の爲めに盡して居る。
- 【家庭】には夫人ハルエ氏(五四)嗣子俊一氏(三五)三男幸夫君(三三)四男操君(三二)外四男二女及び自宅に三人の令孫がある。俊一氏は關西石材株式會社社長、日華製紙株式會社專務取締役として日々大阪に通つて兩社の經營に専念し青年實業家として前途を囑望されて居る幸夫君は分家して紀三井寺の別荘に住

し青年文士として學藝に専心し三男操君亦分家し東京に在住して現に父君の關係せる日本共立火災保險會社に勤務して居る

## 戸田實氏

【現住所】 兵庫縣明石郡垂水村鹽屋  
 【店舗】 神戸市海岸通三丁目  
 【出身地】 日高郡藤田村

神戸海運界に一方の旗頭として采配を揮つてゐる戸田實氏は實業界に於ける紀州人の先輩として將又郷土を代表すべき一人である。氏は曾て和歌山中學を中退して神戸に走り神港海運界の先人佐藤勇太郎氏の經營する石炭商に店員となつたのは年齒僅に十八歳、世の多くの若人達が或は空想の夢路に迷ひ入り或は幽かに開かれた青春の隙から好奇の世界を覗いて前後も識らず邪道に踏み込まんとする年頃であつた。

だが、家運再興の一念が赤々と胸に滿ち亘つた氏の澄み切つた瞳には榮へある己が將來の姿が榮しく映せられるのみであつた。而かも此の強く燃へ盛つた火には高潔其のもの、如き主任神戸に店舗を構へ茲に愈々活躍の陣容を整へると共に二三の人々と共に東和汽船株式會社を設立して飛躍の第一歩を踏み出した時恰も歐洲大戰亂が勃發した千載一遇の好機に處して氏は日頃交友ある松方幸次郎氏等の意見を參酌して其の方策を誤らず船成金の榮冠を獲て關西財界に雄飛するに至つた。氏は現に株式會社戸田商店社長、日東海上火災保險株式會社社長、大連戸田汽船株式會社專務取締役たる外數多の事業に關係して居るが一面各種の社會事業に數十萬金を投げ出し又戸田獎學金を作つて社會に有爲の青年を送り出す事に努める等公共の爲めに盡瘁する所少くない。

## 南方熊次郎氏

【現住所】 大阪市西區南堀江通五丁目  
 【出身地】 和歌山市廣瀬中ノ町  
 【出生】 明治十三年十二月廿五日生

氏は和歌山市の産、廣瀬小學校を卒業して十七歳の時大阪に出で西區松島町二丁目綿商水口商店に奉公し勤続三年、主家の破綻に餘儀なく辭して鳴尾合名會社に勤むることとなつたが明

藤氏の油が注がれ、大きく見開かれた瞳には炯眼なる同氏の士魂と商才とが間斷なく觸れて氏、今日の基礎的訓練が完璧へと加速度を増して行つた。

「物の成るは成る時に成るに非ず」の言を如實に味ひ得て餘りあるではないか。即ち主従の胸底に張られた二つの琴線がコグマするが如くに相應じ共に銀鈴の音をかきまてたものであつた具体的云へば氏の動き振り執務ぶりは佐藤氏の數多き訓言そのものであり、意志そのものであつたのである。

斯くて十年を経ず氏は一躍支配人となつたのは、何等の援擡でも優遇でもない當然の歸結と云はなければならぬ。其の後門司に佐藤永田商店なる石炭輸出商を聞くに當り佐藤側の代表者として派遣せられた主の厚き信任に報ゆるに八萬圓の損失を以てした時に於てすらも主、佐藤氏が一言半句も之れに言及しなかつたに見ても如何に兩者の心が強く堅く結ばれてゐたかを察するに足るのである、後間もなく日露戦後の機運に乗じて氏一個の手腕を以てよく二十萬圓の利益を収め、明治四十年に到つて店主の地位に置かれ主、佐藤氏と同格の位置を占めたのである。明治四十一年六月氏齡三十四歳にして門司を去り獨立して

治三十七年獨立して綿花仲立業に従事した時、恰も日露戦役に際會して綿糸業界の好潮に乗じ、其の成績見るものあり四十年には南滿江通りに店舗を構へて綿花商を開業するに至つた爾來今日に至るまで業務發展に努力し其の間大正元年には業務を擴張して南方洋行と商號を改め支那其他海外各地より直接綿花を輸入して、紡績會社等に賣約し漸次盛況を來し現に紡績綿商大阪同業會副會長に推されて活躍を續けて居る氏は一面社會的活動に力を致し現に大阪市會議員として市政の爲めに盡瘁しつゝ、ある外全國都市衛生組合聯合會幹事大阪市衛生組合聯合會副會長、大阪市日吉教化委員會長、大阪市西區公同委員常任幹事、大阪市西區日吉衛生組合組長、大阪市西區日吉軍人後援會長、在郷軍人會日吉分會顧問等、公共團體に關與して盡瘁するところ尠くはないが聖上御即位の大典に際し紀念事業として、氏の主宰する日吉教化會に於て貧民救濟機關の設置を計劃して自ら其の陣頭に立つて現に其の實出を期して居る。

【家庭】夫人のぶ子さん(四七)長男英雄君(二三)長女静子さん(二二)二女悦子さん(一九)二男重雄君(一六)あり、英雄君は大正十四年一年志願兵として三島重砲兵隊に入營し退營後家業に

従事、又静子、悦子の両女は精華女學校を卒業し二男重雄君は今、府立天王寺中學校に通つて居る。

### 土屋楠熊氏

【現住所】兵庫縣武庫郡御影町那家  
【出身地】和歌山市小松原通一丁目  
【出生】明治四年二月生

「我國外國貿易の現状を見よ！豆粒大の小石一個に幾萬圓の大金を抛つて輸入し之れに對するに船一隻僅々百圓？にも足らざる品物を輸出して得々たるに至つては我國の前途亦如何にせんや……だ」と之れは或る憂國論者の説である。豆粒大の小石とは寶石ダイヤたるは謂ふまでもないが船一隻百圓の品物は之れ構寸を指すものに非ざるか。然り此の言たるや我が國の現状を喝破してあます所がない。然し乍ら我國に於ける構寸事業は最近其の産額八百萬圓の巨額を示し輸出貿易品中重要な地位を占め、侮るべからざる勢力を有するもの、之れと共に多年我構寸工業界の發展に努力されたる土屋熊楠氏の没すべからざる功績も亦忘るゝ事の出来ないものがある。氏は明治四年和歌山市

に於て生れ和歌山中學校卒業後東都に上り陸軍經理學校に學んで明治二十七年卒業し三等主計に任ぜられて、歩兵第四十七聯隊經理部に屬し三十年職を退いて神戸に出て現神戸商工會議所會頭として神港實業界の巨頭瀧川儀作氏等と相語つて構寸事業に身を投じ爾來幾十年今日に至るまで我國構寸工業の爲め盡瘁して其の發展に努力し現に瀧川儀作氏社長の下に東洋構寸株式會社專務取締役として今尙斯業界に奮闘を續けてゐる。氏は其の間明治三十七年日露戦役に際しては歩兵第三十七聯隊附として

### 土屋楠熊

第四師團に屬して出征し翌三十八年二等主計に

昇進し三十九年凱旋し勳功に依つて從七位勳五等功五級に叙せられた。氏は今や東洋構寸株式會社の專務たるの外數多の事業會社に關係して其の重役の椅子を占め神港事業界に錚々として謳はれて居る。

【家庭】には幸子夫人(四五)長男俊彦君(二二)長女小夜子さん(一九)あり俊彦君は山口高等學校に又小夜子さんは甲南高等女學校に何れも在學中

氏は競馬に興味深く明治四十一年始めて鳴尾競馬場の設置されるに當つて其の創立委員として競馬場の土地選定其他に奔走されたのは既に人の知る所、鳴尾競馬場創立の功勞者として愛馬者間に敬されて居る。

### 乾繁壽氏

【現住所】神戸市須磨上澤一二  
【出身地】和歌山縣海草郡川永村  
【出生】明治九年六月一日生

氏は海草郡川永村の生れ、和歌山中學校を卒業後、笈を負ふて東京に遊學し慶應大學理財に學び明治三十一年を以て卒業す。其の後神戸に於ける金貨業乾新兵衛氏に迎へられ女婚となり將來乾家幾千萬の産を相続すべき幸運を贏る身の上となつたが乾家に人となつて以來、明治四十三年には虎大盡山本唯三郎氏等と協同して支那貿易事業を開始し支那、天津に於て活躍するところあつた。明治四十五年六十五銀行に關係して其の神戸支店長となり、又大正元年には神戸取引所理事に選任せられて

其の任にあること十年、後明治信託株式會社を設立して取締役  
に就任したが、義に信託業法の實施せらるゝに當つて明治實業株

# 乾繁氣

式會社と變更し  
て現に其の職に  
ある外、乾鐵線

株式會社の監査役にも就任して居る。

【家庭】夫人榮子氏(五〇)は新兵衛氏の息女、長男繁夫君(一七)  
長女壽榮子さん(一二)あり。  
趣味——としては書畫骨董、読書等

## 西本健次郎氏

【本宅】和歌山市小野町三丁目  
【東京住所】東京市赤坂區榎町三  
【出生】慶應二年八月

裸一貫から身を起して克く全國屈指の土木請負業者と呼ばれ  
今亦多額納税議員として貴族院の議席に列するに至つた西本健  
次郎氏は現代紀州を代表する成功者の一人たるを失はぬ。氏は  
明治十八年初めて和歌山市の土木建築請負業「用助方」に身を寄

限に事業資金を據出するものさへ生ずるに至り、また、く内に  
西本組は擡頭した。  
後間もなく本店を和歌山市小野町に置き東京大阪を初めとし  
て全國樞要の地方に支店若しくは出張所を構へ鐵道省の工事請  
負をはじめとして鐵道、水電、其の他の大工事を請負ふて全國  
的に活躍し今や我國土木事業界有数の請負業者として名を知ら  
れるに至つた。

氏は又大正十四年貴族院公選議員の改選に當り多額納税者と  
して立候補し衆望を負ふて和歌山縣選出の貴族院議員の椅子を  
占めて居る現代稀れに見る立志傳中の人である。

【家庭】せき子夫人は養父故要助氏の息女、長女すみの子次女せ  
い子長男健三君外四男一女あり、みすのさんは商學士竹吉氏を  
婚養子に迎へて分家し、せいさんは海軍少佐千田修二氏を夫君  
として居る。

△竹吉氏 は現に西本組本店支配人として事業の樞機に携はり  
其の傍ら和歌山市會副議長として市政に盡瘁しつゝ、あり、手  
腕家として囑望せられて居る、又

△千田修二氏 は西本組朝鮮支店長として京城に在り滿鮮地方

せたのは二十歳の時である。

用助方配下に於ける數多き土方の裡にあつて氏の行ひは自ら  
他の者と異なるところがあつた、金さへあれば酒と女と賭博に  
耽溺する多くの土方達の裡にあつて氏一人は之れ等の道樂に目  
も觸れず給金の大部分は貯金として腹掛けの底には何時も新ら  
しい十圓札の二三枚は忍ばせて、如何なる誘惑にもピクともし  
ない度胸を持ち乍ら仲間の者が一朝病に呻吟するのを見ると醫  
藥の料を支拂つてやる情けを持つて居た。而のみならず其の音  
尾張大藩の請請奉行の由緒ある家の次男として育てられた丈あ  
つて讀み書、算盤が達者であつた氏は「土方としては珍らしい  
男、西本の家を構がすには彼をおいて外にない」と、用助氏夫  
妻から惚れ込まれるに至つたのである。斯くして氏は西本家に  
入婚して茲に其の業を繼ぐこととなつたのである。氏は家業を  
繼承して第一次の請負事業、和歌山織布會社の建築工事に西本  
組の根柢を動搖せしめる程の失敗をした爲めに配下を連れて九  
州に至り門司の間組に落着いて鐵道工事の下請負をやることに  
なつたのである、爾來誠實と熱心を守本尊として刻苦勤勵事業  
に奮闘すること幾年、信望を聚めること日に厚く氏の爲め無制

に於ける西本組事業を管掌して居る。

△健三君 は明治大學出身者現に和歌山の本店に在つて義兄竹  
吉君を助けて共に父君の事業に従事して居る。

## 片山卓三氏

【現住所】大阪市天王寺區上沙町二丁目  
【出身地】東平樂郡新宮町  
【出生】明治十七年一月生

氏は明治三十一年初めて上阪し陸軍砲兵工科學校に學びて砲  
兵工廠に入り三十七年日露戰役には滿洲に出征、戰後滿洲守備  
軍に屬して遼陽に駐屯し歸還後福知山工兵第十大隊工長として  
勤務し後四十四年福重兵第四大隊工長、大正九年鳥取歩兵第四  
十聯隊工長同十一年大阪陸軍兵器支隊附、同十二年廣島陸軍兵  
器支隊附となつて西米利亞に出征十三年十二月大阪陸軍兵器支  
隊附十四年五月福重兵第四大隊附等を歴任して大正十四年退官  
其の間勤功に依つて正七位勳六等に叙せられた大正十四年大  
阪紀念博覽會の開催された時同會委員として豊公館の設備を引  
受けて完成した。

【家庭】夫人コイノ氏(四〇)養子八三郎君(九)あり。

### 山田 幹氏

【現住所】 西ノ宮市安井町  
【出生地】 和歌山市廣瀬中ノ丁二  
【出生】 明治廿一年十二月生

氏は明治三十九年の和中出身、神戸高等商業學校を卒業後株式會社三十四銀行に入り本店、臺灣支店等に勤務の後大正十年西の宮支店長に進み後難喉場支店長に轉じ現に船場支店長の職にあり。

【家庭】には母堂のぶ子氏(六四)夫人ふじ子さん(三二)長男貞吉君(一一)外に一男一女あり。

### 杉本 徳次郎氏

【現住所】 大阪市港區泉尾濱通二丁目  
【出身地】 東牟婁郡新宮町  
【出生】 明治十九年六月生

氏は幼少から郷里にて木材業に従事し大正十年大阪に出て後製材所を開いて板の販賣を營業として現在に至る。

【家庭】は夫人小松氏(四二)長男茂君(一七)——大阪商業學校在

學——二男公平君(一五)——市岡商業學校在學——二女さかきさん(一五)泉尾高女在學、三女節子さん(七)等あり又長女房江(一一)さんは同業大谷嘉一郎氏に嫁した。

### 湯川 喜七氏

【現住所】 大阪市西區江之子島東ノ丁二四  
【出身地】 西牟婁郡瀬戸船山村  
【出生】 明治二十六年一月生

氏は西牟婁郡瀬戸船山村の出身、小學校卒業後十五歳にして大阪に出て簿記學校、英語學校等に入りて修學の後辯護士たるんことを志望し、大正四年關西大學に入學し又、東京に上つて明治大學に法律を修めて大正六年卒業し、十年一月辯護士試験に合格して大阪地方裁判所屬辯護士として登録を受け辯護士富田豊松事務所にて法律事務に従事し、大正十五年四月現住地に獨立事務所を開設するに至つた氏は前途春秋に富む青年辯護の一人である。

【家庭】夫人秀子(二八)さんとの仲に長女瑞子(二)さんがある。趣味は政治、選舉毎に演壇に立つて雄辯を揮つてゐるが何れは自ら抱負を逃べる時期もあるであらう。

### 武津 八千穂氏

【現住所】 大阪市東區東雲町二〇二番地  
【出身地】 和歌山市小入町  
【出生】 安政三年十二月十一日生

氏は幼にして菊池保定氏に師事して漢學を修め又國文を福地源一氏に學ぶ。明治六年日前國懸両神宮禰宜に、任せられたのを始めとして小國神社、大山祇神社等に宮司を歴任し傍ら明治十二年四月難波神社祠宮を申付けられ、後明治二十六年官幣大社牧岡神社宮司に任せられた。

爾來牧岡大社に仕官すること三十有餘年從四位勳六等に陞叙

### 武津ハ千穂

せられて大正十四年三月宮司を辭し専ら難波神

社に社司として仕官して居る氏は其の間明治三十九年には少時郷社八阪神社に社司を兼ねた事もあるが難波神社に祠宮を拜して以來今年を以て勤続滿五十年の永きを算へ現代我國神職中他に見ざる永勤者である。

氏は曾ては東宮侍講たりし本居豐顯氏に就いて皇典を究め現

### 岩橋 大六氏

【現住所】 京都市上京區一條通リ堀川東入ル  
【出身地】 和歌山市湊本町三丁目  
【出生】 明治七年六月廿四日生

代神職中、稀れに見る篤學者、明治二十九年に皇典講究所理事を三十二年には大阪皇典講究所試験委員を、又明治三十五年には官國幣社神職試験委員を囑託せられた等恒に我國神職界樞要の職を司さられた神道の古翁である。氏は又歌道を伊達千廣の門に學んで斯の道に長ずる人、社務の餘暇には夫人と共に歌詩を樂みて風流を追ひ以て和氣瀟々として居る。

【家庭】夫人鶴枝氏は故陸奥宗光伯の養女、賢婦人の譽れ高い。

氏は明治七年和歌山市に於て生る、長じて和歌山中學校に入り、後東京に遊學して一ツ橋高等商業學校に學び明治二十九年卒業す。卒業後兵庫縣立神戸商業學校に教鞭を執ること二十九年辭して住友合資會社に入り別子銅山に勤務したが明治三十三年住友銀行に轉じ廣島、船場、神戸の各支店を歴任して兵庫支店長に昇進し後住友倉庫兵庫支店長に更に中之店支店長に轉じて

得意の手腕を振ふこと幾年、明治四十年辭して方向轉換種繭紡績會社が絹紡事業を創始するに及んで同社に入り京都支店にあつて主として絹絲部の營業を主管して現今に至つた。

# 志 橋 大 三

氏は性温厚にして極めて圓満の人南養育英會京

都支部の幹事として常に公共方面に盡瘁し社交の機微を捉へること巧みである。

【家庭】氏は夫人との間に二子を有せしも何れも早世して以來子女に恵まれず加ふるに昭和三年夫人の長逝に遭ひ家庭極めて静寂である。

# 栗 山 寛 一 氏

【現住所】 大阪市天王寺區島ヶ辻町三四番地  
【出身地】 和歌山縣有田郡箕島町  
【出生】 元治元年正月六日生

氏は和歌山縣土族美山吉右工門氏の三男として和歌山市本町五丁目に生る。明治九年十二月有田郡箕島町箕島神社神職栗山

# 栗 山 寛 一

現に大江ビルヂングに取締役社長たるの外、日の出紡織株式會社、内外除虫菊株式會社等に取締役となり今や大阪財界に識らるゝに至つた。

氏は又在阪縣人中著名なる人々を以てグループとする權威ある社交團體木友會を主宰して常に同郷人間の和親の爲に盡瘁する外、常に有識階級に交り深く天賦の手腕を揮ひ社交界に馳驅

して居るが在阪縣人中の先輩として同郷人間に尊敬されて居る【家庭】現夫人繁子氏を始め智恵子、秀子、美子の諸嬢及び長男甲子郎君等あり、又養子捨三氏は工學博士にして現に九州帝大に教授として學壇に立つて居る。

# 伊 藤 敬 宗 師

【現住所】 京都市上京區金閣寺町  
【出身地】 西牟婁郡北富田村字庄川  
【出生】 明治十四年七月十五日生

師は田中芳松氏の三男、母は久子と稱す、前和歌山縣會議員田中晋吉氏は師の次兄である、師は明治二十四年四月西牟婁郡北富田村尋常小學校を卒業の後、郷を出で丹後國倉梯に到つて高等小學校を卒へ、更に奈良市に往いて徳田病院々生として苦學の傍ら明倫學社に英漢數の學を修め。後ち本師に就て佛典祖錄を學んだ。十八歳にして専ら、臨濟宗専門の道學研究に入り明治三十一年秋京都に上つて天龍寺に搭じ、我山禪師の紺繩を受けて粉骨碎身致々として參究した。三年の後禪師の遷化に遇ふて東昱禪師に隨侍したが明治三十九年には伊豫に遊んで禾山

禪師の室を叩き、師に従つて東京に赴いて更らに苦修す、又全四十年より京都大徳寺に錫を掛け昭隱禪師に親炙すること殆んど八ヶ年來に首として道業を勵んだ。大正三年七月相國寺々中瑞春院に任職となり、その後相國寺會計を命ぜられたが猶ほ道念を廢せず、管長獨山禪師に師事して、密に向上の宗旨を究め凡そ參禪辨道に精勵刻苦すること實に前後十有餘年、遂に其の道果を見るに到つた。大正十一年二月金閣寺に徙つて伊藤氏を嗣ぎ同年八月相國寺派執事長となりて職に在ること三年、次で十四年十一月臨濟宗五派黃檗宗聯合經營に係る紫野中學々長兼宗乘教師として現在に及んで居る。

師は負笈修養の間亦實に國民の必任義務を果して居る。則ち明治三十四年徴兵に應じて歩兵第三十七聯隊に入營した、是は禪門修養中の師としては一大苦痛であつたに相違ない修養中最も大切な期間であるからである而も五ヶ年の長きに亘つて居る而して日露戰役には歩兵軍曹として聯隊本部に屬し、金州南山の攻畧より奉天の大戦に至るまで各地に轉戦し砲烟彈雨の間亦その精神修養を怠らなかつた。南山及遼陽の激戦には勳功を樹て爲めに勳七等功七級に叙せられたのである、而して本部書記

として克く上長に仕へ又戦病死者に對して勳績を表することに最も誠實に且つ、同情に深かつたと聞いて居る。師は現に臨濟宗鹿苑寺(通稱金閣寺)住職として寺内に十數名の徒弟を教養しつゝ、多數の雇員を指揮して名利金閣寺を統董し且つその傍ら相國寺顧問として宗門の興隆に盡瘁しつゝ、あるの外紫野中學々長として宗門生徒及び一般子弟の教導に努めてゐるが「業生無邊誓願度。煩惱無盡誓願斷。法門無量誓願學。佛道無上誓願成」の佛教家の通願

### 伊藤敬宗

を禪機的活理想となして普ねく

業生濟度に勤め兼ねて國民精神の作興に努力を拂つて居る。師は又宗門教育に關する講義録に自ら筆を執り其の他文書に依る傳道には資財を惜まず、先年日本佛教徒支那視察團員として臨濟宗を代表して彼地に巡錫し、支那巡錫記「踏履行」を著して沈く之れを頌ち、又近くは御大典紀念事業として吾邦の「禪苑天皇紀」を編纂して之を献上せんとするなど、此種教化事業及社會救濟の爲めには常に資財を投じて惜まない。趣味としては詩書畫を嗜み需めに應じて筆を揮ふ、就中書は其の得意とする所

師は之を以て總べて教化の助縁として扱かつて居る。師は又汎く名ある人々と交際して敢て邊幅を飾るところなく貴賤貧富を分たす其職業の如何を問はない。快活縱横に禪機を弄して對手を感化せしむれば止まぬ。曾て大毎の漫畫家邦坊と禪問答をやつたなどは其一斑である。而して師の終始一貫して主張する所は「正義」の二字で之れを實行するの道は禪的真理と活機を鍛錬するの外最勝の道はないと言つて居る。

### 板原兵三郎氏

【現住所】 大阪府豊能郡箕面村櫻井

【出身地】 和歌山市南汀町

【出生】 明治五年十月四日生

氏は幼時和歌山師範學校附屬小學校卒業後明治十八年笈を京都に負ひ京都府立中學校に學び後同志社普通校に入り廿七年業を卒へるや日本海陸保險株式會社に入社したが在勤五年にして同社の解散により社を退き商業興信所に入る事となつた爾來現今に至るまで三十有餘年終始一貫として興信事業に専念して居るが氏は其の間明治三十八年には海外興信事業の視察研究の爲

め米國に遊んだ事がある、我國に於ける新業に關する海外視察は實に氏の渡米を以つて嚆矢とする。明治四十年同所門司支店長に進み大正元年には理事に列し間もなく神戸支所長を囑託されて今日に至つた。

氏は又門司在勤中明治四十二年には選ばれて門司商業會議所會頭に就任し大正元年、神戸轉勤に至るまで同地商工業界に盡瘁された外門司市會議員として同市市政に盡された事もある其

### 松本三郎

の他關門在住の同縣人を以つて紀樂會を創立し

同郷人の和親増進に努められたが神戸轉勤後大正五年には在神紀州人の主なる人士を以て葵友會を創設して常任幹事に推され現に同郷人間の親交を圖り又以て舊藩主徳川侯爵家との連鎖の爲めに努力されて居る。

氏は虚偽を排して直言直行を信条とし、質實剛健を尙び常に心神の修養を怠らないが現代社會に於ける民衆道德の頹廢を慨し人心の淨化と思想の作興を念とせらるゝ一人である。

【家庭】には夫人直枝氏(明治七年生)の外長男利秋君(明治三十

五年生)夫婦並に二人の愛孫あり、利秋君は新進の法學士現に三井銀行外國營業部大阪支部に在勤して居る。

### 森田正作氏

【現住所】 大阪市港區音羽町二丁目一九

【出身地】 伊都郡山田村大字山田

【出生】 明治十八年十二月生

氏は伊都郡山田村森田圓之助氏の長男、橋本町小學校卒業後十六歳にして大阪に出て陸軍用達藥原商店に入つて所謂他人の飯を喰ふ事三年其後二重瓶消火器株式會社販賣部員として熊本市に出張中召集せられ明治三十七年日露戰役に際して現役に編入されて由良要塞に入營したが重砲兵第二聯隊に屬して出征し旅順攻圍戰を始め奉天大戰等に參加し三十九年凱戦した勳八等に叙せられたのは其の勳功である。除隊後京都島津製作所に入り東京支店に勤務すること約一年有半其の間明治大學夜學部に於て苦學力行を重ね、明治四十一年大阪に來つて南區炭屋町に於て消防用ガソリンポンプの製作を創めたが之れ我國に於けるガソリンポンプ製造の創始である現代我國消防機界に革命を起し

たのは實に氏の功績に負ふ所少くはない。大正七年事業の擴張を企て組織を株式會社に改め資本金一百萬圓（現在拂込高七十七萬圓）を以て株式會社森田製作所と稱し港區市岡町（現工場の隣接地）に工場を設置して大量製作に着手したが其後市區改正の爲現所「八雲町五丁目」に移るに至つた同工場は敷地二千坪工場建物一千坪餘を有し貳百名の職工を使役して盛大に事業を經營して居るが最近一ケ年に於ける製作数は大小合してガソリンポンプ約四百台其價格約百萬圓に達して居る。

# 森田

氏は現に森田製作所事務取締役として自ら經營

の衝に當り更らに事業の發展を期して居るが大正十一年には約一ケ年間歐米諸國を巡遊して新業を視察した等常に技術上の研究を續けて消防機界の爲に奮闘して居る、實に我國消防機界の覇者と稱すべきである。

【家庭】夫人たか氏（四四）は東京の生れ長女富美子さん外、三女あり、富美子さん（二二）は府立泉尾高女出身の才媛、二女幸子さん（二六）、三女住子さん（一四）は共に泉尾高女に通學中又母

堂房枝氏（六二）は現に郷里に末子（十二）と共に健在する。

## 小杉轍三郎氏

【現住所】京都市上京區廣小路寺町東入ル  
【出身地】和歌山市數之町  
【出生】安政三年十二月廿三日生

氏は安政三年和歌山市に生る明治四年十六歳にして東京に遊學し慶應義塾に學んで正科を卒業の後工部大學（東大工科の前身）に入りて礦山學を修め明治十五年を以て卒業した本縣人始めての工學士である。氏は大學卒業前より不幸肺炎に罹り健康上礦業方面に活動する事能はず教育界に志し先ず和歌山中學校に教鞭を執ること幾年後愛媛島取等の中學或は師範を歴任したが廿年教職を辭して農商務省に入り特許局に審査官となり後又礦山局技師に轉じ廿五年礦山監督署の新設に際して大阪礦山署金澤支署長に就任した。其の在任中石川縣の富桑木谷藤石衛門氏に招かれて官を辭し、同氏の經營に係る岐阜縣下畑佐礦山に事務を主宰すること五年、廿九年再び官途に入り大阪礦山監督署長に就任した。明治三十五年福岡礦山監督署長に榮轉したが

其在職中日露戰役に當面して礦業界の前途多望となるや氏は暫下を巡視して其の礦山主を説き大に金鑛炭鑛等の探掘の獎勵に努力した三十八年官制の改正と共に再び本省に入りて技師となり正五位勳五等に叙せられたが後間もなく職を辭して京都に居る。氏は濃厚なる好老翁、常に他人の事に奔走して居るが現に南葵育英會京都支部に評議員たる外、京都和歌山縣人會幹事として盡瘁し同縣人間に尊敬せられて居る。

【家庭】夫人種氏（五二）、長男雄二氏（三三）あり雄二氏は京大工學部電氣科出身の工學士別に居を構へ住友電線製造所に技師として勤務して居る。

趣味——氏は園藝を愛し朝顔、菊の栽培を得意とす又同好者を歴訪して暮を圍みて悠々餘生を送つて居る。

## 門奈貞治氏

【現住所】大阪市住吉區天王寺町五八三  
【出身地】日高郡矢田村  
【出生】明治十一年四月生

# 門奈

氏は日高郡矢田村門奈盛安氏の二男に生る明治三十年笈を東都に負い法政大學に入つて法律を學び明治卅六年卒業す。四十年大阪信託株式會社の創立に参加して會社の創立後其の支配人となつたが四十四年更らに關西信託株式會社の設立に參與し設立を待つて大阪信託を之れに合併するに至つて信託部長として事業の發展に努力する所あつたが大正六年同社が山口一派に實權の移るに及んで同社を退き、後北濱に大阪土地商事株式會社を設立して自ら代表取締役として自任して同社に就任して同社の經營に専念して現今に至つた。

同社は現に六甲山頂に二十餘萬坪の土地を所有して土地經營を行ひつゝ、あるが其の他土地建物に對する金融並びに土地建物の賣買を營業として居る。

【家庭】夫人いし氏（四〇）は愛媛縣の生れ、夫婦間に長男信一君（二二）長女百合子さん（一八）二男望君（一五）の三子あり信一君は現に大阪齒科醫專に百合子さんは夕陽ヶ丘高女に又望君は今宮中學校に何れも在學中



### 前田朝二氏

【現住所】京都市下京區御幸町四條南入ル  
【出身地】伊都郡大谷村字柏木  
【出生】明治二十年九月八日生

氏は明治廿年九月伊都郡大谷村に生る、曾て和歌山中學校に學び其卒業後第三高等學校を経て京都帝國大學醫科に入り大正元年優良の成績を以て卒業す、大正三年夏京都市に於て醫院を

開設して診療に  
従事すること十  
有餘年再び京大

に研究を積み主論文(堂新血壓計)外數種の副論文を提出して昭和三年春醫學博士の學位を授けられた。同年七月現所に於て開業し、自ら内科小兒科を又岡田醫學博士を聘して外科及び皮膚科を擔當せしめて総合診療に従事して居る。氏は頭腦明晰にして研究心強く常に新たな學理を研究して之を臨床上に應用することを怠らないが京洛刀圭界に於ける青年國手として其の將來を期待されて居る。

【家庭】夫人三子さんは名古屋の生れ夫婦間一男一女あり。

### 角谷源之助氏

【現住所】神戸市石井町二丁目卅三番地  
【出身地】和歌山市上野町一丁目一番地  
【出生】慶應二年六月廿三日生

氏は和歌山中學校第一回の卒業生和中卒業後東京高等師範學校に入り明治二十年を以て卒業す群馬縣師範學校に赴任したのを振り出しに母校(東京高師)附屬中學校教諭、宮崎縣立中學校長、東京府立師範學校教諭を経て明治三十二年和歌山師範學校に校長となり、在職四年にして同三十五年靜岡縣師範學校長に大正二年更らに京都府師範學校長に轉じた。其の間前後三十年の長きに亘つて我師範教育に多大の功績をのこされて、大正十二年退職されたが其の在職中從四位勳四等に叙せられた。

氏は又京都師

範に在職中大正  
七年より桃山報

德會に幹事として同會の爲め盡力されて居たが退職後は同會の常任幹事として其創立者花田仲之助翁を助けて共に會の發展に専念されて居る外同會の經營に係る靜岡縣德家政女學校及び昭

和四年四月創設された桃山報德學校(中等程度)の校長として今尙子女の教育に盡されて居る。

因に桃山報德會は始め鹿兒島に於て創立され大正八年桃山に本據を移し現在にては全國に存在する一萬有餘の報德會を統帥し教育勸進の御趣旨を奉戴して之を實行するこゝを目的として居る有力なる教化團體である。

【家庭】嗣枝夫人(六一)は和歌山市の生れ、長男清明君(三五)夫妻及愛孫一人あり清明君は京都帝大工學部の出身大阪工業試驗場に技師として奉職して居る。

### 鳴神幹太郎氏

【現住所】京都市上京區出雲路内河原町八  
【出身地】和歌山市雜賀屋町  
【出生】明治十一年九月十七日生

氏は明治十一年鳴神敬簡氏の長男に生れ和歌山中學校卒業後第一高等學校を経て東京帝大法科に進み明治三十九年卒業。大學卒業後直ちに九州鐵道株式會社に入り明治四十一年同社線が國有となるや引續き九州鐵道管理局に奉職し四十三年には北海道鐵道管理局に轉じ工務課に勤務し後又神戸改良事務所、神戸

鳴神幹太郎

に歸々たる川島甚兵衛氏の經營する川島織物所に迎へられて理事として爾來同所の經營の樞機に參劃して居る。

【家庭】は老父敬簡氏夫人むめ氏長男俊夫君(二〇)三人暮し、鳴神亮三氏は氏の舍弟。趣味としては學生時代劍道を好んだが現今にては讀書、玉突位を樂んで居る。

### 森本武之助氏

【現住所】兵庫縣武庫郡糟道村戸屋  
【出身地】和歌山市藏小路町  
【出生】明治元年正月四日生

氏は寺島三郎右衛門氏の四男、和歌山市扇之芝にて生れ其の幼時、藏小路に成育した。家祖寺島早若氏は遠く、聖德太子より瓦製造の直傳を受け瓦大將軍として法隆寺其他の建築に參加

し實に我國製瓦の始祖である。後紀州家の祖徳川頼宣郷に従つて紀州に來り代々瓦町に居住し之れを業とした。氏は十二歳の時和歌山尋常中學校に入つたが半ばにして和歌山醫學校に醫學を學んで藥劑師となつた。明治十八年東京に出で、藏前高工の創立者平賀博士等協同の試験場に入り、應用化學並に染色に關する研究を重ねること五十年、明治二十三年大阪紡績會社が始めて織布工場を設備するに當つて招かれて同社に入り主として染色に關する技術を擔任したが同社が染糸織布の製造を中止の後には引續き糊付織物の工場を監督することとなつた。明治三十七年天滿織物會社に迎へられて常務取締役となり、主として工務に關する部分を擔任して傍ら工場を主管し、同社の事業に専念すること十有餘年其の間日露戰後、政府が我國綿布(粗布)の滿洲輸出の獎勵に依り四五の紡績會社が相寄つて「シンジチー」を組織して製品の合一製造を計劃するや氏は各社間を斡旋して製品の統一に力を盡して其の功績尠くなかつた。之れ實に我國綿布滿洲輸出の最初である。氏は明治二十三年大阪紡績會社に入社した時、織機に使用する綜統用塗料「ニス」の自給を痛感して友人と共に其の製造を計劃し西野田に工場を設置して

「ニス」の製造並に綜統の製作を創めて各紡績會社に供給することとなつた。之れ國産「ニス」製造の創始である。明治三十六年工場を西野田中江町に移して擴張し資本金五十萬圓(四十二萬五千圓拂込)の株式組織とし株式會社彰工舎と稱して事業の發展を圖り一面常に優良品の研究に努めたが大正八年天滿紡績を退いて後は氏は自ら其の代表取締役となり専ら之れに従事することとなつた。大正十五年最近我國紡績界に金屬製綜統の使用盛んとなり糸製綜統の使用漸く減退するに至つたので同社は綜統工場を閉鎖して爾來「ニス」の製造を専業とする事となつたが同社製「ニス」の販途も亦自ら變化を來し最近に於ては主として鐵道會社汽車工場等に供給するのみとなつたので昭和三年組織も亦合資會社に改め氏は其の代表社員となつて居るが實質は氏個人の經營に他ならない。

氏は前後三十年の長きに亘つて紡績工業に従事し綿業に關する造詣極めて深く紡績事業界に名を識られて居るが一面應用化學に對する興味深く今尙各種の研究を續けて自ら楽しんで居る。

### 森本武之助

【家庭】現夫人トヨ氏(五〇)二男(二六)三男(二二)四女(二〇)さん共に亡夫人キヌ子氏の出、他に一男あり、駿君は富山藥事を卒業して京大に専門の研究を積み現に彩工舎に在つて三男黨と共に父君の事業を助けて居る。

### 須藤光彦氏

【現住所】京都市下京區富小路通三條上ル  
【出身地】和歌山市玉藻町一丁目  
【出生】明治二十六年三月廿三日生

氏は和歌山縣立德義中學校に學び卒業の後第三高等學校を経て大正五年京都帝大醫學部に進み大正九年を以て卒業す。大學卒業後附屬醫院に助手として島嶼・眞下兩博士の教室にて内科に關する臨床醫學の研究を積むこと今日迄九ヶ年餘昭和元年講師を命ぜられたが昭和二年十二月循環器系統に關する主論文外數種の副論文を提出して醫學博士の學位を授けられた。氏は昨年九月現住所に移り大學に講師たる傍ら自宅に於

### 須藤光彦

ても餘暇を以て診療に従事して居る。

【家庭】氏は和歌山市の老教育家須藤彦彦氏の長男醫學博士島岡順次郎氏は伯父に當る人、家庭には敏子夫人(三〇)との間に長女光子さん(一一)を頭に二女三男あり、夫人は和歌山市の老國手神田瑞穂氏の女、東京三輪田女學校出身の才媛

### 榎野藤太郎氏

【現住所】大阪市西區北堀江通五丁目  
【出身地】有田郡湯淺町  
【出生】明治三年四月六日生

氏は明治三年有田郡湯淺町に生る二十歳の時東京に出で、學を修める事數年にして大阪に來つて紀州物産商を開いたが後朝鮮貿易商五百井商店に迎へられて支配人となり勤続五年同店の廢業に依りて店を辭して神戸市中村組株式會社に入りて同社傍系鐵工所及炭礦等の常任監査役となつたが大正八年中村組と關聯して現業を獨立開始して今日に至つた。氏の事業は海運業であるが傍らヒリッピン木材の輸入を爲して之れを市場に供給して居る。氏は早寢早起をモットーとし床を離れると直ちに宅を

飛び出して終日業務に精勵するといふ程の精力家であるが又西洋映画に興味深く業務の餘暇にはたゞく活動寫眞館に足を運んで楽しんで居る。

### 森岡房一氏

【現住所】 神戸市阪口通四丁目十七  
【出身地】 伊都郡橋本町古佐田二二八  
【出生】 明治十五年四月生

氏は森岡仙之助の長男、橋本町小學校卒業の後東京市に出て和佛法律學校に學んだが明治三十八年米國に渡航して桑港ハイスクールを卒業し、更らに加洲獸醫學校に入り千九百十三年卒業するやローサ

### 森岡房一

シゼルスに於て獸醫を開業すること七ヶ年大正十二年歸朝して神戸に居を構へた同十五年現所に家畜病院を開き代診二名を使用し今日に至つたが氏は阪神並に京都競馬場を始め各地方の公認競馬場に於ける馬匹の診断を取扱つて居る。氏は大正十二年歸朝後同郷の先輩が經營せる米

同社を退き神戸市兵庫運河入口に於て、獨力肥料製造を開始するに至つた。昭和二年都市計劃に依る道路の劃設に際して新川貨物驛構内に移轉して工場を設備し又京都府下宮津町に分工場

### 湯川忠三郎氏

を有して爾來堀切英一氏切合名會社の名稱を以て盛大に

營業を續けて居るが最近に於ける年産額六十萬圓に達し、更に發展に努力して居る。  
【家庭】は現夫人はる氏(三三)長男廣一君(三三)の三人限り、廣一君は神港商業學校卒業の英才現に工場にあつて父君を助けて業務に奮闘して居る。

### 湯川忠三郎氏

【現住所】 大阪市東區高麗橋詰町三三  
【出身地】 西牟婁郡田邊町  
【出生】 明治四年八月廿五日生

氏は田邊町湯川佐衛門氏の息、明治十六年父に従ひて郷里を出で東京に遊學したが二十四歳の時、大倉組に入り大阪支店に

國サクラメントに於ける某銀行にマネージャーとして迎へられて再び渡米し二十ヶ年有餘其の經營を管掌したこともある。

【家庭】夫人久代さん(三九)は神戸女子神學校の出身、外に長男義成君(二二)次男達郎君(二三)あり義成君は(東京)法政大學に又達郎君は神戸二中に在學中。氏の一家は夫婦とも熱心なるクリスチャンで氏は現に日米協會會員として兩國民の親善の爲め盡瘁して居る。趣味としては園藝に狩獵

### 堀切英一郎氏

【現住所】 神戸市西須磨下懸詰三六ノ一  
【出身地】 伊都郡紀見村橋谷  
【出生】 明治十四年四月生

氏は伊都郡紀見村の生れ、日露戰役後二十五歳の頃より橋本町に於て肥料の製造に従事し、明治四十二年、關西肥料合資會社を組織して自ら其の代表社員となつて事業の發展を圖り各種配合肥料の製造を營んだ、大正八年關西肥料株式會社(資本金五十萬圓)を設立して之れに合併し、常務取締役役に選任せられて會社の經營に當ることとなつたが在任三年にして大正十一年

勤務して手腕を磨くこと十有餘年漸く活動の素地なるや明治四十年大倉組を辭して現所に内外物産合名會社を設立して自ら社長となり各種物産の輸出入業並に物品製造販賣を開始するに至つたが明快なる卓識と天稟の才腕と相待つて克く風潮の順逆を誤らず堅實なる歩調を以て今日の地盤を開拓し華城實業界に輝々として讀られて居る。其の間氏は大正九年大阪商業會議所議員に選ばれ現に其の常議員として商都商工業界の爲めに盡瘁して居る。その他大正十三年には中日(日本支那)協會評議員、大正十四年日本(日本、トルコ)貿易協會理事、大正十五年日佛文化協會理事、昭和三年日中(日本、チエツコ、スロバキヤ)貿易協會理事に推され彼の親善増進並に貿易の發展に不斷の努力を盡して居るが其の功績を表彰せられて中華民國嘉木章、佛國オフィシエ、ガカデミー勳章、コンマンドル、デラゴン、グンナ勳章、シユウアリエ、ドラ、レヂオン、ドノール勳章、ルーマニア國オフィシエ、ド、クロンヌ、ド、ルーマニ勳章等を贈られて居る。又大正十四年三月以來大阪放送局理事に昭和二年八月日本染料製造株式會社監査役に選任された外現に大阪地方裁判所商事調停委員たる等公私の爲めに活躍を續けて居る。

氏は大正十三年には藍授褒章を下賜せられ翌十四年軍事上の勳功により勳四等に叙せられたが昭和四年五月更に勳三等に陞叙せられ民間稀れに見る榮譽を贏るに至つた郷黨中に於ける立志傳中の人と評される。

【家庭】には夫人夏氏(四九)長男忠次君(一八)長女波子さん(一四)あり忠次君は府立北野中學校に又波子さんは神戸女學校に何れも在學中

### 鎌田 榮吉氏

【現住所】 東京市外目黒町下目黒  
【出身地】 和歌山市東長町九丁目  
【出生】 安政四年八月廿六日生

氏の嚴父は鎌田廣助氏(後に藏と改名)稱し初め紀州藩御仕入方の金役を勤めたが後紀州家城代平井氏に仕へた人。氏は其の第六子として生れたが多くの兄弟相ついで早逝した爲め氏は遂に鎌田家を相続することになつた。慶應元年九才にして父を失つた氏は母堂澄子刀自の鞭撻に發奮、克く學事に専念せられたといふ事である。氏は始め藩校學習館に通ひ、十四歳にして

左傳史記に通じ侯爵家先々代茂承候の御前に召されて學を講じ御褒に預つた事もあつた。又十八歳にして當時最高の英書を多々讀破し學校より官に對して數名の英才を報告するに當つて氏を其の最秀才として特記せられたといふ事である。

當時福澤諭吉翁の宰する慶應義塾に紀州藩より遊學の士を送ることとなり明治七年四月氏は谷井保氏と共に最初選ばれて笈を東都に負ふこととなつた。然るに囊中の雖は夙に顛脱して在塾僅に一年早くも翌八年三月福澤翁から卒業を言ひ渡され其上福翁の囑に應じて義塾に停つて教鞭を執ることとなつた。後年福澤翁が創業の跡を享けて義塾守成の功が遂に氏一代の事業となつたのが實に端を發したのである。

其の後明治十一年には舊藩の自修私學校に半年餘、明治十四年より鹿兒島造士館に二年餘共に懇望されて教鞭を執つた。氏は當時主として英國正統學派の政治、經濟等の新學を講じ自由主義の種子を各地に植へつけたものであつた。氏は同郷の先輩として最も陸奥宗光伯に服し伯亦大に氏を敬し其の推薦によつて一時山縣内務大臣の下に内務省に入つた事もあつたが二年餘にして退き更らに福翁の出身地大分縣から懇請されて同地に赴

任した事もある。

明治二十四年氏三十五歳にして名聲既に高く遂に故主茂承侯の眞託を受け世子頼倫氏の黨陶を委ねられるに至つた。爾來幾十年氏が心血を盡いで其の任に盡された事は有名の談叢となつて居る。二十九年一月頼倫侯歐米に遊ぶ時も亦之れに従ふこととなつた。其の前後福翁から熟經營の懇囑を受けて居たが明治三十年歸朝するとともに遂に知遇に感じて二代目の塾長に就いた。當時日本銀行、郵船會社或は勸業銀行等の重役に就任を懇請されたが氏は二足草鞋は屑しとせず之れを固辭された。

塾長としての氏の功績は一にして止まらない、明治三十四年福翁の長逝に際しても四圍の杞憂を排して塾の經營に少しの緩みも見せなかつた。加之全國を遊説して、維持會員の制を建て爾來擴張に次ぐに擴張を以てしたる上に記念事業として、義塾創立五十年の記念には大圖書館を建て又六十年の記念には醫科大學を創設し帝大醫學部に對する一敵國たらしめた。實に其の守成の功は福翁創業のそれにも劣らぬであらう。

次に政治方面に於ける氏の足跡を一瞥するに一時内務省に入つて官吏となつた事は前述の通りであるが明治二十七年第三回

總選舉の際推されて衆議院に送られ、又明治三十三年には高等教育會議員に推され、同三十九年には貴族院議員に勅任せられた、大正七年臨時教育調查會議員又教育調查會議員に列し其の會長を仰附られ、現に文政審議會議員に列して居る。大正八年十月ワシントン府に開催された巴里平和會議の條約に基く第一回國際勞動會議に政府代表として列席した、之の會議に於ては内に勞資兩代表間に主張の相違あり外には日本對列國の經濟狀態の差より來る特殊例外要求の必要あり、氏の苦衷は一方ならぬものがあつたが克く難關に處して其の初志を貫徹したものであつた。

大正十一年夏加藤友三郎氏が天命を拜して内閣を組織するや氏は懇望されて文部大臣として閣内に重きを爲したのは世人の記憶に新なる處であるが昭和二年福澤翁門官に親任せられて現在に至つた。氏は功勞により大正八年勳二等に又昭和三年從三位勳一等に陞叙せられた。氏は又現に慶應義塾評議員會長及び其の關係者の社交俱樂部交詢社に理事長たり。

氏は至誠温厚正に孤を託するに足る人格者、郷黨の後進は勿論義塾關係者其の他より弘く慈父の如く仰がれて居る。

【家庭】夫人百子さんは淺野嘉吉氏の女、長男竹夫君は慶應出身  
今横濱正金銀行に在動して居る。

### 有馬良橋氏

【現住所】東京市外濠谷町大山七一四  
【出身地】和歌山市瀬元町奉行町一丁目  
【出生】文久元年十一月十五日

有馬氏は代々醫を以て紀州藩に仕へたる家、祖父良及氏は名醫として識られた人又父元丞氏は明治維新後黒田清隆に従つて樺太開拓使に加はり後北海道に止まつて釧路病院長となつたと聞く。

氏は元丞氏の  
長男に生れ齋藩

主の經營する自習舎に入りて勉學し後東都に及を負ふて慶應義塾に學び、明治十四年卒業するや更らに海軍兵學校に入り二十一年少尉に任ぜられた。明治二十七年日清戦役には大尉に進み「浪速」航海長として出征後笠置艦長、竹敷要港部參謀長、第一艦隊參謀、警手艦長、第二艦隊參謀長、海軍砲術學校長、海

軍々令部參謀、海軍兵學校長、海軍教育本部長兼海軍將官會議員等の要職を歴任して大正八年海軍大將に榮進し正三位勳一等に叙せられた。其の間明治三十七八年戦役には東郷提督の參謀として出征し旅順閉塞の壯舉を獻策して自ら閉塞隊に總指揮官となりて赫々たる功名を上げ我海軍の武勇を世界に轟かしたのは氏の全生涯を通じて不磨の功績と稱すべきものである。氏は偉功に依つて功三級金鷄勳章を授けられた。氏、性謹嚴にして温厚而して一面頗る豪放にして武人の典型たるにはぢない。今や功成つて閑雲野鶴を友として居る。

【家庭】三つ子夫人との間に實子なく令弟神野介壽氏の二男寛氏を養嗣子として居る。寛氏亦海軍大學校出身の秀才現に海軍部内の要職にある。

### 岡崎邦輔氏

【現住所】東京市芝区高輪北町四八  
【出身地】海草郡岡崎村  
【出生】安政元年三月生

氏は舊姓を長阪氏と謂ひ長阪血槍九郎の一門全姓七左衛門より

り出づ。七左衛門は初め本多平八郎に仕へたが後紀州侯に頼つたのでその子孫は代々紀伊家に仕へて維新に及んだ。

氏はこの長阪の後裔覺彌氏の次男として和歌山市市町に生れた。母堂は故陸奥宗光伯の母堂の妹に當る人、氏は即ち陸奥伯とは従兄弟の間柄で幼少の頃から伯の愛撫と指導を受けたものである。

氏は始め藩校學習館倉田、三浦兩翁の私塾に學んだが後上京して、當時租税頭を拜命してゐた陸奥伯に身を寄せた。當時陸奥氏の邸内には星亨、神鞭知常、牛場卓藏、島田三郎の諸豪が食客同然に暮して居た爲め氏はこれらの諸氏と交を結び、諸氏がそれ／＼官途に就いて四散した後も永く伯の下に留つた。

明治十九年伯が特命全權公使に命ぜられて合衆國に赴任するや氏は同行して彼地に留學し政治學を専攻した。

明治二十三年陸奥伯歸朝して農商務大臣に就任し且全年の第一回衆議院議員選舉に郷里和歌山市及有田、海草兩郡から出馬する事となつた時氏は多忙な伯に代つて奔走し伯をして當選の榮を膺はしめた。然るに明治二十四年の政變に關聯して伯が代議士を辭したので其の補缺選舉には推されて自ら輪贏を争ふ事

となつた。この時氏には法定の被選資格が備つて居なかつたので之を充たす爲め海草郡岡崎村の岡崎家に渡りをつけ選舉の時から岡崎姓を名乗ることとなつたのである。

代議士となつて中央政界に乗り出した氏は當時勢力伯仲の間にあつた自由改進兩黨の聯合軍と吏黨と稱せられた與黨との間に介在して新に獨立俱樂部を組織し標決權をその掌中に收め先づ紛糾した議長選舉に自由黨より星亨を推さしめて政府黨を制し岡崎の名は既に院内外の活目する處となつた。

明治三十三年伊藤公が政友會を結黨するや其の帷幄に參してより西園寺、原、高橋、田中と歴代の黨首を補佐しながら他面多くの政友を推して榮位要職に就かしめ自らは之に依つて其の抱負の行はるゝを希ふ外何等の榮達を顧みなかつた。之れ多士濟々の政友會にあつて永く一黨の智謀を以つて許され鬱然重きをなしてきた所以である。

日露戦争の頃一時政界を遠ざかつて居た時を除いて前後三十年間立法府に據つて藩閥に抗し官僚に對し順次國民代表の府をして重きを加へしめた功績は眞に偉大なるものである殊に此近年の大業は第五十議會所謂護憲三派聯立内閣の提出にかゝる普通

選舉法案の一部分が貴族院に於いて修成された爲兩院協議會を開くに至つて延長せし會期も切迫し正に危機に瀕した時、所謂「岡崎案」なる折衷案を提議して克くこの劃時代的大法案を通過せしめた事であらう。

其の後大正十四年四月政友會を代表して聯立内閣に入り農林大臣に就任したが間もなく閣内に不統一を生じ八月桂冠して野に降つた。本縣出身にして臺灣の重きに任じたのは故陸奥伯、鎌田氏に次いで氏であつた。氏は亦昭和三年多年の功により貴族院議員に勅任せられた一面氏は實業界にも活動されて永く京阪電鐵に社長として同社をして今日の大をなさしめたのは世人の夙に識る所である。

氏は友情に富み故舊に厚いのは人の知る處、他面氏は稀れに見る潔癖家、日常身邊の事は殆んど自ら處置をつけるのが若い時からの習慣であると聞く。又晩香と號して國風を詠じ臨池の技に長ず。氏は公衆の前で演説する事は好まぬが膝を交へての座談に至つては將に堂に入ったもので聞く者をして陶然として去るを忘れしむると云ふ。

### 濱口儀兵衛氏

【現住所】 千葉縣銚子町  
【出身地】 有田郡廣村字廣  
【出生】 明治七年四月生

濱口家は元尾張管領斯波氏に仕へた濱口左衛門太郎平安忠に出づ。安忠は後に有田郡廣村に土着して其地の豪族となつた。元祿十三年初代儀兵衛知直の代に下總の銚子に醬油醸造を始めた爾來子孫相承けて「山サ」醬油を守りたて、今日に至り當主儀兵衛氏は實に知直以後十代目に當る人である。殊に氏の祖父故格殿翁七代目儀兵衛氏は維新前後より國事に奔走し明治政府に入つては伊藤、松方の元勳に伍して驛邊頭にまで進んだ一代の傑物であつた事は人の知る如くである。氏が明治七年廣村の本邸に呱呱の聲を擧げるやこの格殿翁は大いに氏の養育に意を用ひ漸く長じて十歳許りになると氏を海草郡川永村の篤學者辻莊太郎氏に託され其塾に入つて篤陶を受けた。後上京して儒者小永井小舟氏の塾に轉じ更に立教大學を経て一つ橋高商に學んだ。然るに氏はこれ迄の學問が父祖傳來の家業に直接關係の少い事を感じ帝大の理科に入つて醸造化學を専攻した。又明治二十六

年には更に英國に渡つて理化學を究め、明治三十二年には特に醬油研究所を設立して新界の専門家を聘して特殊の研究に便せしめた。氏が令兄の後を繼いで十代目儀兵衛を嗣ふ事となつたのは其の後の事で氏が二十六歳の時であつた。

濱口氏代々の醸造にかゝる「山サ」醬油は品質優良にして且つ價格の低廉なることは古來其聲高く、文政年間には幕府から最上醬油の折紙を

### 濱口儀兵衛

付けられ明治になつてからも早くより宮内省に上納し明治二十七年には正式に宮内省御用品たるの御指定を受けた。多年の研究より得たる抱負を以つてこの由緒ある家業に専心する事になつた氏は先づ品質の改良進歩に鋭意努力すると共に三十四年には新に一萬坪の敷地を求めて第二醸造場を新築して家業の發展を計つた。

然るに氏の事業慾はこれのみを以つて満足せず北海道樺太方面に着目して同地方の海産物や雜穀類の取引に手を擴げた結果は遂に失敗に歸し以來不運が重なり遂に家産を擧げて整理しなければならぬ破目に立ち至つた氏は父祖傳來の事業を入手に委

し一先づ郷里廣村に隱退したのは明治三十九年氏が三十三歳の時の事である。かくて郷里に蟄伏すること七年この間氏は自ら試験管を執つて醸造化學の研鑽に耽つたこの苦難の中にあつて氏の母堂ミチ子刀自及恭子夫人は凡ゆる不自由に堪えて氏を慰め勵まし氏をしてよく重業の意氣を養はしめたと云ふ事である。大正三年八月一日氏四十一歳の時再び銚子に歸つて醸造場の經營に當る事となつたが氏は再生の意氣と在郷中の研究の結果とを以つて醸法、經營に改善を加へ着々再生の地歩を固めた。時恰も歐洲戰亂の餘惠を受けて我財界が好轉期に會するに及んで一時は回復困難を傳えられた濱口の家運は舊にも増して隆昌を見るに至つた。即ち大正七年には岩崎家の工場を買収して第三工場とし更に之れに擴張工事を施した、かくて年額約十五萬石の醬油を醸し氏が納める一ヶ年の所得税は十數萬圓日本屈指の多額納税者に伍する事となり。大正十四年には千葉縣多額納税者より推されて貴族院議員にも勅任さるゝに至つた。

氏は又各種の公共事業や育英の事に隠れた功勞者であるが最近には銚子町に公正會館と稱するものを建設し之れに講堂圖書

館實業學校等を設備し以て社會教育に資すべく努力せられて居る。氏は自ら律すること極めて謹嚴に酒も煙草も用ひずひたすら數多い子女の教育に意を注いで居るが長男勉太君は既に東大を卒業し長女慶子さんの外に六男二女の子福者である。恭子夫人は島根縣の素封家堀藤十郎氏の女、賢夫人の譽高い。

### 關直彦氏

【現住所】 東京市京橋區木挽町八ノ一  
【出身地】 和歌山市  
【出生】 安政四年七月生

氏は舊和歌山藩士故關平兵衛氏の次男に生れ長ずるに及んで東京に出て大學豫備門に學ぶ。明治十一年全校卒業、當時同學の士に土方寧博士、高田早苗博士、坪内逍遙博士石川千代松博士、田中館愛橘博士、藤澤利喜太郎博士等あり。實に豫備第一回の卒業に屬す。

氏は進んで明治十六年東大法科を優秀の成績で卒業した。その頃出で、大學に學ぶ者、縣を擧げて數ふる程で氏は本縣最初の法學士として名聲噴々たるものがあつたさうである。當時

自由民權の論漸く喧しと雖も官吏萬能の聲は更に甚だしく苟も志あらん程のものは皆争つて官界に走つた中に時流に泥まらず毅然として自ら待する事高き氏は既に當時にあつて獨り福地源一郎氏の招きに應じて同氏が社長たる東京日日新聞社に入つて其の主筆となつた。明治二十一年新聞社から派遣されて歐米視察の途に上つたが翌年福地社長の物故せるに遭ひて歸朝し同氏の後を繼いで社長に就任した、時に年三十三歳。翌明治二十三年始めて國會の開設せらるゝや氏は日高、東西牟婁三郡から推されて議政壇上に送られた氏が政客としての生活はいよく、こゝに一步を踏み出したのである。

然るに代議士として二期を過して後感する處あつて爾後出馬を断念し又東京日日新聞の社長も辭任し單に一辯護士となつて京橋區に住し専ら民權伸張の爲に盡した。然る處明治三十四年に至つて氏が國政に對する關心は再び氏を驅つて立候補を宣せしめ居住地京橋區から出馬したが不幸にして當選を願えなかつたが次回三十六年の選挙には高点を以つて當選し爾來氏が高潔の人格と適切な政見とは仁俠の東京市民から同情さるゝ處となり昭和二年貴族院議員に勅任せらるゝ、まではとんど當選を續け

其の間大正元年には副議長に選ばれた事もあつた。

氏はこの長い代議士生活を通じて常に名利の念薄く幾多の誘惑を排して政界の不正義に抗し次第に腐敗して低調卑賤に傾いた近代日本の政界にあつてよく少き中にも職中の錚々たる品位を持したのは汎く人の知る處、殊に大正十四年五月には名分の立たざるを以つて多年先輩として肝膽相照の間柄にあつた犬養毅氏と袖を別つに至つた事は嗚々を要せぬ著聞の事件である、氏はこの多忙な政治生活の間にあつて時には東京専門學校の講師たりし事あり。東京市會議員及府會議員たりし事あり尙又専門の法律學に關しても幾多の著述を残して居る今や貴族院にあつて誇々の言をされて居るのは既に世人の識るところである。

### つ條直彦

【家庭】 令夫人をはじめ嗣子盛男君は商學士にして帝國公債に在勤し次男和童氏は學士ながら尺八界の名人荒木鼓童氏に師事し其の高弟として令名高し。

### 織田昇次郎氏

【現住所】 東京市豊町區上二番町一四  
【出身地】 和歌山市和歌町  
【出生】 安政二年三月生

氏は和歌山市の徳望家故織田庄兵衛氏の次男として生れた、九歳の時早くも嚴父に別れ母堂や兄君の薫陶を受けて人と爲つた。香牛の氣は既にこの時に發し明治三年氏が十六歳の時意を決して大阪に出て獨力綿布商を開業したが其の結果は面白くなかつたので二年許りにして東京に出た。上京後の氏は同郷の先輩に意見を徴し或は一流商店の經營振を視察した。一日蠟穀町の米穀取引所の街頭に立つて取引所を見物して居る間に取引所のものに魅せられて遂に之を自分の仕事に選ぶ事となつた。而して辛懣を嘗める事幾年の後東京米穀商品取引所仲買人となつて獨立し更に株式取引所仲買人となつたのが明治二十二年氏が三十三歳の時であつた。

其の後の氏は堅實主義をモットーとして着實な經營を續けて其の基礎も漸く確實になつた時日清戦争に際會して一躍巨萬の富を贏えた。氏は人の勤むるまゝに幾多の新事業に關係した爲

戦後の反動に遭遇して其の結果はマンマと失敗に歸した。然るにその後十年日露戦争の頃には再び相當の資産を擁するまでに擡頭した氏は前帳に顧みて戦後の反動を警戒したが顧客の爲に多大の損失を負担せしめられ再び失敗を繰り返す事となつた、乍併前後兩度に亘るこの蹉跌は氏には尊い経験となり拮据十年歐洲大戦の結果招來された好景氣とその恐慌の間に處して氏は確實に千萬の富を握つたのである。後年東京株式取引所理事中にあつても氏の信用人格手腕は同業者のみならず一般からも認められたのは謂ふまでもない。

### 織田昇次郎

大正八年には取引所制度改正調査會委員に任命されて歐米を巡視すること約一年評事に列國の制度を視察調査して歸朝した。

この時に氏は歸した土産が二つあつた。一つは河合良成氏に委嘱して上梓した「経育株式金融市場」で他はベルリン大學教授コーラス氏の蔵書約一萬八千部から成るコーラス文庫であつた前者は其の後我國取引所に關する理論及實際に裨益せし事多大なるものがある。後者は東京帝國圖書館に寄贈されたが不幸大

震災の厄に遭つて烏有に歸した。然しこの文庫には別に維持費として一萬圓外に英貨公債一千磅が添へられて居たので之で新に織田文庫が設置され氏の貢獻を永く記念することになつたこの他氏が各種の社會公共事業に盡す處僅少でなく紺綬褒賞を賜はり其の功勞を表彰されて居る。

氏が經營する事業の中氏が最も心血を注いだものは信託會社の設立經營であるが冒險的な株式界にあつて最も合理的堅實主義を體得した氏は早くも信託事業に着目したのは蓋し過然の事ではない。殊に大正八年歐米視察の途上英米の信託制度に刺戟されて歸朝するや直ちに資本金參百萬圓全額拂込として今の織田信託株式會社の設立に着手した。そして大正十二年信託業法の實施せらるゝを俟つて翌十三年五月から一般信託業を開始したのであつた。

氏自ら社長となり氏の下に常務たる令嗣佐太郎氏と多年三井信託にあつて新業に造詣深い小平房吉氏等の經營宜しきを得て社業著々發展し大正十四年十二月には政府の監督最も嚴重なる保險會社の財産を受託し得る政府指定會社に伍する事となつたが其の間氏の努力せられたことは特筆に價する。

【家庭】夫人すゞ子さんとの間に長男佐太郎氏長女かよ子さんあり。佐太郎氏は東京高商出父君の事業を授けられて現信託業務たるは前述の通り。夫人は多久男爵の女、かよ子さんは信託重役森盛一郎氏に嫁す。

### 野村吉三郎氏

【現住所】 東京市外千駄ヶ谷八五四  
【出身地】 和歌山市徳町  
【出生】 明治十年十二月生

氏の嚴父は元和歌山藩士故増田喜三郎氏と稱す氏は幼時主として母堂の薫陶を受けて長じた人、明治二十七年和歌山中學三年の半に東京に出て私立海軍豫備校に學び越えて二十九年江田島の海軍兵學校に入つた、この頃氏は叔母の家である野村家に養子となつたのである。在學中は成績優秀にして卒業の時には恩賜の双眼鏡を辱し三十三年少尉に任官、氏時に二十四歳。明治四十二年大尉時代海軍大學の入学を許可されながらその必要なしとして之を辭退した逸話もあるが間もなく特命に依り塊太利に派遣され同地駐在武官となり次いで少佐に昇進した。後獨

逸に入つて軍事研究に従事する事前後三年にして歸朝、明治四十五年八月第三艦隊軍艦音羽の副長として支那に派遣され更に大正二年五月より本省に入つて軍務局に勤務すること、なつたがこの時當時の海軍大臣齋藤實氏に認められてその副官に抜擢され中佐に進んだ。氏の學殖見聞識見手腕は既に部内一般に認められて居たが殊に齋藤氏の知遇に浴し大小軍務悉く氏の謀議に參策するの間柄となつた。

後米國駐在武官に任命されて渡米し大正三年大佐に昇進、大戦中は米國の動靜に就いて詳細の調査をして功を立て大正六年歸朝するや海軍省高級副官、軍令部參謀に任じ、第三班即外國情報部長となり同時に東京御用掛を仰せつけられ當時攝政にましました今上陛下に拜謁して世界の軍政事情を講述申上げた事もあつた。歐洲大戦休戦となりベルサイユに講和會話が開催された時は西園寺、牧野全權に隨員として之に臨み更に大正十年ワシントン軍縮會議には徳川、加藤全權に隨つて多大の功績を残した、後少將に昇進し遣外艦隊司令官に任命され更に海軍省教育局長に就任した。昭和四年中將に進み練習艦隊に司令長官に補せられて今又青年士官の養成に當つて居る。氏は獨り海



軍部内の事のみならず國家外交上の樞機にも参劃し、其の識見手腕と西郷南州を偲ばす風貌とは將來氏の地位を益々重からしむるものがあらう。氏は孝心深く郷里に養母實母を同居せしめ多忙な軍務の餘暇歸省孝養を怠らない。

【家庭】秀子夫人は奈良縣山岸家の出にして亦賢夫人の譽高し、嗣には長男忠君あり。

### 前田米藏氏

【現住所】 東京市麻布區三河壺町二八

【出身地】 伊都郡高野口町

【出生】 明治十五年二月生

氏は伊都郡高野口町の生れ、小學校を卒へて後は家業吳服太物商を見習つて居たが明治三十一年の春嚴父故嘉平次氏が新に手を染めた木材賣買の蹉跌に逢つて高野口の店も危いまでの打撃を受けた。こゝに於いて氏は宿志を達けるべく上京しその頃高野山から派遣されて早大に學んで居た令兄萬三氏を頼つたのであつた、其の翌三十二年には嚴父の長逝に會し一家の悲運は更に甚しきを加へたので氏の受ける學費も極めて乏しく不自由

を忍びながら一意學業に勵んだと言ふことである。

出京後氏は正則英學校早稻田英語專修科等に語學を修めた後中央大學に入學し三十五年優秀な成績を以つて業を卒へた卒業後は直ちに判檢事試験及辯護士試験に應じて何れも好成绩で合格したのは氏が二十一歳の時である。明治三十五年司法官試補に任ぜられて廣嶋地方裁判所に赴任したが翌三十六年官を辭して東京に歸り故横田千之助氏と共同して京橋に法律事務所を開いた。横田氏は中央大學の先輩であつて深く氏の氣魄才幹を認め氏の爲に種々の援助を惜しまなかつた。

氏は辯護士として日日激務を執る傍ら外國語學校に入學して佛蘭西語を學ぶこと三年更に獨逸協會學校に轉じて獨逸語を修めた等は以て氏の半面を知るに足る。其の後在野法曹界に於いて著々頭角を顯はしてきた氏は大正六年に至つて故原、横田氏等の勸説に依つて東京府下から衆議院議員の候補に立つて美事當選しいよいよ多年の宿望であつた政界に麒足を伸すこととなつた之れ氏が三十六歳の時である。政界に於ける氏の榮進は目醒しいもので僅々數年を出でずして一黨の幹事長を勤め更に總務に進んだが昭和二年春田中政友會内閣の成立と共に法制局長

官に就任した。其在職中田中内閣の後半期に於て第五十六議會を中心として其の前後から政界の風雲を告ぐるや氏は政府側の代理者として各方面に奔走して紛糾問題の緩和に努めたが就中所謂不戰條約問題に直而しては議會閉會の後も引續き各方面に馳せ廻り、或は自ら其の局に参劃してさしも險惡なりし問題も遂に無事樞密院の御諮詢案を通過せしめたるは特筆すべき事柄である。

氏は前途尙春秋に富める人、内には變通の才畧と實行の手腕を藏し、しかも圓滿にして圭角がない、今後の

### ある花

政友會を擔ふべき人々の中にあつて其の前途を注視されるのは蓋し氏を識る人々の噂のみではなからう。氏は又夙に實業界にも雄飛して京成電鐵、東京電燈、吾妻川電力等に重役たる外數大會社の法律顧問たり。

【家庭】養子夫人は我國近代論壇の大家故橋本雅邦氏の女、夫婦間には二男一女あり。

### 建畠大夢氏

【現住所】 東京府下日暮里渡邊町一〇

【出身地】 有田郡城山村

【出生】 明治十三年二月生

建畠氏は郷里城山村の舊家である。氏は郷里の小學校を卒へると十六歳の時勤められて大阪醫學校に入學し豫科を終へて本科に進まんとする頃に至つて醫者たるを欲せず、在來其の好む處の畫家を以つて立たんとした。然るにこの事は嚴父の激怒を買ひ學費の仕送りも勿論生家への出入も差止められてしまつたが叔父小林山郷氏の援助を得て明治三十五年夏京都美術工藝學校の繪畫科を志願し都合により彫刻科へ廻された。然るに氏としては思ひがけなく入學した彫刻科が大いに氏の興味を惹き寢食を忘れて勉強に耽る様になつた。

明治四十一年西村西重氏等と共に同校を卒業し更に東京美術學校に入學した。この頃氏の窮乏甚だしく苦學をつゞけて居たが技量大いに進んで明治四十二年第二回文部省展覽會に初めて出品して「閑靜」と題する作が入選したのみならず三等賞を贏えたのであつた。かくて氏は連年の文展に入賞し四十五年春卒業

と全時に懸望されて母校に残り教授に就任し帝展と組織が變つて後はその審査員に任命された。一時朝倉文夫氏の東臺彫塑會に對抗して贖原社に立て籠つたこともあつたが

# 建尚大野

今や帝展彫刻部内の巨匠として自他共に許す處である。  
【家庭】氏は藝術の爲永く獨身をつゞけて居たが卅八歳の時勤められて八幡村海瀨氏の女重代子さんを娶られ二男一女を挙げらる。氏の本名は彌一郎、大夢は其の號。

## 濱口 擔氏

【現住所】 東京市外濠谷町常盤松二八〇  
【出身地】 有田郡廣村字廣  
【出生】 明治五年二月生

氏は明治五年濱口梧陵翁の長男として翁が五十餘歳の時に生れた。嚴父梧陵翁は豪邁卓抜の志を以つて出で、は國事に奔走し退いては郷黨の窮民を救恤し産業の興振を計つた人、殊に和歌山縣會創始期の議長として縣政の爲に盡瘁された事は本縣人の忘れざる所である。

氏は幼にして膽力あり眞に梧翁の跡たるに足る異色があつたと言ふ。梧翁は早くから次女ミチ子刀自に養嗣子を迎へて家を繼がしめた爲其の後に生れた擔氏は自ら分家して一家を樹てる事となつたと聞く。氏は明治十九年和歌山師範附屬小學校を卒業して上京し慶應普通部に入り二十四年優等の成績で卒業すると大隈重信侯(當時伯)の風を慕つて早稻田大學に入り英語政治科に學び二十七年又優秀の成績で卒業した。然るにその後氏は感ずる處あつて鎌倉圓覺寺に參籠し釋宗演師に師事し二年餘の間精神鍛練に精進した事もある。明治二十七年再び志を起して英國に渡り劍橋大學に入學した。  
明治三十六年業を卒えて歸朝したが翌三十七年の總選舉には留學中研究し來つた代議政體や社會制度に關する抱負を提けて世に問はんとして郷里から立候補し美事當選の榮を擔つた。氏が代議士として議會に見ゆるや先づ歳費辭退を申出て院の内外を驚かしたのは有名な事である。併し親しく英國の議會を學んで來た氏にとつては當時日本の議會はあまりに蕪雜頹狀を極めて居た爲め氏の如き高雅温厚の資性を以つてしてはこのやうな

政界に宿志を伸ぶるの不適當なるを知つた氏は潔く政界を斷念して爾來實業界に身を投じた。豐國銀行の創立に參割し或は舊苗代水電の經營等に當つたが今はキリンビール株式會社に監査役を勤めて居る。氏は嚴父梧陵翁以來の關係に加ふるに氏の圓滿高潔な人格と相俟つて社交場裡に恒に光彩を放つて居るが殊に縣出身の後進に對しては或は學費を授け或は卒業後の面倒を見る等郷黨の爲努力せられて居るなど氏の徳望の高き所以も亦偶然でない。

【家庭】氏の夫人八重子さんは元の郵船會社々長であつた故近藤廉平男爵の出、氏が英國から歸朝するや特に近藤男が囑望されたものであると聞く。長男康君長女篤子さん次女美重子さんの一男二嬢あり。

## 岡本連一郎氏

【現住所】 東京府下原宿二九〇  
【出身地】 海草郡鳴神村一〇六六  
【出生】 明治十一年一月廿一日生

明治三十五年日英同盟が締結されてからは之に依つて東洋平

## 岡本連一郎

和を維持せんとするのが我國外交政策の基調となつた。従つて倫敦に於ける日本大使館は遣外外交機關中の最も重要なものとして其の大使館付武官も他の國に駐在するもの、裡で最も榮職とされてきたのである。氏は大正十一年以來この英國駐在の大使館付武官として派遣せられ大正十二年同地に於いて少將に榮進したが任務を果たして歸朝するや第九旅團長を経て昭和二年一月參謀本部に入つて總務部長の要職に就いたが四年八月更らに參謀次長に拔擢せられて陸軍部内の羨望を一身に集めて居る。

氏は海草郡鳴神村岡本連之進氏の長男、生家は其の地に知られた家柄と聞く、陸軍部内稀に見る資性温厚の人格者である。會つては英國に遊んだだけに陸軍部内でも英國通として許されて居る事は謂ふを俟たぬ。氏は明治三十年の士官學校卒業生。三十一年に少尉に任ぜられ第三十七聯隊附となつて軍隊生活を振り出し臺灣や朝鮮の守備に任じた事もあるが日露戰爭に際しては沙河の大會戰以來北滿の野に中隊長として功績を積まれた

事と聞いて居る。

氏は四十二年に陸軍大學を優等の成績を以て卒業し恩賜の軍刀を賜つた人、夙に秀才の譽高く當時既に將來の榮進を期待されたものであるが明晰な頭腦と卓抜したる手腕とが俄然として今日の地位を築き陸軍將官中、有數の巨星として重きをなして居る。昭和三年三月陸軍中將に昇進し従四位勳三等功五級は氏現在の勳等である。

【家庭】氏の夫人マイさんは和歌山市の生れ。夫婦の間には長女梅子さん長男連君以下二男三女がある。

### 中松盛雄氏

【現住所】東京府下入新井町新井宿一三〇九

【出身地】西牟婁郡田邊町

【出生】慶應元年十月生

氏は舊田邊藩士故中松克正氏の次男に生れ田邊高等小學校卒業後和歌山中學に學ぶ、實に同校第一回の卒業に屬す。其の年直に上京して共立學舎に居ること一年餘一高に進み更に東京帝大法科に學んだ。

明治二十四年岡喜七郎氏、内田嘉吉氏、鈴木喜三郎氏等と共に大學を出づるや農商務省に入り明治二十八年に特許局審査官に任ぜられた。

### 中松盛雄

其の後氏の榮進は極めて速にし

て三十二年に參事官となり特許局事務官を兼ね更に幾何もなくして特許局長に就任した。明治三十八年には柏林に開かれた萬國特許局長會議に列し四十四年にはワシントンに催された萬國工業所有權條約會議に派遣された。かく我國特許事務の府を主宰して専らその制度の確立改良に腐心し一面多くの國際的難事件をも處理したが他方民間に於ける發明の獎勵に留意して局長就任前には帝國發明協會の設立に奔走し、局長としては國產獎勵會(現帝國産業協會)を設立し又第一回發明品博覽會の開催を幹旋したのは既に世人の識る所である。

かくて在官二十年大正二年に官を退いて後は専ら民間の特許事務に携はる事となつたが多年の智識經驗に於いて優に新界の第一人者たるのみならず衷心發明の尊重獎勵を念として發明家を指導すること懇切を極めその調査は最も詳細正確であると謂

ふ。特筆するに足る事は氏が無資力無名の發明家を庇護激勵して其の目的を成就せしめた者が少からぬ數に昇つて居ると謂ふ事である。大正六年には自ら主唱して第一回化學工業博覽會の開催に盡力し更に化學工業協會の設立に奔走した。氏は現に前述帝國産業協會及發明協會に理事たるの他この化學工業協會にも役員を勤めて居る。

【家庭】氏は幼少の頃より基督教に傾き長すると共に益々熱心なる信者となり現今では一家を擧げて日本キリスト教會の會員である。秀子夫人との間に長男潤之助君次男節二郎君以下二男一女あり、潤之助君は辯理士辯護士法學士たる他一高時代名投手内村祐之君の捕手として今尙名高い。節二郎君亦法學士にして司法官たり。

### 山田三郎氏

【現住所】東京府下品川町北品川御殿山三一八

【出身地】那賀郡岩出町大字清水一二八

【出生】明治六年六月十七日生

氏は和歌山中學校の出身者。明治二十九年東京法學院を卒業

### 山田三郎

務局に局長として重きをなすに

至つた登龍門である。其の後吳、舞鶴と轉任して再び吳に戻り三十八年には旅順鎮守府海軍軍法會議附として赴任したが間もなく横須賀に轉じて軍法會議附となり同時に海軍機關學校の教官を兼務し、其の翌三十九年には三度び吳に轉じて四十二年には吳鎮守府海軍軍法會議法務長に昇進した。大正三年東京軍法會議附として海軍省法務局に出仕すること、なつた、其の後高等軍法會議法務官に進み大正十四年海軍省法務局長の椅子を占むるに至つた。現行軍法會議法が制定される時氏も亦其の起草委員として多年の經驗に依る蘊蓄を傾けられたものであるが氏にとつて忘れ難い思出は斯の第一次山本(橋兵衛)内閣時代に起つた海軍の大疑獄シーメンス事件の法務官として活躍された

一事であらふ。氏は現に従四位勳二等の勳位を有し海軍省内文官中の先輩として尊敬されてゐる。

氏は趣味極めて廣汎の人園藝は段に近い腕前を有し素人間では既に敵を見ざる程の犬天狗、又園藝は殊に其の好むところ就中朝顔の栽培に至つては二十数年の経験を以て群少園藝家の隨從を許さないものがある。

【家庭】は夫人みづ子さん(四二)との間に二男一女あり長男良行君(二〇)は今、水戸高等學校に在學して居る。

### 木村平右衛門氏

【現住所】 東京市日本橋區本木町一

【出身地】 海草郡内海町

【出生】 明治十四年二月生

氏は元濱口家の出にして濱口吉兵衛氏は氏の令兄に當る。幼名を富七と呼び廣村に育つて土地の小學校に通つたが中途東京に出て後東京商工中學に入り優秀の成績で卒業するや直ちに一つ橋高等商業に入學した。時を前後して先代平右衛門氏の懇望を受け間もなく木村姓を名乗る事となつた。

依頼されたので氏は種々和田氏の指導を仰いで居たが大正六年には和田氏と共に歐米に遊んで主として電氣及紡績事業を視察した。その時伊太利で鹽酸加里的製造及專賣權を獲得し歸朝後大正六年に之を基として日本電化工業を起し又其の翌年には尼ヶ崎製瓶を設立した外郷里に於ても、日高川水力電氣株式會社を始め白良濱温泉自動車會社等を創立して其の社長に選任された事などもある。

かくの如くして氏が關與せる事業は次第に多方面に亘り現在氏が重役として縱横の腕を揮つて居るものは東印度起業會社、上海電球會社、銚子醬油會社、濱口商會社等でも九州水電は氏の中心事業で常務取締役である。又家業木村漆器家具店は大正九年會社組織となし木村實業株式會社とし氏は自ら其の社長となりて經營に當つて居る。大正四年には選ばれて衆議院議員となり政界に於ける活躍を期待されたが事業の多忙な爲に一期を以つて勇退した。木村家は代々内海地方に貢獻する處大なるものがあつたが氏も亦南英育英會を始め各種學校社會事業産業の開発等の爲に勤からぬ密附をされて居る。氏は温邪謙讓人に接するに鄭重寔に玲瓏たる人格者である學生の頃から劍道

木村家は人も知る如く海南地方の物産黒江漆器の店舗を江戸に開いてから三百年の歴史を有し郷黨に響いた徳望高き商家である。氏は木村家に入ると間もなく平右衛門を襲名したが不幸高商在學三年にして病の爲に退學しなければならなくなつた。これより氏は店員の間で伍して家業にいそしみ漆器が國產品として世界の市場に認めらるゝ事を専念策した。

氏が二十五歳の時恰も明治三十八年日露の國交恢復と共に土方伯等の主唱の下に滿鮮起業同志會が組織され滿鮮地方へ經濟的發展を策する事となつたので氏も亦之れに參加し當時事業界の逸足に伍して屢々滿洲北京等を視察した特に氏は中部支那にわけ入つて支那漆を研究して歸り翌三十九年には資本金二十五萬圓を以つて内海に木國合名會社を設立し支那の原漆を輸入して之が調製を初めた。然るに之の事業は充分の成果を揚げなかつたので事業を用人に委して自ら新に電氣事業に着目し明治四十四年氏三十二歳の時九州水力の創立委員となり資本金八百萬圓を以つて其の設立を完成せしめた。

之れより先氏が高商を退いて實業界に身を投ずるや令兄故先代濱口吉右衛門氏は昵懇の間であつた和田豊治氏に氏の黨陶を

水泳に達し又熊蜂と號して繪畫をよくし好んで竹を畫く。

【家庭】は八百子夫人との間に長男泰太郎君以下二男二女あり。泰太郎君は高商卒業後ハーバード大學に留學し、今は木村實業に副社長格で父君を代理して居る。

### 中西巖氏

【現住所】 那賀郡西貴志村島居

【出身地】 東京市麻布區富士見町四五

【店舗】 日本橋區兜町三

【出生】 慶應三年五月生

一上一下、忽きにして經濟界に波紋を刻む兜町街頭に商陣を構へ株式市場に神出鬼没の快腕を揮ひ虎視眈々財界の風雲を凝視する人に吾が中西巖氏がある。

氏の生家は那賀郡西貴志村家祖は代々土地の郷士として知られたる家柄である。氏は明治十八年縣立和歌山師範學校を卒業して小學校に教鞭を執り又小學校長等に任命せられて教育界に身を置くこと數年、後逓信官吏を志して和歌山郵便局に奉職し後名古屋郵便局に移り更らに又東京に轉任する等、此間官界生活を續くる事前後十年、學問の躍進漸く甚だしきを見て心良し

とせず決然官途を辭して方向轉換株式界に身を投ずるに至つたのであるが氏は新界に志しを立てるに至つたには大なる理由があつた。夫れは氏が官界を辭すると共に其の將來は政治家となつて槍舞臺に馳驅せんと希ふたのであるが「先立つものは金、而も迅速に富を得んには株式界を措いて何ものもなし」といふのが氏がたま／＼斯の道に行路を選んだ動機をなしたものである。

## 中西巖

氏が株式界に投じたのは年齒

三十六歳同郷の出身者にして兜町株界に盛名を馳せた粟生武右衛門氏の店舖に客分として株式相場に手を染めたのが抑々の始めである斯くして一步又一步遂に氏が其の後半世を株界に始終するに至らふとは其の當時の豫想だにせざる所であつた。日露戦役時の株界の躍動機に際して巨額の利を占めた氏は明治四十四年兜町街頭に華々しく株式仲買店を開業し新進の勇者として丸中の商號を兜街に譲られたものであつたが勢いに乗じて躍進した結果は大正二年石油株の盛況時に際し振手の手違ひに失敗を演じて遂に閉店の止むなきに立ち至つた。其後の氏は起伏數

年歐洲大戦時の好況時には躍動又躍動一貫の強氣に買ひ進み更に戦後の豹類落相場に賣方針が圖に當つて再び巨額の利をつかむに至つた結果大正九年丸九商店の商號の下に現所に仲買店を再開し長男敦義氏を店主として第一線に立たしめ氏は其の監督者となつて引續き經營されて居る。  
【家庭】夫人のぶ子氏(五九)との間に子女十人を有し何れも健在であるが現在家庭には長男敦義氏を始め二男二女がある、氏は近年日々午前中は兜町に出で、業務を監督するも午後は自ら趣味を追ひ或は身心の休養を行事として居る。

## 林桂氏

【現住所】東京市外千駄ヶ谷町榎田丸  
【出身地】和歌山県小川町南ノ町五  
【出生】明治十三年十一月十五日

氏は京阪の地に育つた人、會つて京都府立第一中學校に學んで東京の陸軍中央幼年學校へ轉じた。明治卅三年全校を卅四年士官學校を何れも首席を以つて卒業し、歩兵少尉に任ぜられ近衛歩兵第四聯隊附となつた。間もなく日露の風雲急を告ぐるや

聯隊旗手として出征し戦中中尉に進み近衛歩兵第二旅團の副官に拔擢された。凱旋後陸軍大學に入り四十二年優等の成績を以て卒業すると同時に教育總監部に入つたが明治四十四年獨逸に派遣せられ歐洲大戦の初まるまで全地にあつて専ら軍事の研究に従事した。大戦勃發と共に參謀本部に軍務を替へデンマークに渡つて或る極要の任務に服し滯歐前後五年にして大正五年歸朝した。歸朝後は千葉歩兵學校研究部主事を経て長く東京の陸軍大學教官を勤め大正十二年近衛歩兵第一聯隊長に補せられ十四年には陸軍省に入り軍務局軍事課長となつた軍備縮少が一世の輿論となつて時の陸軍大臣宇垣一成大將が大英斷を以つて實施した四箇師團廢止學校教練に引き續き在營年限短縮や青年訓練所法等は氏が専ら關係をした仕事であつたと聞いて居る。

## 林桂

帝都の半を焼き拂つた關東の大震火災に際しては戒嚴令下の帝都殊に被害の甚だしかつた江東方面の警備に當り數萬の生靈を焼き盡した慘状目もあて得ざりし彼の被服廠跡などの始末を

行つた事などは聯隊長時代の氏にとつて忘る可らざる思出の一つ。昭和二年七月少將に進むと同時に東京の歩兵第一旅團長に補せられたが翌三年新進の身を以つて參謀本部に第四部長の要職を占めて陸軍部内に於ける異數の拔擢として羨望的となつたが、四年八月兵器本廠附に轉じ軍事調査委員長となつたが瀆口内閣に依つて新設された軍制改革調査會の幹事長として改革の具体案作成の重大任務に當るものであつて其の結果は非常なる期待を以て注目されて居る。正五位勳三等功五級は氏現在の勳等である。氏は頭腦明晰にして智略縱橫家を容るゝの度量に富む。其の卓抜せる手腕は以つて氏の將來を期待すること極めて大なるものがある。  
【家庭】夫人喜美子さんは我國事業界の重鎮故大倉喜八郎氏の一門に當る人、氏との間に長男實君次男宏君がある、又嚴父和太郎氏母堂千鶴氏が揃つて今尙家庭に在住する。和太郎氏は夙に英文學を修め京都の第三高等學校に勳任教授たるに至るまで前後四十七年の永きに亘つて勤績し教育事業に盡され我紀州出身者で三高に遊んだ人は悉く氏の教導を受けた徳望家と聞いて居る。

### 山東誠三郎氏

【現住所】 東京市赤坂區青山南町六丁目  
【出身地】 日高郡御坊町  
【出生】 明治二十一年八月生

華胄界にその人ありと謳はれた故頼倫侯の信任を受けて徳川家財務部長の要職に就き故侯亡き後は當主頼貞侯の信任厚く今や名實共に徳川侯爵家の大黒柱として侯爵家を存負つて立つて居る山東氏は和歌山市東長町で呱呱の聲を揚げた。當時和歌山縣廳に職を奉じて居た殿父重成氏が後日高郡役所に轉任されたので氏の少年期は傳説で名高い道成寺に近き御坊の町にて成育した。明治四十一年關西學院中學部を卒業するや慶應義塾に志して理財科に學ぶ、在學中は常に首位を譲ることなく同郷の先輩であり且塾長であつた鎌田榮吉氏に見出されたのもこの頃である更に當時塾在學の本縣出身學生を代表して南發育英會委員に擧げられた爲その育英會に列席するうちに先侯の認むる處となつたと聞く。かくて氏が後年活躍の端緒は着々として具はり加ふるに氏の明敏な頭腦と實際的手腕とは既に知友の均しく囑望する處となつた。

氏が慶應を卒業したのは大正二年のこと、この年の九月頼貞氏(當時侯爵の嗣)が英國に留學せらるゝ事になり氏は選ばれて頼貞氏に隨伴するの榮を擔つた。在英中は倫敦大學に入つて政治經濟を學んだがたま／＼歐洲大戦勃發した爲め、豫定を變更して大正四年冬頼貞氏と共に歸朝した。歸朝後は侯爵家の知遇と鎌田榮吉氏の推挙を受けて徳川家の家職となり財務部に勤め漸次重きを加へて今日に至つた。

氏が徳川家に入つて後も特記するに足るものは二三に止まらないが中にも大

### 山東誠三郎

正八年十月ワシントン府に開催

された第一回國際労働會議に際し我國政府代表として派遣された鎌田榮吉氏に隨行して樽俎の間に活躍された事は人の知るところである。其の後大正十年頼貞氏夫妻が再度歐洲漫遊に旅立たれた時も氏は東道役を承つた。かく歐米の地を踏むこと屢々氏は立派な英國型の青年紳士として押しも押されもせぬ實録か具はつた。圓滑にして他をそらさざる態度は侯爵家を背景として今や東都社交界にも重きをなすと共に本縣出身の有力者を網

羅せる不老會を主宰してよく同郷人間に瞻星の如く輝いて居る當主頼貞侯には最初の渡英以來知遇を重ね其の信任いよ／＼厚く、澄澗たる性格は天稟の才腕と相俟つて氏今後の活躍場裡更に多量なるものがあらう。

【家庭】夫人登喜子さんは鎌田氏の義妹に當り淺野長勳侯の令姪である。子供さんは一男一女の御二人。

### 上野山重太夫氏

【現住所】 東京府下流谷町八幡通一ノ三四  
【出身地】 有田郡廣村大字廣  
【出生】 明治四年七月廿九日生

氏は明治二十五年和歌山尋常中學校と稱せし時代の和中出身者で第三高等を経て東京帝國大學に進み明治三十一年法科を卒業した。卒業後司法官試験となつて東京裁判所に奉職すること一昨年、辭して方向轉換實業界に入ること、なり富士瓦斯紡績株式會社に入社して爾來十有五年、其間營業部長、經理部長、調査部長等恒に會社の重要事務を掌理して明治四十四年社を辭し翌四十五年九州水力電氣株式會社に入りて常務取締役役に選任

### 上野山重太夫

されつゝある丈  
けに氏によつて  
經營されつゝあ

る同社の前途亦期して見るべきものあるを信じて疑はぬ。氏は其の間大正八年日華紡績會社に關係して監査役に就任し現に其の職に在るなど纖維工業方面に於ては斯界の識者として知られ

せられたが當時に於ける九水は大分水力電氣と豊後電鐵の合併の直後として氏は先づ合併の結果に依る事務の整理に着手して經營の大方針を確立し或は發電工事の具体化を圖つて之れを成せしめる等九州水力をして現に八千六百萬圓の大資本を容する大會社たらしむべき社礎の確立に努められた。大正六年常務を退きて東京に引上げ本社事務にたづさはる事となつたが大正十一年東京麻糸紡績會社が歐洲大戦後の恐慌に遭ひ、業況不振遂に行き詰るに至つた時氏は荷重役全部の辭職の後をうけて經營を引受け同社の社長に就任して整理を斷行し、克く今日の社礎を確立するに至つた、同社は現に靜岡縣沼津町に工場を有し紡機五千鐘、織機五十臺を設備してラミー麻糸の製造をなしつつあるがラミー紡糸事業は近代纖維工業中最も其の將來を囑望

て居る。

【家庭】登世子夫人(五)は豊後中津の生れ、長男重太郎君(二七)は京大工科出身の新進工學士現に鐵道局京都事務出張所に在勤、二男重夫君(一七)は市立第一中學校に通學中  
趣味——氏は園藝を愛し素人仲間では天狗?

### 吉村幹三郎氏

【現住所】 東京府下大久保町東大久保四二一  
【出身地】 那賀郡山崎村大字畑毛  
【出生】 明治十年三月十五日生

氏は中央大學の前身東京法學院に法律を修め明治三十年を以て卒業した。翌三十一年吳鎮守府軍法會議附法務官候補を拜命したが之れ氏が法務官として海軍部に重きを爲すに至つた第一歩である。法務官に任ぜられて後明治三十四年には佐世保鎮守府軍法會議附に轉じ、又三十六年艦隊附に轉するや日露開戦と共に東郷司令長官の幕僚として出征し卅七年二月九日に於ける旅順の攻撃に際して三笠の大艦に命中した敵艦の爲めに名譽の負傷を受け佐世保海軍病院に療養すること一ヶ月再び艦隊に

歸られたが其後舞鶴、吳、旅順、横須賀を歴任して大正三年には吳鎮守府に法務長となり大正八年には更に横須賀に轉じて法務長たること六年、大正十四年高等軍法會議法務官に轉じて現今に至つた。大正十二年關東大震災の時横須賀鎮守府に法務長たりし氏は食糧の管理、罹災地に於ける治安維持の爲めに活躍せられたが當時箱根以東の各地方に各種の事故が頻發したにも拘らず氏の任地横須賀地方に限り一の窃盜事件すら發生しなかつたのは海軍當局の施設宜しきを得た結果であつた。

### 吉村幹三郎

【現住所】 東京府下大久保町東大久保四二一  
【出身地】 那賀郡山崎村大字畑毛  
【出生】 明治十年三月十五日生

あつて其の衝に當つた氏の功績は實に稱揚すべき事柄とする。氏は現に従四位勳二等の勳位を有し海軍部内法務官中の古參者であるが性極めて温厚稀れに見る人格者として信頼される事頗る厚い。氏は趣味として鳥鷲の技に長じ日本棋院から初段の免許を與へられて居る斯界の強者である。  
【家庭】夫人美津子さん(四二)との間に長女清子さん(二二)を始め長男太郎君(一九)外六男を有する子福者である。

### 望月政友氏

【現住所】 東京府下中野町  
【出身地】 伊都郡見好村見井  
【出生】 明治十七年十二月生

氏は伊都郡見好村望月右内氏の長男として生る。嚴父右内氏は地方自治の爲めに盡して衆望高く會ては選ばれて衆議院議員となり日比谷政壇に勇姿を現した。今尙郷黨の記憶するところである。

氏は會て奈良縣立五條中學校を卒業の後、第六高等學校を経て東京帝大に進み明治四十一年其の法科大學獨法科を卒業した大學卒業後農商務省に入り官界を志したが在職僅かに二年有餘にして官を辭し専ら父志を繼ぐこと、なつた。大正十年故兒玉亮太郎氏の後を受けて衆議院議員に選ばれ中央政界に馳驅すること三年其の地盤を松山常次郎氏に譲つて政界を退くに至つた氏は又東京電燈會社を始め數多の事業に關係し將に東京事業界に馳驅せんとする所あつたが大正十三年以來之れ亦手を引いて以來は中野に閑居しつゝ、恒に風雲を凝視して居る。氏は現代人士に稀れに見る温厚篤實の人

### 小槇和輔氏

【現住所】 東京市町區霞ヶ關二ノ一官舎  
【出身地】 有田郡島屋城村金屋五四七  
【出生】 明治十七年十二月十日生

氏が海軍省高級副官に補せられたのは昭和二年の事、前任者(現聯合艦隊參謀長)寺島健少將前々々任者(現練習艦隊司令官)野村吉三郎中將共に何れも和歌山縣出身者であるのも亦一の奇縁と稱すべきである。斯く紀州人が三代引續いて樞要の地位を承け繼いで居る事既に縣人の名譽として吾人の以て意を強ふするに足る所である。由來海軍省の高級副官の任務とするところのものは主管大臣に隸屬して部内に於ける政治上の問題にまで關與する極めて樞要なる地位であるだけに、此の職に就くものは前途有爲の人材に限られて居るのは勿論の事、之れに依つて見るも氏は如何に海軍部内に於ける前途有望の人材であるかを

窺知する事が出来よう。

氏は和歌山中學校第三學年修業後直ちに海軍兵學校に入學して明治三十八年卒業するや候補生として嚴島に乘込み少尉に任ぜられて後大小各種の艦艇を巡遊して順次昇進し明治四十三年には海軍大學校に學び更に砲術學校に入つて其の高等科を卒業した。氏の活動時代は實に此時からが始めである。

大正元年砲術學校に教官となり又海軍工機學校教官等を勤めたが大正三年には第一艦隊司令部幕僚となつて當時帝國海軍の新銳艦であつた金剛に乗り込むこととなつた。其の翌四年聯合艦隊參謀に補せられて日獨戰爭に参加し次で海軍大學校甲種學生。東郷元帥副官兼海軍省人事局員に歴任し平和克復の後大正十年獨逸に駐在を命ぜられて大使館附武官補佐官となり更に進んで大使館附

### 小橋和輔

武官に任せられた。大正十五年

大佐に昇進して歸朝の後特務艦富士乘組巡洋艦山良艦長に歴任し十五年軍令部及海軍省出仕となり昭和二年現職に抜擢せられたのである。

氏は昭和三年勳三等に昇叙せられ現に從五位を賜つて居る外伊太利國よりもコンマンドール、クロンネ勳章を賜られた。實に氏は現時海軍部内に於ける麒麟兒として其の前途を期待すること極めて大なるものがある。

【家庭】夫人みやる氏(三五)との間に長女禮子さん(二三)二女登美子さん(一〇)三女智津子さん(三)の三女あり家庭亦春風みなぎつて居る。

### 杉山金太郎氏

【現住所】 東京市外大井町庚申塚四八五四  
【出身地】 海草郡川永村字永徳  
【出生】 明治八年生

氏は明治八年海草郡川永村の生れ徳義中學校に學び進んで大阪市立高等商業學校に入學して優秀の成績を以て卒業するや直ちに横濱貿易會社に入り後神戸支店に轉じたが其間誠實業務に精勵する事幾年非凡の敏腕家として信望さるゝこと厚く社内に重きを爲すに至つた。後社を辭して中外貿易株式會社を設立して事務取締役となり得意の手腕を振つて事業の發展に努力され

たのは既に人の識る所である。大正十三年豐年製油會社(資本金一千萬圓)を創立して取締役社長となつて自ら經營の衝に當り爾來奮闘を續けて居るが氏獨特の手腕と非凡の商才とは相待つて社運日々隆昌、昭和二年の財界大激變に於ても微動だもせず、その堅實なる造り口は不安の財界に巍然たる存在を示し、清水、兵庫、大連の三大工場を擁して肥料界に君臨して居る。氏は人格の士、所謂紳商と云ふ可き人で事業關係を離れても熱心なる食糧問題、農村問題の研究家であり、その性格が線太く、純真なる品性と相俟つて今や東都一流の實業家となり終せ

た。而も澄澗たる精力と非凡の卓識とは今後の發展に計り知る可からざる深味を持つてゐる。

【家庭】千代子夫人は横濱の實業家市川元八氏の息女、長男元太郎君を中心に一家極めて圓滿

### 島 安次郎氏

【現住所】 東京市芝區高輪南町四四  
【出身地】 和歌山市北町二  
【出生】 明治三年八月七日生

氏は和歌山市の生れ會ては和歌山中學に學んだが幾何もなくして和歌山醫學校に轉じ、更に十五歳の時東京に出て第一高等中學校に入學し其間目的を換へ明治二十四年帝大工科に進み二十七年を以つて業を卒へた。卒業後直ちに關西鐵道株式會社に技師として入社し勤続すること約六年。明治三十三年に至つて逡信省に入り鐵道局技師を拜命し各私立鐵道會社の監督に當つた。而して、鐵道國有の計劃が着々進行し鐵道國有準備局が設置せらるゝに及んで其の方面の事務を兼ねることとなつた。

### 島 安次郎

明治三十九年鐵道國有法律案が議會の協賛を経

て四十二年鐵道院官制が實施さるゝと共に氏はこゝに入り次いで翌四十三年運輸部工作課長に就任した。後鐵道院理事に昇進して工作局長に任せられ更に鐵道院技監に任命せられたが大正八年退職するに至つた。次で南滿洲鐵道株式會社に理事となり在職一期間にして大正十二年其の職を退く。

氏は資性濃厚頭腦明晰本邦鐵道界に於ける技術家の重鎮にして常に専門的機械工學者として其智識の該博造詣の玄妙なるに



止まらず行政手腕の卓抜事に當つて寸毫も苟にせず深慮遠望行ふに勇斷である。入つては本邦車輛の新案改善に努め以て今日の基礎を設定し出ては東京帝國大學工學部に教授を兼ね其蘊蓄を傾投し熱力學並びに鐵道車輛工學を講ずる等其育英に奉仕する一世の師表である。夙に本邦鐵工業の不振を慨歎し製鐵に機械工業に輸入を防禦し輸出を奨励し内地産業の純然たる素地を創設せんと努力留意した。殊に機關車並びに車輛の輸入を排壓し今日に及べる者一に氏の頭腦と手腕加ふるに献身奉公の賜にして其功績の顯著なる枚舉に遑あらずである。氏は大正二年工學博士の學位を得られ又正四位勳三等に叙せられて居る。

【家庭】顯子夫人(五〇)は大津市の生れ。長男秀雄君(二九)は東京帝國大學出身の工學士、現に技師として鐵道省に奉職して居る外四男二女を有す。

## 太田 米吉氏

【現住所】 東京市神田區錦町三丁目  
 【出身地】 伊都郡笠田町  
 【出生】 明治十三年二月八日生

氏は明治十三年伊都郡笠田町に生れ太田庄右衛門氏の長男として幼時を弊に過ぎた。十四歳の時土地の酒造家前田半十郎氏方に奉公したが三年にして深く期する所あり奮然として大阪に出で後雜貨輸出業村田商店神戸支店に勤務する事となつたが其の非凡の商才は忽ち主人に認められ精勵四年早くも支店長に擡された。又同業者より推されて神戸貿易同業組合の役員に擡けられたが過々血氣の勇は氏をして一敗地に墮れしめ、斷然神戸を去つて漂然東京に走り苦悶を續けること幾年會て知己の間にあつた力士常陸山關に世話されて深川の某機械輸入商に店員となり諸官衙廻りを受持つて外交係りを勤務中印刷業の有望なるに着目して主家を辭して獨立僅かの資金を以て印刷業を開始し勦勉力行奮闘の限りを盡して活動を續けたる結果は漸を追つて發展し今や二ヶ所に工場を設備して十數名の店員と百數十名の職工を督勵し東京市内有数の印刷所と謳はるゝに至つた。大正十二年九月俄然として起つた大震災に見舞はれ氏の工場もまた一たまりもなく燒盡され全市民其の爲すところも識らざるに氏は決然として復興に着手し震災後一旬も出でざる九月六日早くも燒跡を整理して機械活字を購入し、工場を設備し、以て事

業を再開し各方面の註文を受け僅々數ヶ月を出でずして百萬の利益を収めるに至つた。機を見て變に應ずる電光石火の早業は當時同業者達を唳然たらしめた。氏は工場を合資組織として自ら其の代表社員となつて益々發展に努力して居るが傍ら東洋紙工印刷株式會社(資本金貳百萬圓)に専務取締役として之れが經營に當つて居る他現に東京印刷同業組合の役員に推され同業の爲めに盡されて居る。俠骨酸々たるどころ、その社會的地位の向上と共に今や帝都實業界の名物男たらんとして居る。

【家庭】夫人ナオ子さんは秋田市の生れ、夫婦間に長女壽子さん長男道一君あり壽子さんは現に精華女學校に在學中

## 土岐 銀次郎氏

【現住所】 東京府下谷町大山一番地  
 【出身地】 那賀郡粉河町粉河  
 【出生】 明治二十七年三月生

氏は那賀郡粉河町三宅進一郎氏の次男に生る、明治四十四年縣立粉河中學校を卒業して東京に遊學し第一高等學校を経て東京帝國大學法科大學政治科に進み大正六年優秀の成績を以て卒

## 土岐 銀次郎

しき岐阜縣農界  
 に敏腕を振ふ所  
 作問題のやかま

業した。之れより先き大正五年同郷の先輩土岐嘉平氏に乞はれて長女嘉子嬢の婚養子として土岐家の人となつたが大卒卒業するや直ちに内務畑に入り岡山縣屬となり間もなく内務省に呼ばれて屬たる事一年餘後栃木縣に郡長となつて赴任し又岐阜縣理事官に榮轉して故鹿子木小五郎氏知事の下に産業課長として小あつたが在任僅に十ヶ月にして東京府に轉じ庶務課長の職に在ること前後四ヶ年其の間大正十二年には關東大震災に當つては救護事務を管掌し物資の配給救護計劃等罹災者の救護に盡して實に不眠不休の努力をする所あつたと聞く。震災後翌十三年には歐米視察の爲め内務省より派遣せられたが中途にして歸朝命令に接し巡遊僅に八ヶ月にして歸朝。大正十四年靜岡縣視學官に任せられ後愛知縣に轉じて學務部長たること八ヶ月更らに三重縣警察部長に榮轉したが昭和三年七月復興局書記官に榮轉し現に經理部倉庫課長兼購買課長として帝都復興事業の中樞の事務を執掌して居る氏は頭腦明晰。稀れに見る敏腕家として其の

將來を囑望されて居るが任官以來今日まで其の昇進榮轉等の迅速なりしこと亦稀れに見る現象である。

【家庭】嘉子夫人(三二)は現京都市長土岐嘉平氏の長女、長女章子さん(一一)次女光子さん(一〇)三女嘉代子さん(八)長男左千夫君(六)の四子あり家庭極めて圓滿恒に春風みなぎつて居る。

### 田中英詰氏

【現住所】東海市鶴町區宮土見町五ノ一七

【出身地】西牟婁郡周參見町

【出生】明治二十四年十二月生

土木請負業株式会社松村組社長として活躍せる氏は西牟婁郡周參見町山崎四郎氏の二男として生れ京都帝國大學工學部探礦冶金科の大正六年度出身で在學中大正五年縣出身實業界の大先輩田中讓氏に懇望せられて養子となつた。

大正六年大學卒業後間もなく讓氏の女富美子嬢と結婚した越えて武藏山治氏が實業同志會を組織するに當り、岳父讓氏が事業界の正面より退くに及んで氏は松村組社長となり、土木建築界にその大屋臺を背負つて第一線に立つに至つた。

深奥の學理を複雑極まりなき新界に縦横に活用し、天稟の尺度、俊烈な機案を温容に包むその人格と相俟つて、寔に松村組の社長として十二分の力量と威容とを備へ得た人である。

氏は松村組社長の外に幾多の商會社の重役を兼ねず隙なき活動を續けて居るが而も又激務の間を割いてよく郷黨のために盡し、後輩の面倒を見て居られる。蓋し、實業家として人格、識見兼ね備へた推稱すべき人であり、今後の活躍に多大の期待をかけ得る尤物であらう。

【家庭】には夫人富美子さん(三四)との間に長女惠美子さん(一一)一長男保君(六)あり極めて圓滿。

### 栗生武右衛門氏

氏は海草郡黒江町の産れ、初めて東郡に土を踏んだのは明治十三年の頃年齒廿八歳の時であつた。郷里に在つて「五錢社」と稱する貯蓄銀行様のものを經營して居つた時たま／＼松方内閣

の貨幣制度の改革にたゞられて粉も灰もなく失敗した氏は裸一貫となつて東京に飛び出して來たのである。而して東京に着くと日課の如く己が立志の行路探査に餘念なく市中を這り歩いた到る處飲食店の繁昌するのを見て自ら酔し屋を開業することに決心して其の準備まで整へたのであつたが將來の大成は到底酔し屋の亭主に依つて求められないと着眼向轉、神田川に米穀商を開業することとなつた爾來數年を過ぎて小間屋となるに至つた時掛賣金の回収難に陥つて遂に閉店の悲運に際會した。其の時の貸金總高六千圓借金總額は五千二百圓全部集りさへすれば借金拂つて八百圓残る勘定だが……氏は小僧に帳面を持たせてハサミを片手に貰つた所から帳面を切り取る奇抜な取立法を編み出して毎日懸取りに廻つた。幾何でもよい拂へる丈け拂つてくれ残金は棒引といふ條件で集金した金は八百七十圓、之れを資金として更らに白米商を開始した之れが神田川に白米商を開業した始祖となつたのである。

斯くて數年氏の運命の發芽は漸を追て伸長し、明治二十四年には二三の人々と組合で蠟殼町に仲買店を開いた日清戰役勃發の影響で定期米市場が變動した爲めに失敗を招いて閉店する

に至つた、氏が北海道に走つたのは即ち其れが爲めであつた。北海に英氣を養ふこと前後二ヶ年再び蠟殼町に店舖を構へるや日清戰後の好況に裨さして大成功をなし勢に乗じて更らに兜町に進出して株式仲買店の經營を始めたが三十三年に至つて又々失敗を繰り返した。其間米取、株取共に仲買人委員長に上げられたる笠山栗商店の盛名は東京定期者界に轟かれたものである其後不幸にして業況失敗に歸したとはいへ既に社會に於て相當の地歩を占めて居た氏は茲に株式仲買業の不安を悟つて事業界に志しを轉じ市街鐵道の有望なるに着眼して東京自動鐵道株式會社(資本金貳百五十拾萬圓)を發起して創立に努めた。時恰も兩宮一派の東京電氣鐵道(資本金參百萬圓)福澤桃介一派の東京電車鐵道(資本金三百萬圓)の發起されるあて三派巴狀を描いて線路獲得の一大競争が演じられた時故星亨氏の調停に依つて三社合併東京市街鐵道(資本金千五百萬圓)株式會社を形造るに至つたが星氏因變と共に社業停頓して一株十八圓にまで昇騰した權利株は泡と消え其れが爲め資本金の減額を行つて事業資金を借り入れて第一期線の開業を見るまでには少からぬ努力を盡された、其翌年米國の某市街鐵道會社の支配人來朝し帝國ホテル

に招じて其の演説を聞き追年街鐵事業の有望なるを知るや氏は直ちに東京街鐵株の買占を圖り忽ちにして百萬の利を占めた如き其の頭腦のひらめく所凡人の隨從を許さざる鋭敏は世人を驚かすに充分である。

氏は又第二次西園寺内閣が鐵道國有の斷行に際して二百五十萬金を政府の要路に獻納し其の斷行を助けたる等恒に政府の要路に接近して政策の機密を知る事に努めて事業上の謀計をめぐらし日露戦後の好況時代には帝都政商間に於ける成金中の豪者として羨望の中心となつたが戦後財界の恐慌に遭遇して更らに失敗を繰り返した時の如きは其の損害凡そ一千萬圓に達して居た。大正二年六月には事業の蹶跌の爲め遂に債權者の前に叩頭して整理を發表するに至つたが此の時を以て事業界引退の決意を固め、翌年十二月整理完了して更らに開店するとともに業務一切は舉げて養子藤三氏に譲り氏自らは店舗の二階に只だ筆硯を友として、僅に店舗を監督をなすに過ぎなかつた。爾來氏は年と共に財慾に無關心、自ら世を捨て、漢詩と書道に専心して風月を送つて樂しむとするが其の間支那に渡つて斯の國の老學者衛斗整に就きて書道の真髓を究めるなど書道の精進を怠た

らない。

【家庭】夫人ふじ氏(七〇)との間に二男三女あり、次男武夫氏は東北大學に教授たる外長男秀太郎氏、養子朝二氏は共に神田川に米穀商を經營し長女まさ子さん、二女てるさんには養子を迎へ兜町株式会社は、てるさんの夫、藤三氏に依つて現に經營されて居る。

### 野長瀬 忠男氏

【現住所】千葉縣葛飾村字小栗原一三八

【出身地】四季郡野野村

【出生】明治十一年三月十八日生

氏は明治二十六年笈を負つて東京に出て先づ成城中學校に入學し三十年同校を卒業すると更らに語學の研究を志し國民英學會に學んだが之れ氏は後年米國に遊學せんとするの準備であつた。三十二年英學會を卒へると直ちに北米に渡り米人の家庭學に這入り、其地の工業學校に學んで一千九百六年同校卒業の後、「シンナチロバート」研究所に入り鋼の焼入を研究すること三年にして千九百十年歸朝す。大正四年五月氏は米國に於て研

究した専門の技術を根據として東京市外寺島町に工場を設置し

「帝國發條製作所」と稱して専らスプリングの製作に従事することとなつた。大正八年鐵道省及び海軍省の指定工場となり船舶兵器用各種發條鐵道車輛用發條其他一般彈機類の製作をなし又滿鐵を初め朝鮮總督府鐵道局、台灣總督府鐵道部、東京市電氣局其他全國各都市電氣局の指定工場となり引續き三菱造船所川崎造船所汽車製造會社等の指定工場となつて各種の彈機製作に従事しつゝ、あるが製産年額五千六百噸に達して居る。氏は又昭和三年歐米に渡航し、専門工業を研究して歸朝した爾來熱心に製作技術の改良に努め鋭意工場經營に専念して居る。

【家庭】夫人信惠さん(明治十八年生)は和歌山縣土族早川森之助氏の三女、夫婦間に長女百合子さん(明治四十三年生)東京フレンド女學校卒業、次女マリヤさん(大正元年生)フレンド女學校在學中、三女キクハさん(大正五年生)國府台高等女學校在學中

外二女あり、家庭圓滿。

### 田林 菊三郎氏

【現住所】東京府武藏野町吉祥寺本田南宮裏

【出身地】那賀郡粉河町粉河

【出生】明治七年十月二十七日生

氏は粉河町の酒造家故田林勝之助氏の次男に生れた。然るに氏が未だ幼い頃嚴父勝之助氏は家業振はず一家を舉げて和歌山市へ轉じた爲氏は其の幼時を和歌山に送つたと聞く。明治二十三年氏が十六歳の時初めて人に伴はれて横濱に出たが更に上京して蠟燭町の廻米問屋龜川介次郎商店に勤める事となつた。かくて専心主家の商業に従事すること數年、二十九年の頃米國渡航を思ひ立つて店を退いた。然るに障る事あつて壯圖成らず苦境に沈淪した氏は其の間或は西洋洗濯の業に従ひ或はアイスクリームの行商等はその日の糊口を渡いだ事さへあつたと聞く。斯くの如くして粒々辛懐を嘗むる事三年餘、再び龜田商店に戻つて四十三歳の時までこゝに勤めた。これより先氏が最も苦境に陥つた頃株式界に關係してその事情に通ずる様に

なつた氏は龜田商店に蟄伏して除ろに機の熟するを待つた。大正三年機を得て茲に獨立し兜町に株式仲買業を開いた。間もなく歐洲大戰勃發し吾國の事業界は黄金の浪打寄せよるの盛況を呈し株式界も亦空前の活氣を呼び氏の商店は順風に帆を上げて繁榮を加へるに至つた。大正九年二月店舗を株式組織として大日本信託株式會社の商號を以て各種の事業を經營することとなつたが大正十二年信託業法の實施される、と共に

### 田村柔三郎

更に商號を現在の株式會社田村商店に變へた。氏は自ら其の社長に又舎弟喜三郎氏は専務に就任して株式の取引は勿論其の他各方面に亘つて氏獨特の手腕を振はれて居るが丸の内ホテル中央ビルディング等亦田村商店の經營する所のものである。氏は又大正十一年日本橋區會議員に選ばれ引續き今日に及ぶ。  
【家庭】千代子夫人は東京の人、長男已一君は既に高輪商業を卒業し次男勝次郎君は慶應醫科に在學中であるがこの他二男二女を有す。

### 森下虎吉氏

【現住所】 東京市芝區白金三光町五二  
【出身地】 有田郡田原川村吉川  
【出生】 明治六年五月九日生

氏は曾て和歌山中學校に學んだ事あるが後横濱に出で横濱商業學校を卒業した明治三十一年古河礦業株式會社に入りて勤續すること十五年大正元年同社を辭して後、千葉縣勝浦地方に於て水力電氣を經營する南總水力電氣株式會社(資本金十萬圓)の創立に參與して設立と共に其の専務取締役役に推されて同社の經營に當つたが大正五年東洋藥品株式會社の支配人に迎へられて經營の樞機に參與し専ら事業の發展に努力する所あつたが大正十二年大震災に遭遇するに及んで氏獨特の手腕を揮つて其復興に心血を注ぎ一意事業の再興に努め會社の事業をして速かに舊態に復せしむるに至つた。大正十五年日本醋酸製造株式會社に合併せらるゝや同社の常務取締役に選任せられて以來其の經營の第一線に立つて着々として事業の進展を策し

### 杏川彦生

に至つた。大正十五年日本醋酸

て居る今や同社の製産は年額百五十萬圓を算し局方醋酸工業用醋酸アセトン、並に理研衛生酢、理研ソース等を併せ製造し全國同業會社中其の名を知られて居る。尙昨年来合成醋酸製造法の研究を完成し近く全然輸入品を防壓せんと努力しつゝある。  
【家庭】夫人貴美氏(四七)は海草郡伊太祈會の生れ夫婦間三男四女を有す氏は性温厚君子型の人格者として同縣人間に識られる人。趣味——としては園藝、玉突、旅行等

### 宇治長三郎氏

【現住所】 東京市京橋區大船町一四  
【出身地】 那賀郡麻生津村  
【出生】 明治十八年一月十八日生

氏は明治十八年一月那賀郡麻生津村宇治長三郎氏の三男に生る同三十三年十五歳の時洋々たる希望を懐いて大阪に出で淡路町吉阪商店に商道見習として住込一意忠實に勤めること三年、同店が東京に支店を開設するに際して其の誠實を見込まれて東京支店専屬を命ぜられたが主家の信頼に感激し更に商道に精進し才腕を磨くこと七ヶ年商人としての機略を具へたる氏は明治四

十五年主家を辭して獨立し日本橋區新右衛門町に店舗を構へ洋品雜貨商を開業すること、なつた。之れ氏は二十五歳の青年時代である、氏は過去十餘年主家に於て練へ上げた才腕に擔を掛けて懸命の奮闘を續けること幾年、年と共に業務の發展を告げるに至り、理所に移つて更に事業の擴張を行ひ十數名の店員を指揮して東京五大百貨店を主たる得意として洋品、雜貨類の賣込を爲し又大阪、名古屋等に於ける著名の商店と取引を行ひ東都一流の洋品雜貨問屋たるに至つた。

氏は輕兆浮薄なる現代世相中稀れに見る義氣を有し一度び人に乞はるゝや斷じて之れを拒む事なく他人の爲め犠牲を拂ふこと決して珍らしくない。大正十二年九月俄然として起つた大震災に遭難して其の産を潰滅したる時の如き罹災せる取引先に對しては賣掛代金の取立には一指も染めずして先ず自己の債務の決済に努めて全部の支拂を完了して取引先を驚嘆せしめた一事に見るも其の一端を窺ふ事が出来る又震災直後罹災せる或る同縣人が大震災にショックを與へられて方向轉換先ず生活の安定を圖らんが爲め雜貨の小賣を企て氏に對して商品の供給を求められるや其の發奮に同情して面識も有せざるに拘らず直ちに

資金を融通し巨額の商品を供給して遂に成功せしめた如き、氏の存在は以て紀州人の誇りとするに足るところである。

【家庭】夫人堯子さん(三三)は同村の人、長女文子さんを頭に一男二女を有す。趣味——氏は業務に精進するを以て無上の楽しみとして居るが餘閑あれば佛書を繕き常に修養を怠らない。

### 津守英五郎氏

【現住所】 東京市麻布区東町二二  
【出身地】 有田郡湯淺町  
【出生】 明治二十四年五月八日生

氏は明治四十二年耐久中學校を卒業して東京に遊學し東京高等工業學校に入りて四十五年卒業す。卒業後逓信省電氣試驗所に研究生として無線電信の研究をすること前後七年、大正七年米國に留學してワシントン、ボストン、ニューヨークの各地を遍歴してジーイ

### 津守英五郎

一會社研究所或は米國政府の研究所等に入りて更らに専門の研究を重ね同十年歸朝するや株式

會社吉村商會に専務取締役として迎へられ爾來今日に至るまで同社の經營に専念して居るが傍ら氏は其の發明に係る漁業無線電話装置並に多重式電話装置其の他の特許權を基礎として吉村商會の傍系事業として大正十三年には東洋無線電信株式會社(資本金)五十萬圓又昭和三年には明昭電機株式會社(資本金)百萬圓を設立して何れも其の専務取締役として共に無線電信電話機の製作並に請負仕事を經營して居る。氏は専門に關する研究を唯一の趣味として絶へず其の研究に専念して居るが發明したる漁業用無電装置は大日本水産會より表彰せられ又多重式電話装置は帝國發明協會より大賞を授與された。

【家庭】夫人八重子さん(三三)は東京の生れ頰榮女學校の出身、夫婦間に長男一郎君(二三)二男眞君(四)長女小枝子さん(二)の二男一女ある。

### 狩野光雅氏

【現住所】 東京市外濠ノ川町田端五五一  
【出身地】 有田郡廣村大字廣  
【出生】 明治三十年一月二十七日生

### 恩賀太一郎氏

【現住所】 東京市本郷區西片町一〇  
【出身地】 那賀郡粉河町  
【出生】 明治十七年十二月三日生

氏は粉河町、恩賀定一郎氏の三男に生れ、長じて東京高等商業學校に學び明治四十二年全校を卒業するや直に日清製粉株式會社に入社した。入社後は本社館林工場、宇都宮工場等に順次勤務したが大正三年同社が新に名古屋に工場を設置するに當り氏は選ばれて其の創設事務を擔當し全工場の竣工と共にその工場長となつたが更らに、大正七年には名古屋支店長に拔擢され又、同年神戸に出張所の設けらるゝや、これが所長を兼務する事となつた。大正十二年製粉事業視察の爲に歐米に巡遊し歸朝後直に取締役に擧げられた。今や氏は同社の常務取締役として經營の樞機に當り鋭意事業の發展に努力せられて居る。氏は資性濃厚にして少壯氣鋭の手腕家を以つて聞えて居る殊に多年全社に始終して全社が斯界の重鎮となり業績亦

### 恩賀太一郎

氏は粉河町、恩賀定一郎氏の三男に生れ、長じて東京高等商業學校に學び明治四十二年全校を卒業するや直に日清製粉株式會社に入社した。入社後は本社館林工場、宇都宮工場等に順次勤務したが大正三年同社が新に名古屋に工場を設置するに當り氏は選ばれて其の創設事務を擔當し全工場の竣工と共にその工場長となつたが更らに、大正七年には名古屋支店長に拔擢され又、同年神戸に出張所の設けらるゝや、これが所長を兼務する事となつた。大正十二年製粉事業視察の爲に歐米に巡遊し歸朝後直に取締役に擧げられた。今や氏は同社の常務取締役として經營の樞機に當り鋭意事業の發展に努力せられて居る。氏は資性濃厚にして少壯氣鋭の手腕家を以つて聞えて居る殊に多年全社に始終して全社が斯界の重鎮となり業績亦

氏の家は木挽町狩野の流れを吸み代々毛利家に抱へられ祖父芳庵氏に到るまで彰管を以て連綿として來つた家柄である。氏の父は慶應義塾を卒へて後紀州に來り耐久中學校に教鞭を執り三十餘年間専念育英に盡瘁した、氏は明治三十年有田郡廣村に生れ大正三年耐久中學校を卒業の後祖先傳來の畫道の復興を志し直ちに東京美術學校日本畫科に入り小堀桐音氏、松岡映丘氏等につきて専ら

### 狩野光雅

大和繪を學び大正八年を以て卒業した。大正十年同志と談つて「新興大和繪會を創立して爾來毎年春季に展覽會を開催して我が大和民族の藝術たる大和繪の新興に日夜研鑽を續けて居る氏の本名は政次郎と稱し光雅は其の雅號。今や東都日本畫壇に於ける青年畫伯中稀に見る氏の麗筆は將來に期待される事極めて多い。

【家庭】夫人延子さん(三三)との間に一男一女あり、氏の母堂は本邦畫壇の雄橋本雅邦氏の女である。

見る可きもの多いのは氏の勞に負ふ所蓋し諒しとせぬ。氏は又讀書を好み多忙なる社務の餘暇には絶えず新智識の吸收に努めて居る。

【家庭】氏は明治四十三年分家して一家を創立したが夫人との間に長男正勝君(大正二年生)以下二男三女ある。

### 鈴木重宣氏

【現住所】 神奈川県茅ヶ崎町

【病院】 東京市芝区三田四國町一四

【出身地】 有田郡石垣村吉原

【出生】 明治十三年六月三日生

氏は明治二十九年小學校卒業後十七歳にして上京し苦學を積み順天中學校を卒業して濟生學舎に醫學を修めて明治三十四年醫師檢定試験に合格したる後、東京帝大醫科青山内科に助手として臨床醫學を研究すること幾年、函館病院に内科部長として招聘せられて在勤すること二年、後獨逸に留學しウヰルツブルヒ大學に學び研究三年にして歸朝し再び東大に研究の傍ら大正十一年京橋區采女町に自宅診療を開始したが震災後現所を買

ひ受けて胃腸病専門として病院を經營するに至つた。氏は大正十一年二月「所謂非特異療法の本體に就て」外數種の論文を提出して醫學博士の學位を授けられた。

【家庭】夫人たま氏(三九)との間に二男四女あり長男重雄君(一九)は第二高等學校に長女澄江さん(二二)は神奈川県立平塚高等女學校に在學中又老母歸氏は八十四歳の高齡にて健在する。

### 奥谷武雄氏

【現住所】 東京市芝区高輪南町四八

【出身地】 伊都郡見好村宇島

【出生】 明治二十四年十二月十一日生

氏は見好村奥谷幾之助氏の長男に生れ明治四十四年粉河中學校卒業して大阪高等工業學校に入り電氣科を修めて大正三年卒業、卒業後直ちに同郷の先輩望月右内氏を慕ひて東京電燈株式會社に入り主として技術方面を擔任、大正六年には早くも電路係長に拔擢された、大正十二年九月一日大震災に直面しては其の舊工事に全力を傾倒して工事を督勵したが其の計畫宣しきを得て、僅に三日目には早くも一部分の点燈を見、十五日には燒

跡地域を除きて全部を、更らに亦十月末日には市全地域に点燈を見るに至り、其の迅速鬼神を驚かせたのは一に氏の應急手段の功と稱すべきである。而して震災後間もなく其の手腕を認められ電路課長に進み、昭和二年東京電燈會社が千葉縣下に於ける群少十數の電燈會社を併合するに及んで氏は抜かれて千葉支社長となり併合後の千葉に標題として赴任するに至つた。氏は今や東電社幹部社員中の手腕家として將來更らに其の活動を期待される。

【家庭】夫人君枝さん(三〇)は同郷の生れ、太郎君(二二)次郎君(九)三郎君(七)の三兒を有す又氏の兩親は今尚郷里に健在する趣味——氏は謠曲、觀世流を好くし素人間稀れに見る大家。

### 寺阪藤楠氏

【現住所】 東京府杉並町馬橋三一二

【出身地】 海草郡黒江町船尾三〇

【出生】 慶應三年六月四日生

氏は幼少にして學を好み、日暮れては木によち上つて殘光を惜むで勉強すると云つた工合であつた。而も家庭はその昔し大

庄屋の家柄ではあつたが經濟的にあまり恵まれて居なかつたが祖母は非常に氏を愛しその將來を期待して居られた。十四五歳頃には本人も周囲の人もその才氣を見込むで將來を實業界の人として望を囑して居つたが明治二十二年上京して爾來勉學の手段として警視廳巡查を拜命したのがキッカケで官吏として身を立てる決心をした。三十一年警部となり三十三年には警察監獄學校を卒業し、三十六年十月時の支那政府の聘に應じて山西省の警務學堂の教官となつて赴任した。四十年歸朝して消防署長となり大正二年高等官消防司令に任命されたが翌三年或一部の陰謀によつて先輩同僚の慰めを斥けてアツサリト辭職した。浪人生活十ヶ月の後氏は田舎落して栃木縣足尾署長となつたが大正七年警視廳警視となつて帝都に乘込む。七年八月六本木署長となり、翌八年東京水上警察署長を拜命するに至つた。爾來八年間、水上生活者のために親身も及ばぬ世話と、行政上幾多の改善に力を盡した結果頼に面目一新全署の事務の改善から組織の完備、水上生活者の生活改善、水上利用者の開發等に盡瘁し在任中の功を以て正六位勳六等に叙せられた。

昭和元年在任八年にして退職するに及んで帝國ホテルで遊

別會を開かれ記念品及び、淨財一萬圓を贈呈せられたるに見てもその在官中の盡力精勤振りは想像出来るであらう。水上署長を辭した氏は昭和三年秋財團法人水上協會を起し官邊と相照應して専心水上關係者の福利増進のために涙ぐましい奮闘を續けられて居る。全協會は會長に内田嘉吉氏を推し氏は理事長として第一線に立ち、一切無報酬奉り持ち出しの有様で活動して居るが氏は今後一生をこの事業に獻ける決心で壯者の元氣をもつて八方に活躍を續けて居る。

【家庭】夫人登美氏(五八)との間に長男正信君(三十四、徳島高工教授藥學士)、二男美夫君(三二、濠洲堀越商會に勤務)、三男英孝君(二六、一高講師理學士)、長女扶美子さん(二〇、女子大在學)あり。趣味——義太夫は十五六歳から始めたものであり又相撲も好きである。

### 竹田甚太郎氏

【現住所】東京府下大井町石五、二一九  
【事務所】東京市京橋區南金六町博品館階上  
【出身地】伊都郡高野口町四三五

氏は高野町に生れ長じて和歌山中學に學び第七高等學校を経て東京帝國大學法科に進み大正三年を以て業を卒へた。氏は大學在學中既に徳川侯爵家の知遇を受け現に侯爵の經營する南葵育英會の前身和歌山學生會に勤務しつゝ、研學を積み大學卒業の翌年には侯爵家より派遣せられて歐米を視察し

### 竹田甚太郎

歸朝後も引續き侯爵家に在つて事務に従事した。大正六年四月辭して山下汽船鑛業會社に入社し社長秘書より鑛業部總務課長同支配人等に歴任し更に同社所屬北海道赤松炭坑副長、室蘭支店長に就任したが大正十一年神戸汽船會社に庶務課長兼重役秘書として就任した。其の後經濟界の反動に善處して會社の整理を斷行した後自らも退社を決し株式會社甲石社の設立に参加して會社創立後は其の事業とする石材採賣の經營に従事した。大正十二年大震災に遭遇して僅に身を以て難を避け大井町に居る定めて生面の轉換を計り或は自ら勞働に従事し或は又雜貨の小賣商を開いて先づ生活の安定を計つた後、大正十四年に至つて別に自ら辯護士を開業して銀座街頭に事務所を設置し爾來著々

隆昌を加へて今日に至る。

【家庭】氏は夫人との間に一男一女を有し家庭極めて圓滿である趣味は狩獵

### 高橋喬一氏

【現住所】東京市日本橋區新村木町  
【出身地】海草郡直川村一七九三  
【出生】明治十三年十一月生

氏は曾て和歌山中學校に學び學中ばにして明治三十年夏を東都に負ひ神田中學校に入り三十二年此校を卒業すると早稻田大學の前身東京專門學校に進み更に東京外國語學校に轉じて佛語を修め三十六年を以て卒業した。後東京帝大佛法科に入つたが在學中日露の開戦に遇ひ通譯として出征し其の功に依つて勳六等に叙せられた。凱旋後大阪に居を定めて三十四銀行に勤務し傍ら關西大學に法律を修めて明治四十三年卒業す。大正二年銀行を退きて東京に出で方向轉換中外商業新報に入社して操縦界に活躍すること五年、後獨力糸業通信糸友社を創設して之れを經營すること、なつたのは大正九年の一月である爾來營々と

### 鳴神亮三氏

【現住所】東京市麻布區新堀町四  
【出身地】和歌山市雜貫屋町十八  
【出生】明治二十四年一月廿六日生

氏は鳴神敬簡氏の三男に生れ幹太郎氏の次弟、長じて和歌山中學校に入り明治四十三年同校を卒業するや慶應理財科に入學したが本科二年の時中央大學に轉じ同校大學部經濟科を卒業し

して其の發展に努め今日の盛況を贏えるに至つたが氏は其の間大正十四年には日本橋區會議員に選ばれて今尙其の職にある。氏は亦社會問題に一雙眼を構へ社會施設等に對して恒に研究を怠らないが昭和元年より借家法案改正の達成其の他を目的として東京互助會なるものを組織し又關東綿花聯合會等には何れも其の顧問として盡瘁されて居る。

【家庭】氏は郷里直川村小西彦一氏の六男に生れ長じて高橋米次郎氏に乞はれて其の養子となつた人、夫人貞氏(四七)はお茶の水女高師の出身夫婦間に長女てつさん(一九)あり府立第三高女を卒業して現に實踐女學校專門科に在學中

たのは大正五年である。卒業後直ちに大阪商船會社に入りて初め海上勤務に従事し、大正九年本店會計課に轉じた、十二年上京中偶々大震災に遭遇し、其の慘狀を目撃して心機一轉、帝都の復興事業に一身を捧ぐるを以て男兒の本懐と爲し社を辭して翌大正十三年一月東京に出て、建築事業に身を投じたのであるが先ず其の第一歩として氏は自ら晝間は實地に就て研究すると共に夜間は之を學理に對照し奮闘勉勵すること二年餘茲に始めて建築請負業の本筋に入った。

### 鳴神 基三

氏は幾多同業者

の間に伍してあくまで堅實なる精神を以て人格と營業の融合を其の主義とし、良材を割安に購入する事には抜群の手腕を發揮して工事の確實と價格の低廉を以つて一般請負業者に對抗し刻苦勉勵地歩の開拓に努めたる爲め開業日尙淺きに拘らず早くも建築工事請負業者として確實な地盤を占むるに至つた。趣味として氏は學生時代より劍道を好み柳剛流を習ひ、和時代、慶應時代には常に選手間の牛耳をとり又餘技としては清元を故千藏師匠に就いてミツチリ稽古を積むだけに素人仲間では評

判高い。  
【家庭】ひで子夫人(三六)はお茶の水高女出身の才媛嚴父敬簡氏は尙覺深として京都に在住す。

### 金谷 倭四郎氏

【現住所】 東京府下谷町馬橋九九  
【出身地】 西牟婁郡田邊町榮町  
【出生】 明治二十二年八月四日生

氏は明治二十二年田邊町に生れ長じて田邊中學校に學ぶ明治三十九年同校を卒業するや第七高等學校に入り四十二年東京帝大經濟學部に進み大正二年を以つて業を卒えた。卒業の後郷里田邊に閉居すること約二十九年再び東京に出て某英國人の經營する會社に勤務したが大正七年二月日本共立火災

### 金谷 倭四郎

保險株式會社の創立事務に參劃することとなり會社設立後は入つて其の支配人に就任し銳意社業の發展に劃策され引きつゞき今日に到る。

【家庭】夫人幸さん(三十二歳)は南部町の生れ。長男治夫君(八)長女洋子さん(六)、次女節子さん(四)の一男二女を有す。

### 辻 清吉氏

【現住所】 東京府下世田ヶ谷町太子堂一二五  
【店舗】 東京市日本橋區千代田橋畔  
【出身地】 有田郡湯淺町  
【出生】 明治二十三年五月十五日生

氏は明治二十三年有田郡湯淺町に生る、明治三十九年志を立て、東京に出て株式仲買店に店員となつて株界の表裏を見習ふこと十有餘年、大正五年茅場町に店舗を構へて獨立仲買店を開業したが時恰も歐洲大戰の餘惠を受けて我株界は騰きかへる好潮時に際會するや一躍巨萬の利益を收めて茲に活動の基礎を造るに至つた。斯

### 辻 清吉

の如くにして幸運のスタートを

切つた氏は堅實を第一義として業務に精勵し資金の餘裕は土地家屋等の不動産に投じて恒に浮動資金の危険を警戒したる結果

大戦後の大恐慌に會して何の影響も蒙るなく反つて利益を獲得するを得た大正十二年の大震災には氏も亦其の罹災者の一人として店舗はもとより猛火に焼き盡されたのであるが彼の被服廠に難を避けたる氏の妻女とみ氏は凄慘を極めた數萬の慘屍體の裡にあつて奇跡的にも一命を全ふしたといふ事である。氏は震災後住宅を世田ヶ谷太子堂に移し又千代橋畔に三層の壯大なる店舗を建造して陣容を新たに益々業務に専念して居るが氏の堅實本位の方針は以て近來引續く株界の不況に處して自若くとして經營しつゝ、あるは銅街稀れに見る所である。  
【家庭】夫人とみさん(三八)との間に長男清弘君(一)長女輝子さん(一〇)二男清明君(三)二女明子さん(五)の二男二女を有す趣味としては書畫、刀劍を愛し亦盆栽を樂む。

### 大木 貞次郎氏

【現住所】 東京府下品川町南品川八六三  
【出身地】 和歌山市宇須一番地  
【出生】 明治十一年十二月十八日生

氏は明治十一年海草郡雜賀村(現今の和歌山市)宇須小林權藏



氏の次男に生る。嘗て和歌山中學校に學び卒業後、東京に負ひて慶應義塾に入り理財科に在學中、明治三十四年大木長次郎氏の養子となつたが其の翌年、至つて養父の長逝に遭ひ理財科二年にして退學して家を繼ぎ其の業とする川長運送店を經營することとなつた。爾來拮据經營其の衝に當ること二十有餘年、大正十年には店舗を株式組織に改めて川長運送株式會社と號し自ら其の社長に就任して引續き經營今日に至つたが氏は運送業を以て商業の補助機關として最も重要な業務であると共に託送貨物に對する責任も亦大なるが爲め、之れが當

## 大木長次郎

業者は自己の信用を保持する爲めには資本の充實を期し一面に於ては多量の取扱に依つて運賃手数料等の低減を期することを理想として居るが昭和元年偶々鐵道省が一驛一店主義を決するや氏は欣然として之れに賛成し運送の合同に努力して其の實現を期し自ら汐留運送株式會社相談役を始め品川運送株式會社取締役、川崎合同運送株式會社取締役、蒲田合同運送株式會社取締役社長等に就任して益々理想の達成に努力して居る氏は

又種羊牧場事業を以て羊毛の輸入防止を圖り我國毛織物原料の自給自足の實現を圖るべく緊切なるものとし政府の種羊奨励策に和して現に北海道十勝に於て未耕地の開墾と併せ牧場の經營をなし大に種羊の繁殖に努力してゐる。

【家庭】夫人との間に三男五女あり。長男長藏君は法政大學本科に次男武次君は府立一中に又長女富美子さんは府立第三高女卒業後、東京帝大理學部助教伊藤貞一氏に嫁し次女嘉代さんは香蘭女學校を卒業、三女多喜さんは日の出高女を卒業し共に(神田)女子青年會に語學を修業中四女佐代さんは今、日の出高女に通學中何れも秀才揃ひにて稀らしき子福者である。

## 谷山謙雄氏

【現住所】 東京市芝區田村町六  
【出身地】 海草郡紀伊村宇四弘  
【出生】 明治七年十一月七日生  
氏は明治二十八年和歌山中學校を卒業するや東京に遊學して中央大學の前身東京法學院に學び三十五年を以て卒業す、其の

在學中、明治三十二年農務省に入り特許局に屬として奉職したが三十九年四月特許審査官に進み大正三年職を辭して現所に辯理士を開業し現に特許事務を取扱つて居る。  
【家庭】夫人みつ枝氏(五〇)は元和歌山市助役志賀楠之助氏の女夫婦間に二男二女を有す。

## 河北眞太郎氏

【現住所】 東京市外大久保百人町四九  
【出身地】 和歌山市宇治  
【出生】 明治二十一年生

氏は大正五年の東京帝國大學醫學部出身、在學中はボートの選手としてその名を轟はれた。現在帝都の刀圭界に於て、深遠なる學識と、練達の技術とをもつて盛名を博して居る。ともすれば倦怠と慢心に流れ易い市井開業醫師間に在つて、氏の如きは眞に醫道の爲めに精進を怠らず、熱心と徹底的な親切とをもつて精勵されて居るため一度び氏の診察を受けたものは離る可からざる信頼の念を固くする。而もそれは氏が故意に努める結果と云はんよりは寧ろ天稟の素質とも見る可く、それだけ患

者にとつて限りなき信頼を強める譯であらふ今や本院の外に中央線阿佐ヶ谷に分院を設け新宿以西に於ける宏壯な病院と云はれて居る。  
【家庭】夫人靜氏は我國兵器界の權威陸軍中將南部麒次郎氏の長女で賢夫人の譽高い、夫婦間に一男一女あり。趣味は——スボ

## 御前綱一氏

【現住所】 東京市本郷區駒込林町一五三  
【出身地】 有田郡保田村辻堂  
【出生】 明治二十一年二月六日生

氏は有田郡保田村御前利平次氏の長男に生れ會て和歌山中學校に學び卒業の後、東京に負ひ一ツ橋高商に入り明治四十三年を以て卒業す。卒業後直ちに神戸市株式會社兼松商店に入社したが後濠洲並に米國等に於ける同店の海外支店に歷任すること前後七ヶ年大正十四年には同店取締役選任せられ大正十五年以來東京支店長を兼ねて居る。氏は商略縱橫經營の桐機に參與して社運の發展に努めて居るが自ら社業の第一線に立つて多

數の社員を指揮して非凡の才腕を揮ひ現代稀れに見る手腕家であると言はれて居る。

【家庭】夫人富枝さんは西牟婁郡日置町の生れ、淑徳の譽れ高い

### 山本敏一氏

【現住所】 東京市麻布區我善坊町四一

【出身地】 伊都郡學文路村南馬場

【出生】 明治十五年八月廿八日生

氏は明治三十五年の師範學校出身、大正二年に至るまで伊都郡九度山、妙寺、學文路第二小學校等に奉職されたが偶々現在の南癸育英會が和歌山學生會及び伏虎會の合併によつて組織せらるゝに當つて聘かれて主事となり現在に及んで居る。直接教育界の人として教鞭を執つて居つた氏が現在の地位に於て廣く有英の社會的方面の仕事に携はることになつたのは寔に適材適所の感が深い。

氏は單り我縣といはず廣く現代社會に稀らしい程圓滿な常識を備へた人、徹底的な親切家、而かもこの年配で向上の精進を續けつゝあるは蓋し他に多く見ない。譽りを持つ人々には眞髓を

窺ひ得ないことがあるかも知れないが、本筋に大體徹底されて居る点は實に敬服の外はない。育英會當面の仕事を一手に託して宰領を頼み得るものはこの人を措いて他に容易に需め得られないであらう。

【家庭】夫人あや子さん(四二)との間に長女靜代さん(廣島縣人世羅氏に嫁す)次女三千代さん(縣人文部技師瀧野頼太郎氏に嫁す)三女不二代さん(一七)長男敏郎君(一四)三男登君(一〇)の二男三女あり。趣味——多方面に亘る。

### 笠松爲吉氏

【現住所】 東京府下荏原郡碑文谷一五七三

事務所 神田區霞治町一九京濱セル内

【出身地】 西牟婁郡田邊町片町

【出生】 明治二十三年七月生

氏は田邊町笠松富吉氏の長男に生れ小學校卒業の後神戸市に出で兵庫縣立工業學校に建築科を修めたが明治四十三年更らに東京高等工業學校に進み大正三年卒業す。後直ちに三菱合資會社地所部に勤務すること、なつたが當時恰も我國に於ける鐵骨

及鐵筋コンクリート建築工事が始めて三菱の手に依つて試みら

### 笠松爲吉

れるに及んで氏は主として此の種建築物の設計

施行等に就て研究を積み同社に勤務すること前後十年にして大正十二年同郷人田中護氏の經營する株式會社松村組に聘されて技術主任となつたが昭和二年辭して獨立土木建築設計請負業を開始して爾來漸次其の地盤を開拓して現在に至つた。最近氏の設計になつた工事としては熱海坪内造道博士別邸を始め日本橋藥研堀生田商店等である。

【家庭】夫人澄子さん(三二)は海草郡濱中村の生れ長女三保子さん(八)長男達弘君(四)の二子あり兩親は郷里田邊町に在住する

### 土井眞三次氏

【現住所】 東京市外入新井町新井宿一八八九

【出身地】 有田郡湯淺町字湯淺

【出生】 明治二十六年七月廿二日生

氏は明治四十二年耐久中學校を卒業して第三高等學校に入り

### 奥峪恂太郎氏

【現住所】 東京市深川區西水町二番地

【出身地】 東牟婁郡新宮町七六五

【出生】 明治廿七年五月六日生

氏は大正四年縣立新宮中學校を卒業後早稻田大學に入學大正九年同校卒業、後直に川北電機會社に入社して東京本社に勤務

### 土井眞三次

年電氣事業及電氣工事視察の爲め歐米各地に派

遣された。同社の北海道美唄火力發電所及び九州築豊中央發電所は其の設計をはじめ建設工事は共に氏の擔當せるもの同社職業所に於ける發電所中の白眉である。

【家庭】夫人マッコさん(二八)長男星君(七)二男悦君(六)あり。

中關東大震災に遭遇し新生面を開拓する好時機と確信して社を  
辭した而して帝都復興に最も必要な材木に着眼し郷里の材木  
界の爲め販路の擴張に努力せんと決意し紀州材専門の間屋業を  
開始した當時郷里よりは二十數名の同業者が東京に出陣せしも  
大部分は失敗に終つたが其の裡にあつて氏は一人踏み止まつて  
深川木場に於て其の基礎を築き上げ新しき智識を以て今や活躍  
を試みんとして奮闘して居る。氏は中學大學時代剣道の選手と  
して活躍し剣道五段で武徳會よりも達人の許状である精練証を  
交附されており御前試合の光榮にも浴して居る。

【家庭】夫人みさ子(三〇)さんは東京の津田英學塾出身で夫婦揃  
つて基督教信者。氏は目下東京市ヶ谷教會の長老として精神界  
に働いて居るが剣道五段のクリスチャンといふのも面白い對照  
である夫婦間一男一女でクリスチャン、ホームを造つて居る。

### 稲葉 淺吉氏

【現住所】 東京市外蒲田町北蒲田八七四  
【出身地】 日高郡志賀村字下志賀  
【出生】 明治二十三年十一月廿九日生

### 稲葉 恆吉

手腕として社内  
に推稱されて居  
る後副參事に拔

氏は郷里の小學校を卒業の後京都に出で清和中學校に入り明  
治四十三年學を卒へると更らに東京に遊學して青山學院高等科  
に學び大正五年卒業す。卒業後富士製紙會社に入社して東京本  
社に勤務し、主として製品販賣部に隸屬して敏腕を揮ひ一面操  
業の統一を提唱して製産能率の増大を圖る事に努力した之れが  
爲め大正七八年たまく、我國製紙業界稀有の品沸底に遭遇した  
る時獨り同社をして其の供給の圓滑を得せしめたる如きは氏の  
手腕として社内  
に推稱されて居  
る後副參事に拔

### 榊原 龍之輔氏

【現住所】 横濱市神奈川區青木町上台八七  
【出身地】 有田郡田橋川村字吉川  
【出生】 明治二十四年一月十五日生

氏は生駒憲兵衛氏の二男にして大正五年榊原家に入つて其の  
姓を襲ふ、明治四十三年耐久中學校を卒業の後熊本藥學專門學  
校に入學し、大正三年卒業。直に大阪今宮化學研究所に入り有  
機化學を研究し後東京に出で江東製藥株式會社に入社した。  
當時歐洲戰亂の事とて藥品の缺乏甚だしく専ら製藥事業に關係  
したが在勤約一ヶ年餘にして平民病院に入り横濱分院藥局に勤  
務した、其間經營事務にたづさわらる事六ヶ年、たまく、關東大  
震災に遭ふて東京なる平民病院本院に轉じ、爾來事務藥局を兼  
務することとなり、社會事業たる平民病院に勤務する事十有四年  
年終始一貫として今日に至つた、氏は性温厚院長の信任極めて  
厚く今や同院事務長として院長の懐刀となつて經營の樞機に參  
劃して居る。

【家庭】夫人花子さん(三七)は静岡縣の生れ夫婦間に長男春三君  
(一三)次男秋策君(一〇)の二子ある。

### 植野 勳氏

【現住所】 朝鮮京城府貞洞一番地  
【出身地】 東京郡那智村大字天滿  
【出生】 明治二十三年一月二十五日生

氏は明治四十一年縣立新宮中學校の出身、第一高等學校を經  
て東京帝國大學法科獨法科に入り大正四年四月卒業。大學在學  
中大正三年文官高等試驗に合格したが大學を卒業すると直ちに  
大藏省に入り六年一月米國に出張財務書記として経育駐劄財務  
官事務所勤務すること二ヶ年、大正七年十二月歸朝後大藏省  
臨時調查局事務官に任ぜられたが其の後大藏事務官兼大藏書記  
官として大藏省理財局國庫課に勤務し、九年十二月造幣局書記  
官(總務部長)に  
任ぜられ、十四  
年には大藏書記  
官として大藏省預金部監理課長に後更らに同部運用課長に任ぜ  
られたが昭和四年二月朝鮮殖産銀行理事を拜命し又全年六月初  
鮮貯蓄銀行事務取締役を兼ねることとなつた。氏は自ら「正直」  
を以て始略し他人に對しては「惡人成佛」の信仰を以て一貫せん

### 植野 勳

ことを理想とし「仕事はれ生命」をモットーとして専心職務に奮闘して居るが頭腦明晰にして前途多望の士として其の將來を期待されて居る。

【家庭】夫人すみ子さん(三六)との間に長男實君(一四)を初めとして二男三女あり實君は現に東京府立第一中學校に在學中

### 谷 延 二 氏

【現住所】朝鮮海州南本町通

【出身地】西平郡田邊町中屋敷

【出生】明治二十四年生

海州自抜の本町通りに大店舗を構へ現代西朝鮮の自動車界に號令する谷延二氏は明治二十四年紀州熊野栗栖川村に生る、田邊小學、京都中學、慶應理財科を経て、大正三年叔父關係により京城直輸入商織居本店自動車部に入り天安支店主任、大正八年長崎縣諫早に谷農場及機械、自動車用品輸入商創設經營(三年前休止)大正二年織居自動車商會を譲受けて自己の有とし西

朝鮮織居自動車商會の商號を以て經營中、其營業左の如し、定期郵便通信自動車、定期乗合自動車營業、自動車及タイヤ部分品販賣、日本自動車會社、ダンロップゴム會社、テキサス油會社、明治火災保險、ライジングサン石油會社各代理店、就中乗合自動車部は其廣袤四國に匹敵する黃海道内の主要幹線の大半を掌握し直營線路十二ヶ線、營業哩數二百二十三哩、其他各地の直營又は關係自動車營業線路十六線、其哩數二百哩、車輛八十餘輛、個人營業者としては全鮮の首位にして其の堅實なる特色ある合理的經營法は業界の範とする従業員百五十名は氏を中心として恰も一族の如く、平和に満ち不拔の基礎と内外の信用を博してゐる。現在關係せる主なるものとしては、西朝鮮織居自動車商會主、京畿自動車會社々長、海南自動車組合代表者仁川自動車商會理事、南海貨物自動車組合長、南川陸運社々主、黃海道自動車協會々長、全朝鮮自動車協會評議員、等

【家庭】には七十六歳の老父を中心に妻女並に五女あり一家を擧げてキリスト教、趣味——家庭的にして、旅行、刀劍を愛す。

### 附 錄

東京地方及び  
大阪、京都、神戸  
在住紀州人  
拔萃

大阪在住者

住吉區平野新町二丁目(現住所)  
大日本紡績株式會社用度課長 井上日吉氏

大阪府豐能郡箕面村櫻井(現住所)  
合名會社商業興信所理事 兼神戸支所主任 板原兵三郎氏

和歌山縣海草郡和佐村(出身地)  
大阪府地方警視 島之内警察署長 岩橋靜氏

天王寺區小宮町四〇(現住所)  
寶文館社員 石川弘氏

海草郡西和佐村栗栖(出身地)  
住吉區天王寺町明治通府官舎(現住所)  
大阪府立天王寺中學校長 岩橋繁雄氏

海草郡黑江町(出身地)  
東區本町三丁目(現住所)  
洋反物問屋 伊藤岩次郎氏

和歌山市久保町一丁目(出身地)  
北區金屋町一丁目一四(現住所)  
田中汽船鑛業株式會社々員 岩橋保次郎氏

西牟婁郡田邊町上屋敷(出身地)  
西成區粉濱町五五三(現住所)  
大阪朝日新聞記者 井上嘉一郎氏

那賀郡小倉村上三毛(出身地)  
港區市岡元町五丁目八(現住所)  
株式會社佐伯組社員 井口武夫氏

西牟婁郡稻荷村(出身地)  
南區內安堂寺町三丁目(現住所)  
金庫製作業 井上友吉氏

日高郡南郡町(出身地)  
北區堂島濱通一丁目七〇(現住所)  
齒科醫師 飯塚淳一郎氏

大阪市北區堂島濱通一丁目(事務所)  
浦山セロイト株式會社取締役  
株式會社堂島ビルヂング監査役 林龍太郎氏

西牟婁郡田邊町福路町(出身地)  
堺市外船松村一六七(現住所)  
労働教育社 橋本隆太氏

伊都郡高野口町大野(出身地)  
東區道修町一丁目八(現住所)  
藤本醫療器部 塙坂英一氏 毛織物毛糸商  
和歌山市(出身地)  
東區安土町四丁目五二(現住所)  
戸村竹次郎氏  
和歌山市新堀南ノ丁(出身地)  
武庫郡御影町郡家(現住所)  
邊見嘉一郎氏  
伊都郡九度山町(出身地)  
東區久太郎町二丁目(現住所)  
橋本淳氏 鴻池信託常務取締役  
西牟婁郡田邊町(出身地)  
住吉區天王寺町二六四(現住所)  
德堂耕太郎氏  
東牟婁郡(出身地)  
東區高麗橋詰町(現住所)  
西區北堀江板榮橋北詰(現住所)  
有田郡湯淺町(出身地)  
西區北堀江板榮橋北詰(現住所)  
榑野藤太郎氏  
西牟婁郡安樂川村(出身地)  
西區京町堀上通二丁目(現住所)  
西本公之助氏 大日本肥料會社員  
有田郡廣村(出身地)  
天王寺區國分町二二(現住所)  
堂三四郎氏  
西牟婁郡三柄村(出身地)  
東區內安堂寺町二丁目三八(現住所)  
辰馬海上火災保險會社員  
浪速區難波元町五丁目(現住所)  
土岐美夫氏  
和歌山市(出身地)  
府下中河內郡布施町東足代(現住所)  
富藤雄氏  
日浦炭礦株式會社事務取締役 時正美氏 大阪府立天王寺中學校教諭

那賀郡龍門村杉原(出身地)  
兵庫縣武庫郡六甲村八幡(現住所)  
蓬台耕四郎氏 精米業  
海草郡貴志村(出身地)  
西區南堀江下通二丁目(現住所)  
小川純市氏  
西牟婁郡朝來村(出身地)  
浪速區西濱南通三丁目(現住所)  
沼田嘉一郎氏 運送業  
西牟婁郡田邊町(出身地)  
此花區川岸町六(現住所)  
和田龍七氏  
西牟婁郡久寶寺町二丁目(現住所)  
東區南久寶寺町二丁目(現住所)  
川島慶次郎氏  
和歌山市(出身地)  
港區鶴町三丁目三三六(現住所)  
岡本尙一氏  
西區北堀江上通三丁目(現住所)  
川口皓石氏  
和歌山市(出身地)  
南區諏訪町(現住所)  
金井金市氏  
那賀郡長田村別所(出身地)  
住吉區南田邊町二六一(現住所)  
奧實之助氏  
那賀郡田中村(出身地)  
東成區今市町九五五(現住所)  
神崎包吉氏  
伊都郡高野口町(出身地)  
北區真砂町三五(現住所)  
奧田福敏氏 壽生命保險會社員  
和歌山市(出身地)  
天王寺區鳥ヶ辻町五一(現住所)  
川北惟孝氏  
桃谷順天館店員 生地龜三郎氏 市村法律事務所內

有田郡湯淺町(出身者) 東成區鶴橋木野町一六二(現住所)  
 東成區書記 梶本 繁松氏 辯護士 田島 義夫氏  
 有田郡湯淺町(出身地) 中河内郡八尾町庄ノ内七(現住所)  
 株式會社杉村倉庫社員 梶谷 秀太郎氏 ボールドウィン會社代理店 竹中 友次郎氏  
 海草郡大崎村(出身地) 西區京町堀通二丁目(現住所)  
 運動具商 梶本 德太郎氏 株式會社鴻池運送 大阪支店勤務 有田郡池田町(出身地)  
 豐能郡池田町(現住所) 武内 基次氏  
 日高郡御坊町(出身地) 西區西長堀南通二丁目(現住所)  
 木材商 川本 國藏氏 齒科醫師 那賀郡上神野村(出身地)  
 住吉區帝塚山學院通(現住所) 田中 勇三氏  
 日高郡上南郡村(出身地) 東區上本町一丁目二八(現住所)  
 大阪礦業館主 吉本 干城氏 印刷業 那賀郡上岩出村(出身地)  
 港區市岡市場通二丁目七(現住所) 谷澤 定八氏  
 海草郡黑江町(出身地) 東淀川區北長柄町(現住所)  
 和歌山市三木町南ノ丁(出身地) 東區八丁目中寺町(現住所)  
 帽子材料製造業 吉川 竹三郎氏 計理士 橘 道太郎氏  
 西牟婁郡江住町(出身地) 西宮市香櫛園池ノ地(現住所) 和歌山市港通町北四丁目(出身地)  
 東區南本町一丁目(現住所) 田島 淳太郎氏 竹村商店勤務 高塚 三代太郎氏

日高郡阿波座下通二丁目(現住所) 西牟婁郡周參見町(出身地)  
 東區唐物町一丁目(現住所) 紙箱製造業 爲井 道二氏 綿布商 田所 信一氏  
 浪速區南飯町(現住所) 那賀郡東野上町(出身地) 日高郡上南郡村(出身地)  
 東區南本町二丁目(現住所) 醫師 谷本 道氏 絹綿布卸商 田中 幸助氏  
 海草郡難賀村(出身地) 東區橫堀五丁目(現住所) 北區會樺崎中二丁目(現住所)  
 綿布商 玉置 龍太郎氏 綿糸及有價証券仲立業 谷利 仲藏氏  
 伊都郡橋本町(出身地) 東區南本町四丁目(現住所) 西牟婁郡和深村(出身地)  
 西區幸町通四丁目 高松 福三郎氏 木材商 高尾 嘉雄氏  
 那賀郡小倉村(出身地) 南區千代町一七(現住所) 西牟婁郡東富田村(出身地)  
 天王寺區勝山通三丁目六(現住所) 吳服商 玉置 嘉一氏 天滿織物株式會社支配人 竹中 倉之助氏  
 伊都郡戀野村(出身地) 港區八雲町四丁目二(現住所) 西牟婁郡田邊町(出身地)  
 天王寺區東高津南ノ丁(現住所) 田中 富士雄氏 紙器製作業 竹中 熊太郎氏  
 伊都郡笠田町(出身地) 北區浪花町三(現住所) 有田郡湯淺町(出身地)  
 西區江戶堀北通二丁目(現住所) 大阪毎日新聞記者 田村 省三氏 洋紙商 田中 徳次郎氏

和歌山市(出身地) 伊都郡妙寺町(出身地) 豐能郡豐中町(出身地) 中谷 茂氏  
 東區北渡邊町四四(現住所) 伊都郡高野村湯川(出身地) 天王寺區六万(出身地) 中谷 林 長 藏氏  
 曾根 德次郎氏 檢事(大阪區裁判所) 天王寺區六万(出身地) 天王寺區六万(現住所) 中川 正三氏  
 吳服 卸商 那賀郡小倉村(出身地) 南區南船屋町二二(現住所) 伊都郡高野村湯川(出身地) 天王寺區六万(現住所) 中川 義賢氏  
 吳服 商 辻本 房之助氏 建築設計業 和歌山市丸之内五番丁(出身地) 住吉區天王寺町二四九(現住所) 村井 義賢氏  
 西牟婁郡岩田村(出身地) 西區阿波座下通二丁目 大平生命保險會社 大阪支店勤務 和歌山市雜賀屋町東ノ丁(出身地) 天王寺區烏ヶ辻町二(現住所) 村井 義賢氏  
 貝 卸 商 中島 源七氏 大阪支店勤務 西牟婁郡日置町(出身地) 天王寺區勝山通一丁目(現住所) 日高郡南部町(出身地) 東區東雲町二丁目一七四(現住所) 宇 戶 憲 男氏  
 中央タクシー會社員 中本 日吉氏 大阪市電運輸部勤務 兵庫縣武庫郡御影町岩屋(現住所) 和歌山市新留町三八(出身地) 南區安堂寺橋通二丁目(現住所) 浦 田 金 三氏  
 中央電氣會社取締役 中戸 安次郎氏 洋服商 東區東雲町二丁目一七四(現住所) 和歌山市新留町三八(出身地) 南區安堂寺橋通二丁目(現住所) 浦 田 金 三氏  
 東工業株式會社常務取締役 中谷 熊之助氏 金物卸商 西ノ宮市安井町(現住所) 日高郡日比崎村(出身地) 上西 清次郎氏  
 株式會社大洋軒取締役 長尾 智正氏 内外綿株式會社西宮工場長 西成區南吉田町(現住所) 西成區粉濱町六三五(現住所) 楠見 庄三郎氏

有田郡烏屋城村(出身地) 西淀川區大仁新道(現住所) 和歌山市雜賀町(出身地) 西成區粉濱町六三五(現住所) 楠見 庄三郎氏  
 空箱 商 上田 安吉氏 株式會社中松組勤務 西牟婁郡田邊町(出身地) 西區新町通三丁目五三(現住所) 栗山 彦七氏  
 大正製材株式會社取締役 和歌山市(出身地) 東區南渡邊町四二(現住所) 西牟婁郡上若養村(出身地) 南區鹽町通四丁目五〇(現住所) 栗山 善兵衛氏  
 和歌山市(出身地) 東區南渡邊町四二(現住所) 西牟婁郡上若養村(出身地) 南區鹽町通四丁目五〇(現住所) 栗山 善兵衛氏  
 肩掛 卸 商 野口 金四郎氏 栗山商事株式會社取締役 天王寺區烏ヶ辻町(現住所) 栗山 寬一氏  
 大阪市西成區長 野々田 爲吉氏 大江ビルヂング社長 武庫郡住吉村反亭林(現住所) 楠本 吉次郎氏  
 川北電氣會社勤務 野々田 三祐氏 日本綿花株式會社取締役 有田郡湯淺町(出身地) 此花區上福島(出身地) 久保 不二太郎氏  
 洋反物卸商 野呂 克藏氏 久保婦人科醫院 伊都郡大谷村(出身地) 南區笠屋町三三(現住所) 山本 福太郎氏  
 土木技術者 楠本 武藏氏 亞細亞商會大阪支店勤務 伊都郡大谷村(出身地) 南區笠屋町三三(現住所) 山本 福太郎氏



泉北郡濱寺町船尾(現住所) 西牟婁郡上芳養村(出身地)  
 醫學博士 簀添 宗雄氏 醫師 東成區中道町三四七(現住所)  
 山羽 有信氏  
 西宮市安井町(現住所)  
 印刷業 山本源之助氏 三十四銀行難喉場支店長 山田 幹氏  
 和歌山 市(出身地) 伊都郡學文路村(出身地)  
 西成區玉出本通一丁目(現住所) 天王寺區上本町七丁目(現住所)  
 日本ノート用品會社取締役 山本 顯氏 株式會社 松永 定一氏  
 東牟婁郡田原村(出身地) 南區南炭屋町四六(現住所) 和歌山 市東鍛冶屋町(出身地)  
 西成區玉出本通二丁目三九(現住所)  
 建築業 簀本 久三郎氏 洋服商 東成區南島町一八五(現住所)  
 那賀郡東野上村(出身地) 東區南久太郎町二丁目(現住所) 大阪電報通信社員 前西 兵輔氏  
 海草郡日方町(出身地) 東區小橋東ノ町(現住所) 那賀郡小倉村(出身地)  
 港區八幡屋町八一(現住所)  
 海草郡日方町(出身地) 府下濱寺町(現住所) 住友電線製造所社員 那賀郡粉河町(出身地)  
 豐能郡岡町表通(現住所)  
 柳 彌五郎氏 木材信託業 前川 和右衛門氏  
 柳 廣藏氏 增田 照氏

東牟婁郡下里町(出身地) 西區川口町二(現住所) 和歌山 市(出身地)  
 西成區西今船町一〇八(現住所)  
 建築材料科商 松本 標四郎氏 エンバイヤーランドリー 前田 悖郎氏  
 武庫郡本庄村青木(現住所) 和歌山 市茶屋ノ丁(出身地)  
 福太商會主 前田 太郎兵衛氏 株式會社富島組本店員 增田 潔男氏  
 西牟婁郡田邊町(出身地) 東區橫堀五丁目(現住所) 伊都郡橋本町(出身地)  
 西淀川區佃町一九二(現住所)  
 洋傘肩掛卸商 正木 楠藏氏 大阪ヤトナ會 伊都郡高野口町大野(出身地)  
 東區北久太郎町一丁目(現住所)  
 西牟婁郡日置町(出身地) 港區夕風町三丁目(現住所) 伊都郡高野口町大野(出身地)  
 東區北久太郎町一丁目(現住所)  
 海草郡山口村谷(出身地) 尼ヶ崎市宮町五七(現住所) 和歌山 市小人町(出身地)  
 東區東雲町二丁目(現住所)  
 臺灣產青果神販荷受組合書記 前田 一三氏 難波神社神職 武津 八千穂氏  
 伊都郡見好村島(出身地) 住吉區天王寺町一五三四(現住所) 和歌山 市西ノ店(出身地)  
 北區堂島船大工町(現住所)  
 株式會社杉村倉庫本店員 松村 憲治氏 織物商 福永 良造氏  
 那賀郡安樂川村(出身地) 住吉區住吉町三八(現住所) 海草郡日方町(出身地)  
 天王寺區上本町十丁目(現住所)  
 大阪地方專賣局勤務 松下 丈夫氏 藤本 清兵衛氏

日高郡南部町(出身地)  
豊能郡箕面村橋立(現住所)

大阪府巡查(島ノ内署勤務)

藤川

利平氏

小兒科醫師

小林

信義氏

西牟婁郡三柄村(出身地)  
東區内淡路町一丁目(現住所)

紙器商

藤島

範七氏

電器機具商

小林

源治氏

那賀郡河原村(出身地)

大阪朝日新聞記者

藤田

進一郎氏

株式會社島商店取締役

小島

省三氏

西牟婁郡結川村(出身地)  
西區幸町通二丁目(現住所)

木材商

藤田

健吉氏

日本電力株式會社員

前島

詳三氏

和歌山市小人町南之町(出身地)  
住吉區住吉町松山六五六(現住所)

三十四銀行員

後藤

武氏

大阪株式取引所取引員

江川

藤楠氏

和歌山市植松町(出身地)  
住吉區天王寺町二二二(現住所)

日本電力株式會社員

小村

捨楠氏

家屋管理業

榎本

保次郎氏

和歌山市東長町中ノ丁(出身地)  
此花區上福島一丁目四〇三(現住所)

メリヤス製造業

權田

清氏

大阪堂島米穀取引所員

江馬

銳三郎氏

有田郡鳥屋城村小川(出身地)

和歌山市久保町三丁目(出身地)  
港區三軒家市場通二丁目六〇(現住所)

那賀郡東野上村(出身地)  
東區北濱三丁目一六(現住所)

那賀郡小倉村下三毛(出身地)  
住吉區天王寺町二二三〇(現住所)

大阪電氣分銅株式會社員

出口

正男氏

對米貿易商

東英

二氏

伊都郡九度山町(出身地)  
住吉區阿倍野町六〇(現住所)

住友生命保險岸和田駐在員

出水

芳夫氏

大倉商事大阪支店次長

青井

清一郎氏

西牟婁郡田邊町(出身地)  
東區木野町二三(現住所)

雜貨商

出口

幸七氏

神戸海上運送火災保險  
大阪支店員

秋田

正雄氏

西牟婁郡田邊町(出身地)  
天王寺區石ヶ辻町(現住所)

大阪市芦池尋常小學校長

朝山

守氏

東洋紡績三軒家工場長

山東

友三郎氏

那賀郡岩出町(出身地)  
天王寺區北日東町五二(現住所)

質商

熱田

昇三氏

株券公債金融業

山東

顯義氏

那賀郡岩出町清水(出身地)  
天王寺區筆ヶ崎町一七(現住所)

會社員

芦田

正雄氏

各國蓄音器商

山東

靖雄氏

和歌山市廣瀬中ノ丁(出身地)  
東成區今市町九一六(現住所)

青木

昇氏

石炭商

澤野

爲之助氏

伊都郡橋本町(出身地)  
浪速區數津町二丁目(現住所)

和歌山市元金屋町(出身地)  
西區新町通二丁目(現住所)

和歌山市雜賀屋町(出身地)  
南區長堀橋筋二丁目(現住所)

大阪市港區泉尾上通二丁目(現住所)

有田郡湯淺町(出身地)

西牟婁郡日置村(出身地)  
豐能郡池田町室町九番丁(現住所)

那賀郡麻生津村(出身地)  
西區新町通四丁目(現住所)

西牟婁郡田邊町(出身地) 堺市大瀨公園四丁目(現住所) 伊都郡紀見村(出身地) 南區長堀橋筋二丁目(現住所) 北村純一郎氏

橫河橋製作用員 坂野雄三氏 眼科醫師

亞鉛精練業 西牟婁郡田邊町(出身地) 西區幸町通二丁目五八(現住所) 澤村義之助氏 大阪府警察部建築課員 海草郡貴志村向(出身地) 住吉區村上町(現住所) 貴志重雄氏

東牟婁郡字久井村高津氣(出身地) 北區東野田七丁目二四(現住所) 阪口鶴二氏 時計商 日高郡名田村上野(出身地) 東成區鴨野町六九二(現住所) 木村重藏氏

建築工務所 和歌山縣海草郡(出身地) 堺市翁橋町一〇八六(現住所) 阪本恭雄氏 内外物産合名會社代表者 大阪商工會議所議員 西牟婁郡田邊町(出身地) 東區高麗橋筋(現住所) 湯川忠三郎氏

雜誌「紀州人」社 那賀郡粉河町(出身地) 府下濱寺町諏訪ノ森(現住所) 北野每太郎氏 辯護士 海草郡龜川村(出身地) 南區日本橋筋五丁目(現住所) 湯川昇氏

米穀商 那賀郡下神野村(出身地) 西淀川區大和田町一五三九(現住所) 喜多野常太郎氏 住友本店經理部社員 和歌山縣(出身地) 西區南堀江五丁目(現住所) 南方熊次郎氏

木材商 海草郡大野村(出身地) 天王寺區蓮阪下ノ町(現住所) 木下庄太郎氏 大阪市會議員

大阪製菓時報社主

和歌山市久保町四丁目(出身地) 浪速區惠美須町二丁目(現住所) 東牟婁郡三津ノ村能城山本(出身地) 泉南郡屋崎町(現住所) 下阪重福氏

各國樂器商 宮脇吉太郎氏 内海紡績尾崎分工場建築課

平野屋合資會社員 西牟婁郡市ノ瀬村(出身地) 住吉區北島住宅五十二號(現住所) 三 栖 敏氏 醫師 和歌山縣(出身地) 西區北堀江御池通五丁目(現住所) 島崎義明氏

木綿問屋 西牟婁郡南富田村(出身地) 南區北久太郎町三丁目(現住所) 光安恒助氏 大阪府立生野高等女學校教諭 實寶達次郎氏

松村組社員 西牟婁郡周參見町(出身地) 住吉區天王寺町九四〇(現住所) 南 三 郎氏 合資會社日本鋼構製作所代表社員 住吉區天王寺町天王寺(現住所) 茂野三善氏

紙箱製造業 有田郡湯淺町(出身地) 西區阿波堀通三丁目(現住所) 宮井佐兵衛氏 株式會社杉村倉庫本店員 和歌山縣(出身地) 東成區林寺町五三(現住所) 平塚昇太郎氏

醫 有田郡鳥屋城村小川(出身地) 西區北堀江通三丁目 三 田 常一氏 刀劍及物商 和歌山縣(出身地) 南區心齋橋南詰(現住所) 平池豐氏

宇佐見商店員 那賀郡粉河町(出身地) 住吉區阿倍野町一〇九(現住所) 清水 惠氏 製菓業洋風堂 西牟婁郡中芳養村(出身地) 天王寺區上本町七丁目(現住所) 平尾初吉氏

西牟婁郡三柄村(出身地)  
東區清堀町三丁目(現住所)  
丸釘織線商 平本武八氏 辯護士 鈴木眞一郎氏

西牟婁郡日置町(出身地)  
天王寺真法院町(現住所)  
中央タクシー會社 廣本嘉平次氏 シーホルスタイン會社店員 鈴木源作氏

有田郡藤並村(出身地)  
西成區玉出本通三丁目(現住所)  
化粧品卸商 平山峰雄氏 株式賣買 砂山盛三氏

日高郡矢田村(出身地)  
住吉區天王寺町五八三(現住所)  
大阪土地商會社長 門奈貞治氏 山彦除虫菊株式會社事務取締役 有田郡保田村屋尾(出身地)  
大阪市南區東清水町四二(現住所)  
松本平次氏

有田郡八幡村久野原(出身地)  
堺市車ノ丁東四丁(現住所)  
堺警察署警部 森田政隆氏 火災保險代理業 有田郡湯淺町(出身地)  
港區二條通四丁目三五(現住所)  
吉原久太郎氏

武庫郡精道村芦屋(現住所)  
株式會社精工舍取締役 森本武之助氏 大同病院勤務 有田郡御鑓村德田(出身地)  
東淀川區十三南之町七三三(現住所)  
小池惣七氏

和歌山市(出身地)  
南河內郡高鷲村惠我ノ庄(現住所)  
大阪市場江小學校長 菅沼松彦氏 藥種商 中爲吉氏

有田郡湯淺町(出身地)  
西區中通一丁目(現住所)  
花緒商 中房吉氏 東區圖之町四〇(現住所)  
上野伊兵衛氏

有田郡廣村(出身地)  
西區北堀江御池通一丁目(現住所)  
醬油商 濱口八十五氏 辯護士 梅田義憲氏

北區北同心町二丁目(現住所)  
大阪工業試驗所員 有本一雄氏 鑛油商 西區西幸町通二丁目(現住所)  
大西寬一氏

泉南郡吉見ノ里社宅(現住所)  
吉見紡織會社員 井關忠雄氏 藤永田造船所員 西區新炭屋町(現住所)  
岡部遂氏

東區玉造四三〇(現住所)  
大阪高等工業學校助教授 井原敏男氏 齒科醫 東區本町二丁目(現住所)  
加藤潤一氏

住吉區住吉町二〇一二(現住所)  
大阪毛織株式會社員 磯望氏 鑛石商 西區市岡町五五八(現住所)  
神谷忠一氏

浪速區船出町(現住所)  
日本皮革株式會社員 岩上藤吉氏 日本火災保險會社員 三島郡茨木町南清水町(現住所)  
龜井富之助氏

泉南郡土生郷村土生(現住所)  
醫師 岩崎勝之介氏 內外電熱器會社員 東淀川區神津村(現住所)  
河原亮三郎氏

西成區玉出町六七〇(現住所) 三十四銀行員 楠山正夫氏 發明家 寺島昇氏  
 西成區川北村外島(現住所) 醫師 黑田信夫氏 大阪師範學校教諭 豐能郡池田町甲ヶ谷(現住所) 中津尹一氏  
 東區高麗橋三丁目 三井物產會社員 小島留三郎氏 醫師 西村隆行氏  
 府下濱寺町船尾(現住所) 三井物產會社員 阪田賞穗氏 三等郵便局長 浪速區惠美須町二丁目(現住所) 服部本一氏  
 天王寺區勝山町二丁目四(現住所) 畫家 島田悅山氏 住友銀行員 東區北濱五丁目(現住所) 濱宗義氏  
 住吉區天王寺町東中道(現住所) 大分セメント會社專務 田上爲次郎氏 住吉區天王寺町三五九(現住所) 林良一氏  
 中河內郡布施町菱屋(現住所) 宇治川電氣會社員 高尾平五郎氏 豐中中學校教諭 豐能郡池田町二九七(現住所) 東精一郎氏  
 北區安治川通南二丁目(現住所) 船具商 玉木勘七氏 電氣暖房商 西區江戸堀南通一丁目(現住所) 松本龜三郎氏

港區三軒家上ノ町三二二(現住所) 醫師 三尾德之助氏 麻苧商 吉村友吉氏  
 住吉區帝塚山(現住所) 鐘淵紡績會社員 溝端元太郎氏 製材業 大阪市港區小林町北通一丁目一一六 瀬戸喜一郎氏  
 西成區梅南通二丁目二二二(現住所) 村松卯助氏 製材業 大阪市港區泉尾北村町二丁目九四 貴志勝三氏  
 西淀川區大仁町(會社) 森永製菓出張所員 森脇圭一郎氏 製材業 大阪市港區小林町百八拾五番地 廣里常之助氏  
 東成區友淵町二二五 大日本製糖會社技師 山本熊太郎氏 板問屋 大阪市西區立賣堀南通二丁目 山口祥三氏  
 西區九條南通三丁目(現住所) 山本幸次郎氏 電動裝置シャフト製作業 大阪市浪速區難波稻荷町二丁目九四六 山本幸太郎氏  
 西成區千船町佃一九〇(現住所) 辰見商會專務取締役 山本壯氏 無線電話業 片岡確堂氏  
 西區立賣堀北通三丁目(會社) 塚本商事株式會社專務 山本常太郎氏 製材業 大阪市港區境川町壹丁目 中原喜之助氏

神戸在住者

兵庫縣會議員  
大 本 藤 市氏  
海草郡貴志村愛谷(出身地)  
神戸市脇ノ瀨町三丁目(現住所)

乾 物 商  
乾 源 之 助氏  
素麵米穀商  
小 川 茂 兵 衛 氏  
海草郡檜村(出身地)  
神戸市兵庫戸場町三九(現住所)

時 計 商  
和 泉 一 枝 氏  
會 社 員  
奥 才 五 郎 氏  
海草郡日方町(出身地)  
神戸市山本通五丁目(現住所)

洋 服 商  
林 榮 次 郎 氏  
貴金屬時計商  
和 田 安 三 郎 氏  
伊都郡笠田町移(出身地)  
神戸市多聞通五丁目(現住所)

乾 物 商  
西 本 善 之 助 氏  
株式會社田島商店取締役  
海草郡日方町(出身地)  
神戸市磯邊通四丁目(現住所)

諸 會 社 重 役 業  
戶 田 實 氏  
實 氏  
日高郡比井崎村產湯(出身地)  
神戸市平野矢部町一〇(現住所)

近海郵船會社神戸出張所  
土 岐 悅 藏 氏  
薪炭、砥石商  
玉 置 信 吉 氏  
西牟婁郡西富田村堅田(出身地)  
神戸市兵庫東出町三丁目(現住所)

菱中商事株式會社取締役  
中 筋 康 太 郎 氏  
和歌山市南材木町二丁目(出身地)  
神戸市相生町二丁目(店舗)

辯 護 士  
那 須 達 之 助 氏  
紙 商  
柳 田 太 七 氏  
西牟婁郡田邊町(出身地)  
神戸市下山手通六丁目(現住所)

電 機 商  
中 村 豐 氏  
買 易 商  
山 本 博 一 氏  
和歌山市港北町一丁目(出身地)  
神戸市兵庫切戸町一三三(現住所)

運 送 業  
村 山 政 次 郎 氏  
醫 師  
松 島 朗 氏  
有田郡宮原村南(出身地)  
神戸市相生町四丁目(現住所)

器 械 輸 入 商  
打 田 清 氏  
業 業  
松 尾 清 之 助 氏  
和歌山市中ノ店北ノ町(出身地)  
神戸市中山手通四丁目(現住所)

料 理 業  
魚 谷 權 四 郎 氏  
藤 田 商 店 主  
藤 田 俊 夫 氏  
海草郡紀伊村弘西(出身地)  
神戸市兵庫西仲町八(現住所)

千代田信託株式會社取締役  
久 喜 豐 彦 氏  
代 資 會 社 川 崎 輸 出 入 部 社 員  
小 島 朝 一 氏  
和歌山市吹上東徒町(出身地)  
神戸市中山手通七丁目(現住所)

共濟生命保險會社  
神戸支店長

伊都郡登田町佐野(出身地)  
神戸市平野港山町九九(現住所)

加古川銀行神戸支店長

和歌山市秋月(出身地)  
神戸市平野港山町一三九(現住所)  
下村 武一郎氏

綿布商

和歌山市難波町二(出身地)  
神戸市兵庫港町二丁目(現住所)

外國爲替仲立業

和歌山市九番町一(出身地)  
神戸市中山手通四丁目(現住所)  
鹽路 周三郎氏

雜穀商

西牟婁郡下秋津村(出身地)  
神戸市島上町二四(現住所)

料理業

有田郡湯淺町(出身地)  
神戸市三ノ宮町六八(現住所)  
廣岡 昌一氏

合資會社川崎總本店員

和歌山市今福六五(出身地)  
大阪市住吉區阿倍野町六三(現住所)

覺氏

海草郡貴志村榮谷(出身地)  
神戸市都野町三〇〇(現住所)  
井上 安松氏

株式會社鈴木商店支配人

東牟婁郡大島(出身地)  
武庫郡御影町掛田一八二(現住所)

古織商

神戸市中山手通七丁目(現住所)  
龜井 英之助氏

貿易商

有田郡湯淺町(出身地)  
神戸市藝合町二〇三〇(現住所)

阪神競馬俱樂部

神戸市外西灘村岩屋松本  
島本 格十郎氏

銀行員

和歌山市吉田(出身地)  
武庫郡六甲村八幡(現住所)

桃山報德會幹事

神戸市山王町二二(現住所)  
角谷 源之助氏

銀行員

和歌山市吉田(出身地)  
武庫郡六甲村八幡(現住所)

桃山報德會幹事

神戸市山王町二二(現住所)  
角谷 源之助氏

神戸市大井通附屬地(會社)

神戸醋酸會社事務取締役

直江 平十郎氏

金閣寺住職

上京區衣笠町  
伊藤 宗敬氏

三菱造船所員

神戸市和田町三(會社)  
中村 武夫氏

醫師

上京區土手町九太町下ル  
西浦 綱一氏

地金類輸入商

神戸市下山手通八丁目(現住所)  
森田 波三氏

屋

伏見京町三丁目  
岡本 善一郎氏

アイボライト製造技師

武庫郡精道村打出三(現住所)  
谷口 和良氏

文學士

上京區鹿ヶ谷宮前町四八ノ二  
岡本 道固氏

大阪商船會社海技員

武庫郡六甲村篠原四二二(現住所)  
城 保夫氏

銀行員

下京區東洞院蛸藥師  
岡本 勇五氏

醫師

神戸市吉田新田中坪一七六(現住所)  
三島 幾太郎氏

美術細工業

上京區御幸町二條上ル  
岡 黃泉氏

### 京都在住者

會社員

上京區一條通堀川東入ル  
岩橋 大六氏

職工業

石崎株式會社員  
下京區松原通千本西入ル  
岡崎 愛之助氏

上京區塔之段荒神町  
木 材 商 亙 利 平 氏 菓 子 商 根 來 可 澄 氏  
 下京區綾小路大宮西入ル  
大宮病院醫師 川 口 遜 氏 陸 軍 主 計 監 中 村 宗 則 氏  
 上京區東川柳馬場西入ル  
豆 菓 子 商 角 田 政 次 郎 氏 上 加 茂 神 社 神 職 成 瀨 安 麿 氏  
 京都府下山科町  
鐘淵紡績會社工場員 神 田 秀 穂 氏 俳 優 中 村 鶴 三 氏  
 上京區東福ノ川丁二八  
物産陳列所員 金 田 象 之 助 氏 應 芥 燒 却 場 吏 員 中 筋 農 夫 也 氏  
 上京區寺町廣小路上ル  
梨木神社宮司 川 西 光 之 助 氏 畫 家 野 長 瀨 晚 花 氏  
 上京區鞍馬口烏丸東入ル  
醫 師 伊 達 多 仲 氏 炭 間 屋 上 京 區 間ノ町二條上ル 久 保 榮 次 郎 氏  
 上京區麩屋町押小路上ル  
辯 護 士 玉 置 由 次 郎 氏 陸 軍 步 兵 少 佐 京 都 市 外 伏 見 深 草 瓦 町 山 本 義 彦 氏

京都市下京區御幸町四條南入ル  
伊都郡大谷村字柏木(出身地)  
醫 師 前 田 朝 二 氏 修 學 院 教 師 京 都 市 外 修 學 院 村 貴 志 亥 三 郎 氏  
 上京區三條通室町西入ル  
雜 貨 商 松 本 健 吉 氏 絹 布 整 理 業 下 京 區 六 角 堀 川 東 入 ル 弓 倉 儀 三 郎 氏  
 上京區西ノ京伯樂町  
醫 師 幸 野 信 一 郎 氏 メリヤス業 上 京 區 堺 町 丸 太 町 下 ル 三 尾 恒 三 氏  
 上京區高倉二條上ル  
小 林 山 鄉 氏 捺 染 業 上 京 區 下 鴨 宮 崎 町 島 本 包 次 郎 氏  
 上京區廣小路通寺町東入ル  
小 杉 轍 三 郎 氏 海 軍 中 佐 上 京 區 北 野 白 梅 町 森 下 龜 楠 氏  
 京都市東中筋魚ノ棚  
金 物 商 秋 山 德 藏 氏 醫 師 上 京 區 富 小 路 三 條 上 ル 須 藤 光 彦 氏  
 下京區六角柳馬場東入ル  
公 證 人 木 村 安 麿 氏 日 本 勤 業 銀 行 支 店 員 下 京 區 東 洞 院 六 角 下 ル (銀 行) 上 山 英 夫 氏  
 上京區一條通千本東入ル  
京 都 第 二 中 學 校 教 諭 北 西 鶴 太 郎 氏 醫 師 和 歌 山 縣 海 草 郡 加 太 町 (出 身 地) 上 京 區 麩 屋 町 姉 夕 小 路 上 ル (現 住 所) 桑 邱 茂 氏  
 今 井 信 雄 氏



東京方面在住者

三三

東京市本郷區本郷五ノ一九 和泉惣左衛門氏

東京市外目黒九一八

今井修二氏

東京市青山南町六ノ三五

岩崎重次郎氏

東京市神田區鍋町二一

岩崎鐵次郎氏

東京市小石川區竹早町六八

岩崎遼成氏

東京市本郷區駒込分六二

上田篤次郎氏

東京市麴町區大手町大藏省

上山英三氏

東京市青山南町二ノ五一

遠藤慎司氏

會社重役

大倉組社員

醬油醸造業

大學館主

大東文化學院教授

東京商船學校教授

銀行検査官

在舞陸軍主計監

芝公園鐵道省官舎

阿曾沼釣氏

東京市麴町區内幸町(銀行)

淺川靖一氏

東京市外寺島町三二二

伊藤平吉氏

東京市芝區高輪南町五三

井爪丞次氏

東京市外西大久保三三三

飯田紫山氏

橫濱市本牧町

一色幾三郎氏

東京市本所區三笠町七三

泉湧吉氏

新橋保線事務所長

日本勸業銀行債券課主事

メリヤス製造業

東京海上社員

家

英國コーンス商會員

メリヤス商

東京府下大森不入斗一四七六

文部省體育研究所技師

三十四銀行京橋支店員

東京府下大森不入斗一四八二

小笠原道生氏

東京市外新井宿二六七四

大江就三氏

東京市外澁谷町榮通二ノ四

大岡貞三郎氏

東京市外目黒九六〇

大亦觀風氏

協立興業社重役

慶應教授理學博士

日本橋病院長

四十三銀行取締役

東京市外代々木富ヶ谷一四三〇

岡村周諦氏

東京市外代々木富ヶ谷一四八二

岡本武次氏

東京市赤坂區青山南町三ノ五〇

岡本勇五氏

德川家職員

鎌田正七郎氏

東京府下瀧ノ川町田端五一〇

落合麒一郎氏

東京市赤坂區檜町一一五

加地吉彦氏

東京市麻布區飯倉町三ノ一

海渡楠信氏

東京市外池袋大原一三九〇

春日譽男氏

神奈川縣片瀬新屋敷

片山哲氏

東京市外入新井町新井宿一四八〇

金森誠之氏

東京市外西巢鴨宮仲二三三五

金森寅吉氏

東京府下代々木上原

鎌田正七郎氏

三三

東京市外野方町江古田北原七五八  
武藏高校教授 鎌田 都助氏  
關西土地興業重役 東京市小石川區小日向臺町一ノ七八  
大日本木材防腐會社 木村 喬顯氏  
東京市外上大崎長者九二七〇  
神谷 豐太郎氏 在郷陸軍中將 東京市牛込區市ヶ谷谷町四九  
東京市外中澁谷神山七七三 龜井 一彦氏 文部省普通學務課長 東京市牛込區新小川町一ノ一四  
日本郵船會社員 川瀬 善太郎氏 東京電化工業會社取締役 東京府下落合四二五  
帝大名譽教授林學博士 川瀬 善太郎氏 東京府下馬小泉二〇四  
在郷陸軍中將 川瀬 亨氏 宮内省圖書寮職員 東京府原部玉川村瀨田四六  
紀州公論主幹 山崎 鹿之助氏 外務省條約局外交官補 東京府小石川區水道端町二ノ二〇  
鐵道時報局主 木下 立安氏 出版業文明社主 東京市小石川區水道端町二ノ二〇  
東京市外千駄ヶ谷九〇二 木下 友三郎氏 畫家 東京市日本橋區藥研堀町三〇  
小池 盛之助氏

東京府下北品川宿三三三 慶應大學教授 小泉 信三氏 日清紡績會社員 東京市外龜戶町二ノ七八  
東京市龜町區土手三番丁一〇 鐵道時報社員 小島 榮次郎氏 東京市麻布區中ノ町九 崎山 義雄氏  
東京市龜町區集町四 印刷業 小林 又七氏 城口研究所重役 東京市芝區白金今里町八九 山東 宗氏  
在郷海軍機關大佐 兒玉 傳一氏 海運業 東京府下南品川宿七 清水 竹次郎氏  
東京市外大崎町居木橋四六一 畜産業 近藤 楠治郎氏 帝大醫學部教授醫學博士 東京市本郷區千駄木町五〇 鳥蘭 順次郎氏  
東京市外澁谷町元廣尾町三三三 大同電力社員 佐藤 得四郎氏 帝大工學部教授工博 東京市本郷區曙町七 栖原 豐太郎氏  
東京府下駒澤町新町四九一 第一銀行員 佐藤 龍太郎氏 朝日新聞社顧問 千葉縣東葛飾郡我孫子町二二二〇 杉村 廣太郎氏  
橫濱市青木町廣堂一〇六一 貿易商 坂本 義一郎氏 會社員 東京市外澁谷町長谷戸五七 鈴木 春樹氏

東京市外幡ヶ谷本村二二〇  
在郷陸軍少將 鈴木文次郎氏 醫學博士 田村昌氏  
東京市芝區雲房町一三 横濱市港町  
帝大工學部教授工博 瀨藤象二氏 產婦人科醫學博士 大田義一氏  
東京市芝區白金三光町二五九 東京市日本橋區龜殼町一  
帝大農學部教授林學博士 蘭部一郎氏 米穀商品取引員 高垣甚之助氏  
東京市外大崎町上大崎中ノ九四四四 東京府下上駒込一一三  
三井銀行員 田中篤雄氏 鐵道局副參事 高橋忠雄氏  
東京市外澁谷町青葉二〇 東京市外大森町字木原山一七四七  
三井物產社員 田中忠二郎氏 慶大教授法學博士 瀧本誠一氏  
東京府下巢鴨町一三二〇 東京市四谷區永住町二  
建築請負員 田野治作氏 在郷軍醫總監 武田正守氏  
化粧品製造商 田端豐吉氏 醫學博士 東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ九  
株式取引員 東京市外代々木山谷一五二 武部俊雄氏  
田林喜三郎氏 辯護士 東京市外馬込村谷中一〇七三 武村高副氏

東京府下府中町八八六四 正金銀行重役 巽孝之丞氏 富士瓦斯紡績會社員 遠山清太郎氏  
東京市外北品川御殿山三三三 正金東京支店支配人 津山英吉氏 醫師 東京市四谷區須賀町三 豐田鐵三郎氏  
東京市小石川區高田豐川町 工學博士 辻本滿丸氏 會社員 神奈川縣鶴見町花月園樓座 內藤壽彥氏  
東京市日本橋區村松町七 漆器雜貨問屋 角田虎吉氏 正金銀行員 東京市本郷區千駄木町五七 中井長三郎氏  
東京府下大森町鶴渡二〇六〇 寺島章氏 大東文化協會 東京市外井荻町上荻窪三一七 中谷武世氏  
東京府下上目黒五四五 紙商 戶田金太郎氏 齒科醫 東京市東京驛前中央ビル内 中原富一氏  
東京市麻布區市郎兵衛町二ノ八九 銀行員 戶田德之助氏 商工省局長 東京府下荏原町小山四九八 中松眞卿氏  
東京市下谷區南稻荷町五八 產婦人科醫院 土岐卯吉氏 東京帝大講師 東京府下平塚町戸越九〇 中村清彥氏

東京府下大森新井宿二ノ八四  
 貿易商 中村楠太郎氏 中央氣象臺技師 東京市外杉並町馬橋八九  
 西村傳三氏  
 東京市麻布區櫻田町  
 代議士 中村啓次郎氏 慶應大學教授 東京府下大崎居木橋一八七  
 西本辰之助氏  
 東京市牛込區水道町四四  
 代議士 中村 巍氏 在郷海軍中將 東京市外游谷町羽澤二三  
 布目勝洪氏  
 在郷陸軍少將 長澤都五郎氏 商大教授 東京市外高田町旭出六三  
 根岸 信氏  
 東京市外千駄ヶ谷五六二  
 辯護士 成富信夫氏 會社員 東京市外世田ヶ谷下北澤九二六  
 根來泰信氏  
 建築設計請負 東京府下幡ヶ谷九〇〇  
 牲川政次郎氏 會社重役 東京市麴町區中六番丁五三  
 長谷川久四郎氏  
 侍醫醫學博士 東京市本郷區彌生町二ノ四九  
 西川義方氏 會社重役 東京市日本橋區小網町三  
 濱口吉右衛門氏  
 東京市神田區松永町三〇  
 西畑幸之助氏 醬油釀造 千葉縣銚子町  
 濱口儀兵衛氏

東京市麻布區新龍土町六  
 濱口四郎氏 東京日日記者 東京市外幡ヶ谷三九七  
 平尾彌五郎氏  
 紀州物產問屋 東京市京橋區南八丁堀三  
 濱田久太郎氏 錦鷄問祇候 東京市本郷區駒込曙町一三ノ一  
 平塚定二郎氏  
 東京朝日新聞記者 東京府下堀内村本村九八五  
 濱田常二郎氏 橫濱合同運送社長 東京市芝區白金猿町六一  
 平野熊太郎氏  
 鐵道省囑託 東京市外洗足田園都市西堂九三  
 原久米太郎氏 銀行員 東京市外上目黒氷川六三七  
 福田 節氏  
 東京市外大森新井宿一二七六  
 原順次郎氏 書店主 東京市外大井町出石五〇八三  
 福永文之助氏  
 東京市四谷愛宕區住町八  
 坂西利八郎氏 三井信託副社長 東京市外日暮里道灌山上一〇三三  
 船尾榮太郎氏  
 陸軍中將 東京市外大久保百人町二八五  
 日疋信亮氏 警視廳技師 東京府下戸塚町伊勢原八四九  
 星合甚之助氏  
 陸軍主計監 東京市麻布區霞町一  
 久田益太郎氏 醫學博士 東京市芝區西久保廣町二七  
 堀内彌二郎氏  
 銀行重役

東京市外上目黒一〇八〇  
 外交官 本多熊太郎氏 醫學博士 東京市芝區三田三ノ一〇  
 松山陽太郎氏 東京市外遊谷町櫻丘一七  
 慶應大學教授 前川三郎氏 帝大教授林學博士 東京市外遊谷町櫻丘一七  
 三浦伊八郎氏 東京市四谷區仲町三ノ二二一  
 三浦正次郎氏 東京市本郷區眞砂町二五  
 三雲敬一郎氏 東京市本郷區眞砂町二五  
 梨本宮附 三島豐三郎氏 橫濱市本牧荒井三五九六  
 會社重役 三島豐三郎氏 東京市牛込區佐土原町二ノ二〇  
 醫學博士 三田村篤四郎氏 東京市小石川區原町一〇三  
 三宅米吉氏 東京市小石川區原町一〇三  
 高師校長文學博士 村井恒太郎氏 東京府下世田谷町池尻二二九  
 神奈川縣鎌倉町權樂寺四八三  
 村井貞之助氏 東京府下世田谷町池尻二二九

東京市芝區三田豐岡町一三  
 淺野セメント技師 森山隆富氏 官 吏 東京府下巢鴨町上駒込二九六  
 山田秋義氏 東京市小石川區高田老松町五八  
 九州水電支配人 八塚秀二郎氏 大倉商事重役 東京市赤坂區青山南町五ノ四五  
 山田馬次郎氏 東京府下練馬村江古田三七五六  
 在鄉陸軍少將 安井義之助氏 賀陽宮宮務監督陸軍中將 東京市四谷區北伊賀町二四  
 山田良之助氏 東京市外千駄ヶ谷穩田三〇  
 保脇恒吉氏 生命保險重役 東京市本郷區駒込林町二二四  
 山路右近進氏 千葉縣中山町高石神六一  
 柳瀬弘作氏 貴族院書記官 東京市外上目黒町三  
 山本秋廣氏 東京市日本區橋濱町  
 山口榮次郎氏 三井信託會社技術顧問 東京市外下戸塚四八三  
 山本新次郎氏 東京市麻布區飯倉町一ノ一  
 山口熊野氏 金融業 東京市外柏木九六八  
 和田正一氏 東京市麻布區市郎兵衛町一  
 山口恒太郎氏 帝大教授 東京市本郷區上富士前町四二  
 脇村義太郎氏 東京府下大崎中九四四四  
 渡邊行太郎氏 東京市外大崎町山谷三三  
 山崎又次郎氏 浦賀船渠會社總務課長



年百二業創

紀州、酒造、  
最盛、  
本、  
元

社会資合造酒庄茶

九三三(寺妙話電町寺妙州紀)  
九三三

昭和三年十一月十日印刷  
昭和三年十一月二十日發行  
昭和四年九月十日再版印刷  
昭和四年九月二十日再版發行

【非賣品】

不許復製  
全紀州人  
縣外活躍史

編纂人 兼 和歌山市東長町三丁目二十番地  
竹 內 良 雄

印刷者 林 孝 一  
和歌山市雜賀屋町東之町三番地

印刷所 林 正文 行  
和歌山市小松原通一丁目五番地

發 兌 和歌山市東長町三丁目二十番地 紀州協會編纂部

糸

和歌山紡織株式會社

電話三三三六・四六二〇・五二〇四  
電話二七六二・四〇四二・八二〇四

本社工場 和歌山市傳橋南詰  
中之島工場 和歌山市外中之島村  
手平工場 和歌山市外手平  
紀川工場 和歌山市宇治三筋目  
箕島工場 有田郡箕島町

上

山彥除蟲菊株式會社

本社 和歌山縣有田郡山原 電話三六三  
支店 大阪府南區清水町 電話六二七二



別岡印刷所

和歌山市南木町一丁目五十五番地  
電話二六四〇番 振替大八三九一



任 責 限 有

合 組 用 信 山 歌 和

番八六〇二話電 目丁三通新市山歌和 店 本  
番二六二二話電 目丁七通原松小市同 部 支



社 會 式 株 工 染 山 歌 和

(番四二四話電) 町橋石市山歌和 場工社本  
(番〇三七話電) 島北外市山歌和 場工分



社 會 資 合

所 業 工 材 製 安 上

濱町行奉町元市山歌和  
番七五七話電



社 會 式 株 布 綿 山 歌 和

郎 六 嘉 島 福 長 社

丁之中敷屋畑市山歌和  
番八〇五·番七〇五·番三四一話電





和歌山製材所

和歌山外埠小雜賀  
電話三五二番



合資社會

友居製材所

帶鋸部

和歌山外埠中之島錢座  
電話八三三番

國産練茶

駿河屋本店



大日本除虫粉株式会社

終

